丹丹E会

時　報

No.10

1987年5月

京都大学学士山岳会

目　次

巻頭言ーカンペンチンからナムナニへ……近藤　良夫……1

地図

AACKの動きーカンペンチンからナムナニまで……酒井　敏明……4

座談会ーAACKと山岳部の戦後 ……8

高所医学生理学の展望
　ーカンペンチン，ナムナニ，マサコン……松林　公蔵……30

西域紀行ーナムナニ元老団ー行動概要……山口　克……40

崑崙の氷河偵察行……中尾　正義……44

クンジェラブ峠を越えて……藤平　正夫……53

唐古拉山脈・各拉丹冬雪山初登頂 ……小林　正寛……55

クーラ・カンリ初登頂……平井　一正……57

ラサ・成都横断山脈初踏査……平井　一正……62

Glaciological Expedition of Nepal-Langtang Projectに
　参加してー冬のランタン谷での生活……太田　岳史……65

インドヒマラヤCB31峰初登頂……宗森　行生……68

── この表紙の〝AACK〟の文字はカスティラオによってイタリア語に訳され，セビリアにて1503年に出版されたマルコ・ポーロ著『東方見聞録』より採写したものである──京都大学附属図書館蔵

──巻頭言──

カンペンチンからナムナニへ

京都大学学士山岳会
会長　近　藤　良　夫

1985年3月30日，日中友好ナムナニ（納木那尼）峰合同登山隊の日本隊員壮行会の席上，挨拶に立たれた今西錦司さんは，「グルラ・マンダータはAACKが創設されたときからひとつの目標だった。この入ることも難しい山が，自分の目の黒いうちに登れるようになるとは，思いもよらなかった」と，まことに感慨深げに語られた。

そのナムナニが，それから約2か月後の5月26日，日中合同登山隊の8名の隊員によって初めて登頂されたのである。

1982年のチベット高原学術登山隊によるカンペンチン登頂に至るまでの簡単な経緯はすでに『時報No. 9』に述べたところであり，カンペンチンの登頂成功の後，病後の隊長がふたたび成都まで出向いたのも，ラサから始まり，西へ向うわれわれの旅をナムナニへと切りひらくためでもあった。

AACKのナムナニへの努力は，その後もあらゆる機会をとらえて執拗に続けられた。もちろん，このような強い希望をもつ団体はわれわれだけではなかった。同志社大学は1981年スークーニャン山（6250m）の初登頂に成功して，中国登山協会との友好を深め，次の目標をナムナニに向けて，登山許可を得るための努力を重ねつつあった。しかし，このように同じナムナニを目指して両者が競争することは必ずしも好ましいことではなく，また中国登山協会の人たちにも迷惑をかける恐れもあったので，いっそ両大学の山岳会の合同登山隊としてはどうかとの機運もまた，次第に盛りあがっていった。

1983年11月28日，京都を訪問された中国共産党胡耀邦総書記に，林田京都府知事を通じて，中国登山協会と両大学の合同である日中友好ナムナニ峰合同登山隊の計画を書面で提出して，言下に率直な賛同を得ることができた。その後，直ちにこの登山隊の日本実行委員会を正式に発足させ，その委員長に京都府立大学四手井綱英学長をお願いし，副委員長には同志社大学山岳会会長吉村公一氏と近藤とがあたることになったのである。

また直ちに中国登山協会との打ち合わせが北京で行われ，1984年4月には日中合同の先遣隊を現地に送ること，先遣隊，本隊のルートはカシュガル経由，新蔵公路とすることなどが決定された。先遣隊はナムナニの登頂ルートの選定だけでなく，両大学の初めての混成チームが，言語，習慣，社会体制などを異にする中国の登山家たちとともに，全員が共同の目的のためにいかに協力し合うかの大きい試金石でもあった。この先遣隊の成功により，AACKとしても最初の合同登山成功の可能性が確立されたのであって，まさに「案ずるより産むが易し」というべきであろう。

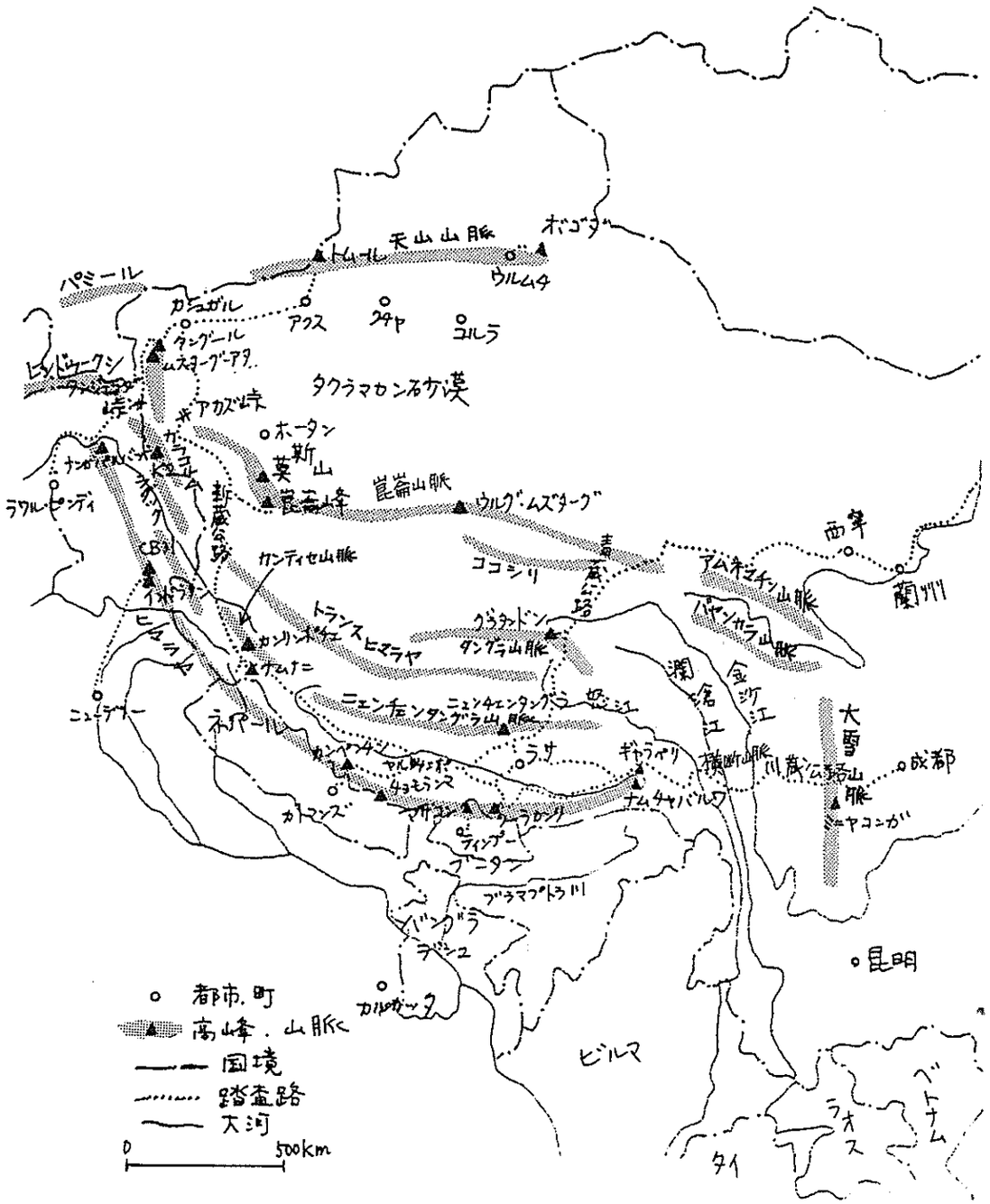
1984年6月の北京における予備会談，同7月の京都における議定書の調印をへて，計画は順調に進んだ。この計画は中国にとっては国家事業であるので，登山隊の主な組織は次のように編成された。

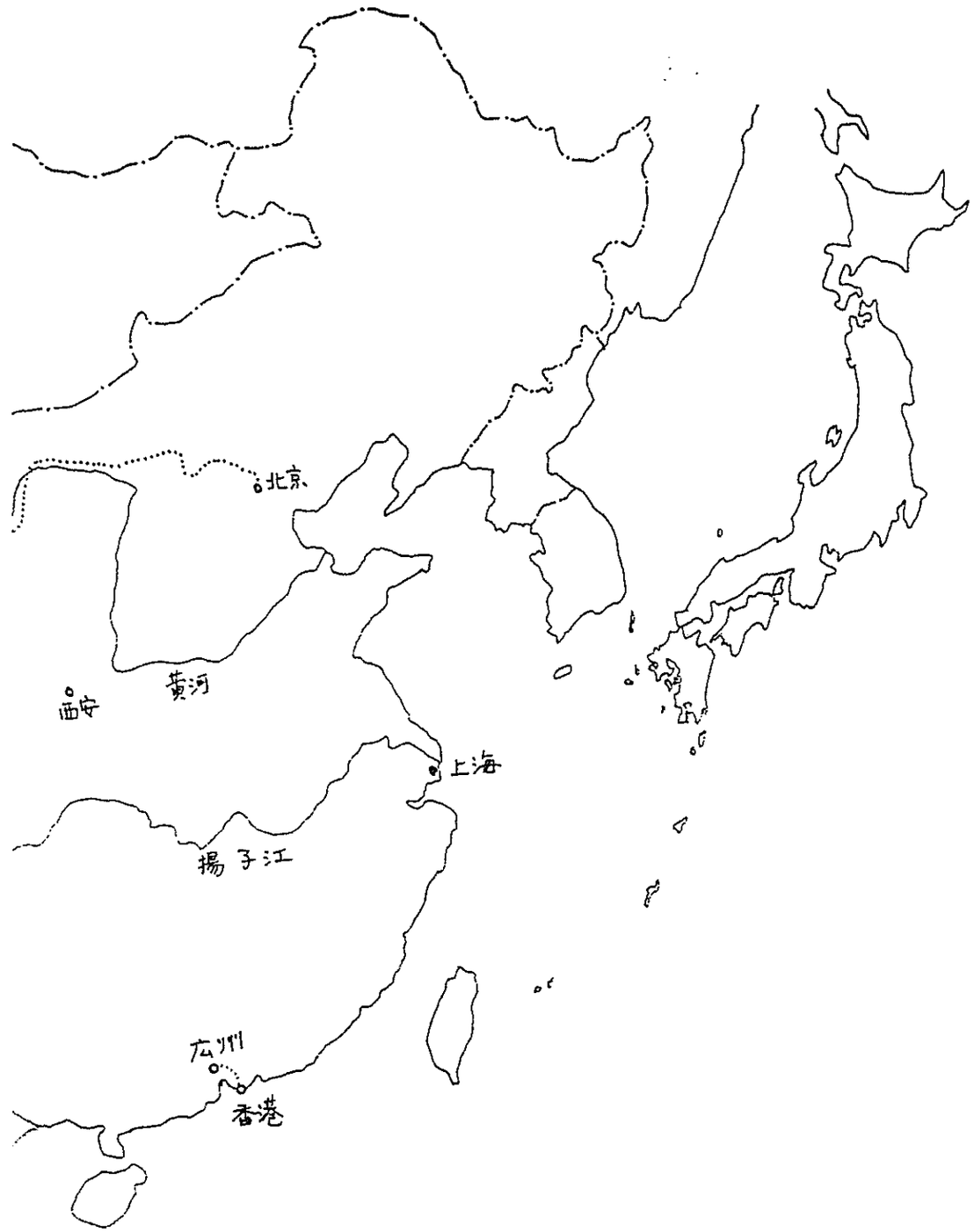
名誉総隊長	李　夢　華
総隊長	史　占　春
副総隊長	斎　藤　惇　生，劉　大　義
登山隊長	平　林　克　敏
日本側秘書長	佐々木　哲　男
登山隊員	日本側10名，中国側10名
学術隊員	日本側5名，中国側5名
報道隊員	日本側6名，中国側6名

隊員の合計は約70名であった。本隊は1985年4月5日に日本をたち，5月26日に登頂に成功したことはすでに述べたとおりである。その後，学術隊のラサ分隊は6月12日にベースハウスをたち，学術調査を続けて同月25日にラサへ到着した。4年前にラサから始まり，西へ向ったわれわれの旅は，このようにして終ったのである。

ナムナニ登山に関する報告は次号でくわしく述べられるが，カンペンチンに始まったAACKのチベット高原学術登山の諸計画が原動力のひとつとなって，山岳部その他の若い世代の人びとの活動がこれらとともに，次第に高まりをみせてきたことも事実であろう。本号ではその一端が述べられる。今後このような活動がなにを目指し，どこへ向っていくかを静かに注目し，またそれらの着実な実現に対して心から声援を送りたいと思う。

1986年10月


天山山脈
ボゴダ
トムール
ウルムチ
パミール
カシュガル
アクス
ヤルカンド
コルラ
タングール
ムスタグ・アタ
ヒンドゥークシ
タクラマカン砂漠
峠
アカズ峠
ホータン
英斯山
崑崙山脈
崑崙峠
ウルグ・ムズタグ
ラワルピンディ
新蔵公路
カンティセ山脈
ココシリ
青蔵路
西寧
アムネマチン山脈
蘭州
トランスヒマラヤ
カンリンボチェ
グラタンドン
タングラ山脈
パヤンカラ山脈
ヒマラヤ
ニェンチェンタングラ山脈
怒江
瀾滄江
金沙江
ニューデリー
ネパール
ラサ
大雪山
成都
ギャラペリ
ヤルツァンポ
ヨムドラス
カトマンズ
ナムチャバルワ
ティンプー
ブータン
ブラマプトラ川
バングラデシュ
カルカッタ
昆明
ビルマ
タイ
ラオス
ベトナム
都市，町
高峰，山脈
国境
踏査路
大河
0
500km


北京
黄河
西安
上海
揚子江
広州
香港

AACK時報　No.10，1987年5月
－AACKの動き－

カンペンチンからナムナニまで

酒　井　敏　明

1　はじめに

本誌第9号にわたしは「ヤルンカンからカンペンチンまで」を執筆させてもらった。1976年5月に発刊された第8号以後，82年4月カンペンチン峰初登頂に成功するまでの期間に，AACKがどんな動きをしたのかを説明したものである。その内容は，イ．五十年史出版計画，ロ．ヤルンカン初登頂，ハ．チベット計画，ニ．将来への模索，の4部からなる。時報第9号は「カンペンチン峰初登頂報告」を特集したものであり，計画構想の発端から実施に移される過程の全部がくわしく記されている。この時報が出た約10か月後に，AACK編『カンペンチン』（毎日新聞社）も刊行されたので，カンペンチンの登山についてはそのAからZまでを知ることができるようになった。

本稿においてはカンペンチン以後の本会の動きを概観することにしたい。敬称を省略することをお許しねがいたい。

2　最初のチベット遠征―カンペンチン―

AACKは処女峰の初登頂をねらう遠征登山隊を派遣する。また，AACKは山岳地域における学術調査をおこなう。この2本の柱は1932年にカブルーを，37年にK2を計画して以来の本会の基本方針であった。いかに世界最高峰のエヴェレストであれ，第2の高峰K2であれ，イギリス隊が1953年に登り，イタリア隊が54年に登った後には，われわれの登頂の目標になることはなかった。ヴァリエイション・ルートによる登攀も本会のいさぎよくこころみるところとはならない。われわれは二番煎じの登山に甘んずることはできないのである。登山の分類を試みるとき，探検的な登山とスポーツ的な登山とを対照点におくとすると，われわれは断固として前者を追求し，その実現のために努力を続けてきたのである。

カンペンチン計画が決定するまでの経緯は前掲『カンペンチン』にくわしいが，そのあとの展開にも関係するので，ここに簡単にふりかえっておくことにしよう。

① 創立50年を記念するに足る事業として，北のチベット側からヒマラヤの未踏峰に登る学術登山隊をぜひ送り出したい。

② 未踏峰のうち高度が十分に高く，位置，容姿など，ほかの面でも一番魅力があるのは，グルラマンダータ（7728m）である。

③ グルラマンダータの登山許可を申請し，その取得の交渉を続ける一方で，中国登山協会と良好な関係を保ち，かたわら，若い会員に遠征登山の経験を積ませるために，中国領内にあって確実に許可を取得できる未踏峰を目標として選ぶ。

④ クングール，ミニヤコンカなどの未踏峰，雲南省内の学術調査などのいくつかの候補地をあげて検討した結果，蘭塔山（ランタン・リ，7239m）の登山許可の申請をする。

⑤ 以前から申請書を出していたネパール政府からランタン・リの許可がおりたがこれをことわり，チベット側から蘭塔山に調査隊を出す。この同じ時期に他の日本隊がネパール側からこの山に登頂したことがわかったので，カンペンチン（康彭欽，7281m）に目標を変更，急遽CMAに許可申請をして，82年の遠征が実現した。

この間に，ネパール政府に電報を打ち，CMAに手紙を書き，さらに，平井一正が率いる神戸大学隊との交渉がそのあいだにはさまれるという，慌ただしさであった。

1982年のカンペンチン計画は会長近藤良夫みずから隊長をひきうけ，隊員12名，中国側隊員7名からなるチベット高原学術登山隊を編成し，3月中旬北京に向かった。1982年4月21日8人がカンペンチンの初登頂に成功，同22日3人が第2登した。標高4650mのベースキャンプ以上の37日間におよぶ登山活動のほかに，地質学・気象学・医学などの学術調査をおこなったというのが，そのおもな成果であった。この隊はアンナプルナ第4峰，チョゴリザ，ノシャック，サルトロカンリ，ヤルンカンに続くAACKの第6次ヒマラヤ遠征であり，5つめの初登頂成功をもたらしたものである。

3　合同遠征隊として実現したグルラマンダータ計画

AACKはグルラマンダータを含む6座の未踏峰の登山許可申請を1978年1月に中国政府に提出していた。それまで外国の登山隊に対して国境を閉ざし続けていた中国政府は，78年には対外開放政策を決定し，79年になると7月に日本山岳会に対しチョモランマ峰の許可を与えることを内示したのをはじめ，同年9月20日までに外国登山隊に8峰を開放することを決定した。中国の登山をめぐるこのような新しい事態の進展に対応して，われわれは80年5月に登攀の対象をグルラマンダータ一つにしぼった許可申請書を出し，カンペンチン隊帰国後もいろんな機会をとらえて中国側と折衝を続けていた。そのうちにはっきりしてきたことは，グルラマンダータにはわれわれのほかに同志社山岳会（DAC）が許可申請を出していること，CMAとしてはこのうちの一方だけに許可を与えることができないらしいということであった。83年夏には暑いAACKのルームでチベット委員会が何度か開かれ，鳩首協議がくりかえされた。AACKがいかに頑張っても中国がグルラマンダータ（中国名はナムナニ，納木那尼）の許可を単独でわれわれに出すことはありそうもない以上，われわれはDACと合同隊を編成してナムナニ遠征を実現するべきであるとの結論に最終的には到達したのである。

83年11月に斎藤惇生がDACの平林克敏氏，京都府日本中国友好協会の吉田興和氏とともに訪中し，北京でCMAの史占春副主席など幹部と正式に交渉するはこびとなった。11月末に中国の胡耀邦総書記の京都訪問のおりに，林田府知事がこの件について陳情するという，異例の政治工作まで展開されたのである。こうして，AACKとDACとが合同で日本側遠征隊を編成し，中国側遠征隊がこれに平等，同数の原則で合同することが正式に決定したのである。隊の派遣主体は，日本側は日中友好ナムナニ峰合同登山隊日本実行委員会（委員長四手井綱英）であり，中国側は中国登山協会である。日本側には後援会（会長桜内義雄氏）が組織され，ナムナニ計画は文部省，外務省の後援を受け，毎日新聞社，毎日放送の協力のもとに報道班の同行も決まった。

1984年4～6月には先遣隊が日本人としては初めて崑崙山脈を越える新蔵公路を通ってナムナニ峰の麓にいたり，登路の偵察と輸送事情の調査をおこなった。85年4～7月の本隊の陣容は，史占春総隊長以下，副総隊長2人，登山隊長1人，登山隊員22人，学術隊員10人，報道班13人，ほかに医師，通信員，運転手，炊事員，通訳など，総計70人に達する大編成であった。このうちAACK会員は，副総隊長をつとめる斎藤惇生のほか登山隊員5，学術隊員3の合計9人であった。DACからは平林克敏登山隊長ほか7人が参加した。

同隊が中国新疆維吾爾自治区の莎車（ヤルカンド）から崑崙山脈の西部を越えてチベット高原にはいり，インダス河とサトレジ河の源流域，聖湖マパムユムツォを経てナムナニ峰の麓にいたったこと，5月26日に日中8人の第1次アタック隊（AACK会員は松林公蔵と吹田啓一郎の2人）が未踏峰中高度第2位のナムナニの頂上に立ったこと，土壌，地質，気象，医学などの学術調査がおこなわれたこと，一部の隊員（AACKは西山孝）は帰路にヤルツァンポ河渓谷沿いにラサに出る新しいコースを踏査したことなどは，1986年6月に刊行された日中友好納木那尼峰合同登山隊編『ナムナニ』（毎日新聞社刊）に詳細な報告がある。

合同登山隊がAACKとDACとが合同し，この日本側の隊がさらに中国側の隊と合同して誕生したものであってみれば，これは不可避のことであるが，このナムナニ計画においてはどうもAACKの存在感が薄い，または，軽いという印象を与えられるのは残念ながら否めないであろう。チョゴリザに初登頂したのはAACK隊であり，ヤルンカンはAACKが初登頂した山だというのと同じ意味で，ナムナニはAACKの山だということはできないのではないだろうか。

4　チベットの未踏峰はいつまで残るか

現在，中国の山に登りたいという世界各国の登山家からの許可申請がCMAには殺到しているようである。中国の国内においても，全国組織の中国登山協会ばかりではなく，その各省・自治区山岳協会その他の組織が，独自の登山活動をはじめつつある。こういう状況にあってみれば，未踏の最高峰ナムチャバルワ（南迦巴瓦峰，7762m）が早晩登頂されるだろうことには，もはや疑問の余地がない。今まで崑崙山脈の最高峰と目されていたウルグムズターグ（木孜塔格峰）は，79年12月発行の中華人民共和国地図集では高度7723mとなっていたのに，今では高度6973mとされて，7000m峰の座からすべりおちてしまったのである。それどころか，R．ベイツ，N．クリンチ，T．ホーンバインなどアメリカ山岳会のそうそうたる顔触れをそろえた中国・アメリカ合同遠征隊が85年秋にはじめてこの山域に踏み込み，10月21日中国人隊員5人が初登頂に成功したのである。隊員の1人周正の報告が中公新書『崑崙の秘境探険記』としてすでに刊行されている。

アッサムヒマラヤの未踏峰クーラカンリ（庫拉崗日，7554m）には平井一正が指揮する神戸大学隊が86年春に登攀を試み，4月21日見事に初登頂した。

ついでながら，京都大学山岳部のブータンヒマラヤ遠征計画にも一言しておく必要があるだろう。85年秋のマサコン遠征隊には堀了平隊長ほかAACK会員10人が参加し，10月13～15日の3回のべ12人の登頂成功に大きく貢

献したのである。マサコン峰の高度は7200mと公表されてはいたが，実際にはそれより約400m低いようである。それにしても，会員中尾佐助が日本人として戦後初めてブータンヒマラヤに接近してのち四半世紀にしてはじめて，われわれの仲間がこの山域の初登頂に名乗りをあげたのである。グルラマンダータへの道は長く険しかったが，ブータンもまた遠く遥かな国であったと思わざるをえない。

5　エクスペディションを考えるとき

崑崙とヒマラヤの両山脈のあいだ，チベット高原上には，ココシリ（可可西里），タングラ（唐古拉），ネンチェンタングラ（念青唐古拉），カンティセ（崗底斯）などの山脈群が並び聳えている。これらの山域にはまだ十分に調査されていない部分も残っているようだから，6000m級はいうに及ばず，7000mを超える未踏の峰も幾つかあると想像される。AACK会員が有志あい寄って計画を練り，いわゆるティルマン流の小遠征隊を編成し，自己流の山登りを楽しむ道はもちろん残されてはいる。しかし，AACKが会の総力をあげて取り組むに値する対象となるような立派な山を見出すことは，むずかしいと思われる。中国領内にとどまらず，ほかのどの地域においても，このことは不可能と断言はできないまでも，きわめて困難であろう。個々の会員が自分の力だけを頼りとして山に登ろうとするのであれば，探検的登山に固執する必要もないわけである。

AACKが今後いかなる活動をするべきなのか，何を目標とし，何を追求することが要請されているのかを，再考する時期がきていると思われる。

6　50年史記念出版の事業について

刊行の実務については，ある出版社とのあいだにおおよその計画ができあがっている。原稿の作成が一番の難関であるが，第1次原稿の執筆を斎藤清明に引き受けてもらい，現在およそ3分の2ができあがっている。編集委員会がこの原稿をもとに検討を加え，必要な場合には最小限度の修正をするという方針で，作業を進めているところである。この報告書に収録しきれない分については，本誌を利用して，公刊することになるだろう。

以下には，資料としてAACKが戦後に広義のヒマラヤ地域に派遣した遠征登山隊の公式報告書および隊員の出版物を，順序不同にあげておくことにする。各位のご教示を得てより完全なものとしたい。

AACKが送ったヒマラヤ遠征隊の刊行物

1）アンナプルナ　1953年9～11月
隊長今西寿雄ほか6名
アンナプルナⅣ峰7525m試登

京都大学学士山岳会『アンナプルナ日記』
茗渓堂 24＋167 pp　1956－6－25

京都大学学士山岳会「アンナプルナ・1953年」
『山岳』49年：88－129　55－9

今西寿雄　「夢去りぬ　速風と共に」
『岳人』69：34－37　54

伊藤洋平　『回想のヒマラヤ』
山と渓谷社 158pp　55

伊藤洋平　『雪と光と夢』写真集
白水社50＋30 pp　56

伊藤洋平　『山と雪の青春』
三笠書房 280pp　58－6

藤平正夫　「ヒマラヤ登山と気象」
『天気』1－4　54

藤平正夫　「ヒマラヤにおける危険性」
『山と渓谷』241　59

伊藤洋平　「現地ルポ　京大アンナプルナ遠征隊1～5」
『岳人』67～71　53·54

2）チョゴリザ　1958年5～10月
隊長桑原武夫ほか11名
チョゴリザ7654m初登頂

京都大学学士山岳会　『チョゴリザ』
朝日新聞社88＋138 pp　1959－10－25

桑原武夫　『チョゴリザ登頂』
文芸春秋新社 241 pp　59－3－20

加藤泰安　「チョゴリザ登頂」
『山岳』54年：1－48　60－3－20

藤平正夫　「チョゴリザ登頂」
『岳人』129～131　59

藤平正夫　『今は風に語らしめよ』
桂書房314 pp　86－11－30

平井一正　「チョゴリザ登頂に思う事」
KUAC『報告』7：18－19　59－8－1

T. Kuwabara　The first ascent of Chogolisa
A. J. 64：168－174　59

T. Kuwabara　The Ascent of Chogolisa
H. J. 21：78－85　58

3）ノシャック　1960年5～10月
隊長酒戸弥二郎ほか5名
ノシャック7492m初登頂

京都大学学士山岳会　『ノシャック登頂』
朝日新聞社64＋72 pp　1961－6－10

酒戸弥二郎　「ノシャック登頂」
『山岳』56年：43－62　62－3－30

吉井良三　「ノシャック遠征始末記」
『世界の旅』22：13－26　61－5

Yajiro Sakato　Ascent of Noshaq
H. J. 22：153－157　60

酒井敏明　「ノシャック遠征に関する覚え書」
KUAC『報告』9：9－10　61－12－25

4）サルトロカンリ　1962年5～8月
隊長四手井綱彦ほか9名
サルトロカンリ7742m初登頂

京都大学学士山岳会『サルトロ・カンリ』
朝日新聞社63＋93 pp　1964－1－10

加藤泰安　「サルトロ・カンリ登頂」
『山岳』58年：29－62　64－3－30

四手井綱彦他「サルトロ・カンリ」
『AACK時報』2：1－64　63－7－20

今西錦司，桑原武夫他「座談会サルトロ・カンリ遠征をめぐって」
『AACK時報』3：2－16　64－5－30

加藤泰安　「登頂サルトロ・カンリ」
『文芸朝日』62年11月

加藤泰安　『森林・草原・氷河』
茗渓堂 446 pp　66－9

高村泰雄　「サルトロ・カンリ」
『カラー世界の山々』
山と渓谷社：73－74　67

高村泰雄　「カラコルムの名峰18
サルトロ・カンリ」
『岳人』384：113－115　79－6

T. Shidei　Pakistan-Japan Joint Karakoram Expedition to Saltoro Kangri, 1962
H. J. 25：143－153　64

T. Shidei　The Ascent of Saltoro Kangri
A. J. 69：73－80　69

5）ヤルンカン　1973年2～5月
隊長西堀栄三郎ほか14名
ヤルンカン8505m初登頂

京都大学学士山岳会『ヤルン・カン』
朝日新聞社72＋166 pp　1975－12－10

樋口明生　「ヤルン・カン初登頂（1973年）」
『山岳』68年：1－19　74－4－30

樋口明生他「ヤルン・カン学術報告」
『AACK時報』8：1－73　76－5－15

「ヤルン・カン遠征報告・検討会」
『AACK時報』8：75－128

京都大学学士山岳会ヤルン・カン遠征隊
「8505メートルの処女峰
ヤルン・カンに立つ」
『山と渓谷』420：11－16　73－9

京都大学学士山岳会遠征隊
「ヤルン・カン　初登頂と遭難」
『岩と雪』34：78－85　73－12

上田　豊　『残照のヤルン・カン』
中公新書269 pp　79－8－25

6）カンペンチン　1982年3～5月
隊長近藤良夫ほか12名
カンペンチン7281m初登頂

京都大学学士山岳会『カンペンチン』
毎日新聞社212 pp　1983－7－5

森本陸世　「カンペンチン」
『山岳』78年：21－28　83－12－1

京都大学学士山岳会チベット高原学術登山隊
「カンペンチン峰初登頂報告」
『AACK時報』9：10－56　82－9－20

斎藤清明　『チベット旅情』
芙蓉書房269 pp　83－7－15

座談会

ＡＡＣＫと山岳部の戦後

日時：1986年9月7日　午前10時半〜午後4時

場所：京大楽友会館

出席：西堀栄三郎，中尾佐助，近藤良夫，藤平正夫，池田孝蔵，林　一彦，山口　克，藤村　良，斎藤惇生，平井一正，酒井敏明，岩坪五郎，斎藤清明，吹田啓一郎，伊藤宏範，中山茂樹

岩坪　皆さま，お忙しいところをありがとうございます。今日の会は『AACK50年史』編集の委員会(近藤,酒井,岩坪，斎藤清，伊藤）がお呼びしました。今年（1986年）の春から斎藤が，『50年史』を書き始めましたが，AACK創立のころは，つい最近，今西錦司さんの家から，『AACK会報』1号から5号までが出てまいりまして，今までAACKの設立が昭和5年だといわれていたのが，昭和6年の5月24日に，ここ楽友会館でAACKの第1回の設立総会を開いた，会長に木原先生がなった，というふうなことがかなり詳しくわかってきました。

ところが，戦中戦後のごたごたした部分，そこからAACK再建，ヒマラヤへ，というふうなところがもう一つよくわからない。そこで，その当時の方々にお集まりをいただいて座談会を，ということになりました。

今日おいでくださいます予定は，西堀先生，中尾先生，戦後いわゆる京大山岳部を作った池田さん，藤平さん，林さん，それから三高山岳部の出身の人たち。

昔から例えば泰安さんなんかが，「三高だといってあの野郎，山にも登れねえくせに威張りやがって」というふうなことをいってましたが，そのへんのことも。また南朝だ北朝だという話も出てまいります。洗いざらいことあげようというわけではないですけれども，全体の流れをくむためにそういうふうなことを，我々は，一応，知ってたほうがよいのではなかろうか。歴史というのは，結局，そのときそのときの権力が，自分の今までやってきたことを位置づけするために書く，というわけですけれども，だいぶ戦後からの時代も経ちまして，今や，ごたごたしてましたことが，大体，スーッと一本化してきた。その点で，『50年史』を書くというのも非常に適した時期ではなかろうかと思っておるわけです。

中尾先生は，八高を出て，京大の旅行部に入られ，今西さんらと一緒にあちこち探検に行って，帰ってこられた。そんな立場からも，割合，やや冷ややかにお得意の意見を述べていただけるのではなかろうか。近藤先生は，昭和17年に京大入学で，本当は京大旅行部で活躍しているはずなんですけども，そのころの京大旅行部というものが，いろんな高等学校を卒業してきた人たちを吸収，一緒にまとめていくというふうなアクティビティーがだいぶ下がっていたのではないかといわれてますね。藤平さんは昭和18年の秋，池田さんは昭和20年の入学で，林さんは昭和20年入学でよろしいんですか？

林　私は，富山高等学校を19年卒業になってます。藤平さんは？

藤平　僕は18年卒。

林　僕と1年違い。

藤平　じゃあ，繰り上げてきているんだな。9月に卒業なんだ。

林　あすこらへん，半年のがあるんです。

藤平　私のは半年ちょんぎられている。本当は3年なら19年3月卒なんだ。

山口　林さん，17年に入学ちがいますか，富山高校？

林　そう17年　わしは大学は24年卒業だから，京大入学は20年でいいでしょう。

岩坪　それから，藤村さんが23年に京大に入っておられる。山口さんは24年。斎藤Ｙさんも昭和24年入学，医学部ですから30年卒業。そういう方に集まっていただきました。

ざっとした話は，戦争が始まってややこしくなって，戦後はもたもたしまして，それから山岳部のボックスが焼けたという話なんかもあり，いろいろとごたごたいたしまして，それで，結局，アンナプルナ，チョゴリザになって，現在へ移行してくるわけなんですけども，一応，こういうこともあったというのを出していただきたい。

それでは，中尾先生から。昭和14年に入学されて16年に卒業ですから，ちょうど戦争が始まったときに卒業される。そのへんから後を話をしていただけないでしょうか？

中尾　それじゃあ最初ですがね，初めにちょっとAACKの年表（『AACK時報3号』1964年5月，『京都大学学士山岳会会員の海外活動記録』1980年6月）に追加訂正を。1943年の「森下・中尾，小興安嶺」というのがありますな。その文献を一つ，『岳人』に出した。それから，44年「9月から翌年3月まで今西・梅棹・加藤・中尾、内蒙古（ダルハン）」と書いてある。これの中にね，今西さんと僕と2人でダルハンオーラという山に馬に乗ったまま登頂しているんです。それを，やっぱり，『岳人』に書いてあります。

藤平　拝見させてもらった覚えがあります。

ＦＦとＡＡＣＫ

中尾　私が一番情報があるのは，FF（生物誌研究会）の問題じゃないかと思う。戦前の旅行部の関係者は大勢入っていた。戦後の山岳部のその当事者もおるし，戦後の活動は，まあ大体，FFから始まっている。Fauna and Flora Society。FFは山登り団体じゃないけれど，FFの活動でヒマラヤが始まるわけです。FFをどの程度AACKの年表の中に突っ込むか。FFという団体は，現在開店休業，開店もしていないという状態になっている。もし必要なら，その関係者としては，今は，今西さんがおる。それから梅棹君もおる。FFの内側の関係者は，それから土倉君も一時期深くかかわっている。

斎藤清　一番最初の事務局員ですね。

藤平　そのFFが年表によると，「1950年（昭和25年）誕生」となってますけども，時期はこれでいいんですか？もうちょっと前からあったような気がしたんですが。

斎藤清　西堀さんがインド，ネパールへ行かれる前の年からありますね。あのとき，毎日新聞から金が少しずつ出て，その会計簿が残っているんですよ。だから遅くても1950年の10月10日ぐらいから活動が始まっている。

中尾　それで，FFの資料を全部，なんだったらAACKに保管してもらう手はあると思うんだけどね。

岩坪　もうそれでなかったら保管するところがなくなってしまいますね。

中尾　なくなってしまう。現在，FFの責任者の形になっているのは，北村先生。あすこに何らかの資料はあると思う。今西さんが賛成したら，北村さんのところにある資料をAACKがもらいうけてもいいと思う。必要だったら，その交渉を僕がやります。

岩坪　川喜田さんのお姉さんがそれを実際保管してるわけですよね。

斎藤清　いや，実は，川喜田春子さんについ1週間ほど前に電話でうかがったんです。そしたら，その資料は教室に残ってるはずとのことです。

中尾　とにかく，FFの最後の会長の北村さんが，それをAACKに渡そうということに了解すりゃ，AACKがもらえることになる。

AACKとFFの関係というとFFの話からしようか。あのヒマラヤ計画に伴って，FFができたんですがね，その前身がなかったかというと，あることはあった。人文科学研究所の中に。

斎藤清　藤枝晃さんですね。

中尾　藤枝さんが事務局長だった自然史学会。大体，戦争中の大陸での活動を中心にして，自然史学会の本を今西さんが書き，梅棹君も書き，私も書いた。これは年1回で数冊の出版で終わりになりました。

酒井　『自然と文化』という題ですね。

岩坪　それと探検地理学会というのは何かありますか？

中尾　それは戦前の話になるな。探検地理学会ができたのは，戦争中の昭和14年。つまり，13年に内蒙古の木原探検隊があった。これには今西さん，鈴木信ら大勢，旅行部関係の人が入っています。それから帰った後，さらに探検を促進しようとして，探検地理学会を作った。ポナペ島は，確か，探検地理学会の企画の形になっている。今西さん隊長で，僕も参加している。

その流れは，戦後になって伊藤洋平が，「講和条約が調印されるから，また，ヒマラヤをやろうじゃないか」といい出したのが発端で，最初は梅棹，洋平，私とたぶんその3人だったと思うがな。それに毎日の京大の記者を連れて，木原先生のとこへ，「ヒマラヤ計画をやろうかと思うが」と話をした。まあそれが，マナスル計画になり，毎日新聞社が後援になっていくわけです。いろいろと経緯はあるけれども。そしてヒマラヤにどういうふうに進んだかというのは，この徳岡君の本（『ヒマラヤ　— 日本人の記録』毎日新聞社，1964年）にかなり入念に書いてある。その話は，大体，僕がしゃべったんですよ。

斎藤清　そうですか。

中尾　ところがね，もう一つAACKとFFの関係で大きいのは，カラコルムヒンズークシ探検隊がある。これは戦前の伊藤愿，K2の計画がずっと尾を引いている。そのときももちろん木原さんが……。

斎藤清　隊長の予定。

中尾　ここで，今西さんと木原さんの関係という，部外秘かもしれんけど，どんなもんであったかというと，エピソードがあります。それは今西さんは京都駅のプラットホームで木原先生に土下座して謝ったこと。FFでヒマラヤ計画を進めている途中でね，今西さんがある席で大変ご機嫌を損じた。今のところ，木原先生は死んだけ

ど，今西さんは生きておる。ちょっとはばかりある話だけど，今西さんはそのとき京都駅のプラットホームで土下座して，そして木原先生に謝った。その光景は，お供をしとった望月明さんから私は聞いた。周りの人が不思議そうに，「どうして今西さんみたいな人がこんなところで土下座するんだろう」と。でも今西さんはね，「なに土下座なんかしても，後はパタパタと払えば終わりだよ。これでヒマラヤへ行けると思えば安いもんだ」と。

林　中尾さんは，もういっぺん今西さんの土下座を見ていますよ。

中尾　今西さんは，木原先生が教授になったとき，教室は違うけれど，同じ農林生物学科の子弟の関係にあった。つまり，土下座が2人の関係がどういう関係であるかということが，実に象徴的に出てる。それをまあ一つ，そのころの事情として処理してください。

岩坪　酒戸弥二郎さんが，AACKの会員になったとき，「木原先生が，『桑原君，西堀君，今西のヤツ』といわはった」というてた。

中尾　「今西のヤツ」という式だった。しかし，木原先生は今西さんをよく認めとった。

岩坪　それを聞くと，林さんとザッカスみたいような関係やな。

中尾　今いったように，木原先生が，結局，全部の登山探検グループの大ボスであった。一方，木原先生は，自分の小麦の研究からパンコムギの先祖探しという戦前からの企画があった。イランにあるだろうという見通しのもとで，イランの植物探検の計画，そのときも既に毎日新聞社に話が通じていた。毎日新聞社は石川欣一という人が木原先生と非常に近しい関係にあった。

斎藤清　モースの本なんか訳していますね。

中尾　イラン探検は，具体的には，もう毎日新聞社後援が内諾できておったようなもの。そして，戦争中にその準備が始まり，飛行機，自動車を使う空地連絡無線の演習をAACKが下請けでやった。AACKではなく，旅行部か。それが，「富士山の空地連絡」として，『山岳』に出ている。

岩坪　クウチ？

中尾　「空」と「地」。そこの無線はどんなものかというと，使ったものは波長5メートルくらいの，今のテレビの電波。ドングリ型の小さい真空管が出てきて，珍しくてね。当時としては非常に最新式だった。そんなものを使って空地連絡をやった。冬の樺太行は行きがかり上，毎日の石川さんが最後になにがしかの金を出してくれた。そして，再び，無線連絡の犬ぞりの上に無線機を置いてそういうことをやった。それが続いてくるのもカラコルムヒンズークシ探検隊なんだ。

ネパールが，大体，1952年，53年の2回で成果の目星がついて，次は，一つはマナスルはうっかり日本山岳会にやってしまったから世界第2のK2を京大の手によってという前からの行きがかりと，それから，木原先生の小麦の起源。ところがね，カラコルムに入るころには戦争中にパンコムギの親の一つ，タルホコムギがもうわかっていた。ところが，それのいろんな変種だとか，分布地域だとか，いろんな生態的な問題が残された。それを前のイラン探検のときの執念にしたがって，再びやろうと。京都の日本新薬の鈴鹿紀君，これは木原教室の出身です。あすこの当時の主力薬品のサントニンの原料植物，ミブヨモギをパキスタンに採集に行った。それが1952年です。そして持ち帰ってきたのから，タルホコムギがパキスタンの西北にもあるということがわかった。そこで，カラコルムヒンズークシ探検隊はだね，まあそのとき，山のウエイトをどれだけにするか，探検，生物，学術調査をどれだけにするか，大議論がある。AACKと猛然ともめた。そのとき，AACK側の当事者がここにおる林君です。覚えがあるか？　カラコルムヒンズークシ探検隊の前の企画段階のAACKとFFがもめて喧嘩状態になった。

林　それは，鈴木信が一緒におったときの会合じゃないですか？

山口　「京園」でやったんとちがいますか？

岩坪　それいうときには，鈴木さん，その上の四手井さんやらが山登り派の応援をしはって，今西一家と喧嘩するわけでしょう？

中尾　そこんとこはね，僕はその会合にほとんど顔を出しておらんですね。結局，FFは，AACKと登山を切り捨てて北部の氷河地帯の偵察だけをやることになった。そうして，パキスタンのカラチを出発点にして，木原さんが，パキスタンの西北部のまずタルホコムギの位置関係，東端をおさえ，アフガニスタンに入り，イランへという調査計画が。片一方の氷河隊は，カラチからカラコルムに入るという2つのプランができた。鈴鹿君のタルホコムギ発見からです。四輪駆動車2台をトヨタに頼んで，それがトヨタが応じてくれて，そしてスカッとカラコルムヒンズークシ探検隊の全計画が成り立った。カラチを出発点とする全計画が。英文の報告書があるな。

岩坪　8巻。

中尾　ネパールの場合は3巻。

岩坪　今ので中尾先生の場合，さっと1955年までいきましたけど，そのネパールの3巻，学術隊で中尾さんと川喜田さんが行かれる。そこんところは，そういういざこざなしでスッと行かはったんですか？

中尾　これはね，まあ，アンヒビアン，両生類という立場。まあ，僕は登山家として，俺は登山家だ，という顔はあんまりしておらんつもりだけど，いくらかは登れるというぐらいのこと。しかし，ネパールで好きなこともやって，その結果があいうふうになった。

山口　ネパールのいざこざというのはないでしょう。対JACに対する問題でしょう。

中尾　JACに渡したのはね，僕の記憶では西堀さんだ。西堀さんは自分でネパールへ入って交渉した。ところが，FFの名前を使っても誰も相手にしてくれんという。

斎藤惇　ネパール側がですか？

中尾　ネパールやその他の関係者が，数か月前に作った私的な小さな団体の名前では，どうも権威がなくて交渉が非常に難儀だった。これはやっぱり，日本山岳会の名前を借りるべきだろうとなる。西堀さんの，日本山岳会に登山は譲ろうという発案で，東京の会議は僕も同道していった。日銀の中だった。

斎藤清　JACに譲り渡すとき。

中尾　日銀のね，JACの理事，藤島さんだったかなあ。日銀の奥まった部屋に入ると，そこで登山計画を譲り渡した。西堀さんがカトマンズに滞在中に大急ぎで作った登山のアプリケーションを出しておいてね，それがすぐ通って許可が来るとは思わなかったんだよ。それが，今のマナスルを譲り渡しの交渉が済んだ後に京都大学へ来たんだがね，学内でしばらく止まっとった。FFという名前が学内でもわからなかった。「こら，なんの手紙だろう」ということで。それがやっと届いて，どれぐらい止まっておったか僕もよく知らんけど，ああしまったということになった。

藤平　僕があの当時，西堀さんから聞いたのによると，ネパール当局者というのは，イギリスならAlpine Clubがあり，アメリカならAmerican Alpine Clubだといったものしか知らなかった。だから，日本なら大学の名前を出しても全然わからずにJapan Alpine Clubだという認識しかないんで，どうしても日本山岳会という名前でやるほうがいい，というのが僕が西堀さんからその当時直接聞いたわけですがね。

斎藤清　いわゆるナショナルチームのような形という？

藤平　いやいや，向こうの山岳会に対する認識は，その程度だったということなんだ。どこにもここにもあるとは思ってもいなかったんだね。国家的に代表しているものだけしか頭にないわけね。

京大山岳部の発足

岩坪　そのへんはご本人がやってこられますので……。では，池田さんは，午前中でお帰りになるので，池田さんが山岳部，京都大学にお入りになったころの状態というふうなことを先にうかがうのをお願いしたほうがいいと思いますけど。20年に入られるわけですね。そのときには，藤平さんは18年の秋ですから……。

池田　おらへんな。学校におらなんだ。

藤平　ちょっといきさつ話しますとね，18年の9月に入って，10月か11月，ともかく12月が学徒出陣，その前だったと思うんですが，私，京都の一緒の下宿に旧制富山高校の山岳部の先輩がおった。斎藤さんという，今，大建工業の社長です。で，斎藤さんに京大の旅行部に入りたいんだけども，どうしたらいいんだろうというたら，「うん，旅行部というのは，わけがわからんようになっちゃった。なにしろ残っているのはスキー班，ハイキング班，それからハイキングのほかに，例えば鴨川でホタルを見る会とか，そんなようなのがあるんで，ともかく，その連中集まっているから来いよ」というんで，僕は旅行部のコンパと聞いて出ていったんですよ。ここ（楽友会館）であった。そのときのスキー班のキャプテンが有光弘さん，今，どっか大きな会社の社長さんですわ。

山口　住友軽金属工業の社長。

藤平　あの人なんですよ。その前の春に斎藤さんと立山へ来てたことがあるんです。私，ちょうどウロウロしておったもんですから一緒に一ノ越，竜王の東尾根を登ったんですよ。私がずっとリードして上がって，有光さんも一緒に登った。有光さんは，本来はスキーなんです。で，有光さんもおるからというので出てって，自己紹介やっていろいろ話をしておったら，スキーのレースの話ばっかりなんですよ。神鍋の大会でどうだったとか。これは，全然違ったところへ来たなと思った。これは深入りせんうちに逃げたほうがよかろうということで，たまさか，やっぱり旧制富山高校のOBで南という人がおったんです。実は，私の義理の兄貴。高等学校は3年か4年上だったんだけれども，落第を重ねてきて，大学3つめだったかなあ。京大で一緒になった。南さんと一緒に，じゃ行こうかといって行ったらそんなことでしょう。で，僕は，こいつは深入りしちゃいかん，早く逃げなきゃと思って立ち上がってね，「どうも，全然場違いで来たような気がする。私はスキーのレースなんてのは全く興味がないんで，いわゆる伝統ある京大旅行部，山ということについて憧れて来たんで，どうもこれは，ここにおってもしょうがない。これで失礼する」と立ち上がって帰ったんですよ。そしたら，有光さんや斎藤さんは大慌てで，「待て待て待て」というんだけれども振り切って帰っちゃった。南さんも一緒にトコトコと出てきて，この近衛通を百万遍へ向かって歩いてきた。晩8時ごろだったと思う。まだ暗かった。2人でくだらんことになったなといいながら歩いてきたら，後ろからバタバタと追っ

かけてきたのが一人おって，「いや俺も同感だ。俺も席を蹴って出てきた」と。「京大旅行部，京大の山の伝統というのは，一体，どこへ消えたんだろう」と嘆くのがいる。それが伊藤洋平なんですよ。洋平に，戦前会ったのはその１日だけなんです。僕は，それからすぐ翌年，兵隊に行ったから。

中尾　ちょっとそこで，そのころ，僕は旅行部だったんだけれど，戦争中で忙しくなった，いろんな意味で。海外へ出たわけです。モンゴルだとか満州だとか。

藤平　主力メンバーいないんですよ。

中尾　でね，旅行部そのものはね，面倒みずにほっぽなしていく。

山口　いや，そのへんとこ，この前，三高の山岳部の内輪の集まりがあって，ちょっと旅行部の話が出た。そのときの吉良さんの話では，「旅行部というのは，大体，海外遠征を目的とした集まりである。ところが，戦争の情勢で，学生が海外に登山とか，遠征で行くというのは禁止された。そこで旅行部があっても意味がない」と，吉良さんのいうてはったんでは，「昭和17年に旅行部は解散した」と。それ，近藤さん来られてからもう一回確かめてほしいんですけどね。

斎藤清　近藤先生は，旅行部に入ってないというてました。

山口　そやから，旅行部は17年で解散してしまったんで，近藤さんやらが入ったとき，旅行部というのは，京大にないわけですわ。ほんで，三高の山岳部の連中が，京大旅行部がないから京大のそういう関係のところは無視して，結局，ＯＢは京大ではそういうものに入らないで三高の山岳部の面倒をみて，皆一緒に行ってた。だから，近藤さんからもうちょっと上の連中からは，三高の中では山岳部と探検地理学会なんかが，大論争やっとった。それで，梅棹，川喜田，それから，市原実なんかがその探検地理のほうに行って，野田吉兵衛とかの山を主に行ってた連中というのは，そのままで三高の連中と一緒に山へ行ってる。だから，京大では旅行部とかそういうもの一切，僕らのちょい上の梅田とかでもなかったから，結局，三高の連中と山へ行ってた。そういう期間があるわけですわ。

中尾　解散させられたというのは，あったように思う。

山口　吉良さんは，「解散した」とはっきりいってました。

藤平　その後，続けていいます。私が昭和20年の秋に復員してきて，21年の春に林君と一緒に剣に登ったんですよ。帰ってきて，確か，そうやったと思うな，２人で西部構内うろうろと歩いてたら，「スキー山岳部員募集」という張り紙が掛かっていた。あれ，おかしいなということで，旅行部の部室へ行ったら，おったのが池田君と舟橋，それから，橋本，この３人なんだな。なぜおかしいなと思ったかというと，昭和18年に探し求めても旅行部というのはなかったからね。どうしてそれがおるんだろうと。山岳部と旅行部が別なんだろうかというのがわからんかった。少なくとも，旅行部らしきものを戦前にタッチしたことがあるのは，私ぐらいが最後という感じがしたもんだから，どうなったんだろうとそのへんに聞いてもわからんかったんだなあ。要するに旅行部とは，全く関係ないスキー山岳部というのができたんだなと思った。そのへんのことは池田君にもういっぺん聞いてみたいわけ。あんたら３人が集まった……。

池田　僕が，木原はんとこへ行った。

岩坪　何年ですか？

池田　昭和20年。僕が20年の８月に除隊になって，９月の２日から学校へ来てたからな。それで，木原はんとこへ行って，まず第一番に集まる場所が要るから，旅行部の部室を提供してくれ，ということで提供してもろて，そこでトグロを巻いてただけの話。そのときに，木原はんはスキー部も一緒ということで……。

藤平　それでスキー山岳部になった。

池田　そうそう。主に木原はんは，スキーのほうに力を入れて，それで，21年にスキー部と分かれた。部室，半分に割って。

藤平　そしたら舟橋，橋本というのは，そのきっかけで来たの？

池田　そうそう。

藤平　一番最初は，あんたがやったわけだ。

池田　まあそのとき，伊藤もおったけどな。

藤平　えっ，伊藤は後や。

池田　いやあ。

藤平　というのは，私が覚えてるのは21年の５月に部室へ顔を出してみたら，その３人がおった。そのうちにね，１週間ほどしたら部室の黒板に屏風岩正面の絵がかいてあって，ルート図が掛かってる。あれ，登ったような形になってるわけやな。

池田　そうそう。

藤平　いや，これどうなってんだ，あんたが登ったのかと聞いたら，「いや，伊藤洋平なる男が現れて，八高のＯＢで盛んにこの話をしていったんだ」と。その２，３日後にパタッと本人と会ったわけだ，部室で。そしたらなんのことはない，昭和18年に暗がりで声を交わしたご本人であった。あのときから，ちょっとでっぷりとしておったが，わかった。そのときが伊藤は初めてだよ，山岳部は。

池田　そうかなあ。

藤平　木原さんところへその後でも行ってるんだな。

池田　行ってる行ってる。

藤平　そのときにお菓子がないから薬を食べろと薬を出された覚えがある。

酒井　なんで薬を？

藤平　いや，薬はほとんど全部砂糖だからと。

岩坪　部室というのは，解散を命じられた京大旅行部の部室ですか？

池田　そうそう。また，戻ってる。

山口　西部講堂の西の方。西部の食堂の西やった。

池田　半分区切ってスキーになって。木原はんはそのスキーのほうへ行ったな。橋本もスキーのほうに入ったんだな。

酒井　スキー山岳部の部室には図書なんかは既にあったわけですか？

藤平　全部，そのまま残っておった。

岩坪　当時のスキー山岳部が旅行部，AACKに関係してなかった。旅行部のＯＢたちが，「あれはあいつらが焼きよったんや」となんとなく思ってはるんです。あれ延焼なんでしょう，火事（22年12月８日）というのは？

藤平　あれは，食堂から出た類焼でしょう。

山口　類焼。

岩坪　延焼やからしゃあないやないか，というんですけどもね。

林　その前に池田さんに，僕の記憶であのころ，福井三郎という，今，バイオテクノロジーで有名な人らしいがね，旅行部の備品だというて，テントとかそういうものを疎開していたんだといって部室に持ってこられました。で，僕は福井さんという人に初めてお会いして，自分はスキー部だから，いうふうなことがあったんですけど，その福井さんを池田さんのときは知らなかった？

池田　知らない。

林　途中から，福井さんが出てきたんだね。福井さんに実際に会って話を聞かないとわからない。そのスキー部というものの残党は，いたことはいたんだけどね。だから，木原さんの配下でそういう人がたぶんいたんじゃないかと思うな。

池田　そうや。

斎藤清　池田さんにもうすこし，最初のころの話を。

池田　部室をもらいにいって……。

斎藤清　一人で行かれたんですか？

池田　いや，あのときは，さあな，そこまで記憶がないんや。

岩坪　なぜ木原さんのところへ？

池田　その当時，旅行部の責任者が木原さんやった。

藤平　そのときまだ，今西さんは帰国しておられない。

岩坪　池田さんは，それまで学徒動員で兵隊に行ってたわけですか？

池田　いや，わしは夏休みだけ兵隊行った。

林　ハシケンとはいつお会いになったんですか？

池田　やはり，そのときですよ。舟橋と橋本のほうが先知ってる。

藤平　舟橋は泰安の関係かね？

池田　そりゃ，後からのような感じですなあ。やはり高等学校のとき，やっとったとちがうかなあ。あれは学習院で。

藤平　要するに舟橋は泰安の一番弟子やった。

池田　泰安の。それはようういうてたよ。

斎藤清　そうすると，池田さんは戦争が終わって，その秋には旅行部の部屋に？

池田　そうです。

藤平　確か，剣の八ツ峰を登ってきた後だったかなあ。

斎藤清　そのとき，名前は山岳部ですか？

池田　スキー山岳部やったな，最初は。

酒井　それで，１年後ぐらいにスキー部と分かれてから，初めて山岳部になったわけですか？

池田　橋本が，「わて，スキー専門でいきますわ」と，それで行ったわけです。

AACK の再建

中尾　この，『50年史』，三高会館でやったAACKの再建会議はどんなぐあいになってるのかね？

山口　僕の記憶では，昭和27年や思うんです。人文の本館でやったんですわ。

中尾　そうじゃない，三高会館だった。

山口　いや，三高会館じゃないですよ。AACKの戦後再建のあれは，人文の本館ですわ，北白川の。

中尾　昭和27年，それはマナスルへ行った年だね。

山口　そうですね。

中尾　あの三高会館の再建会議はね，26年の，確か，秋だった。

山口　会議はどうか知りませんけど，正式の発足のは，桑原さんが委員長にならはって。

中尾　それは，ＦＦ中心でヒマラヤ計画立てとった。それがマナスルという目標が決まったりして，山登りのメンバーが要るちゅうわけだ。そのときまでのAACKというものは，白頭山の思い出の会みたいなもの。そのときからAACKに入ってたメンバーが，吉良，梅棹，川喜田，私ぐらいで，いわゆる今西１期生だ。でね，集めようということになった。つまり，それまでクローズしておった，AACKはずっと。

池田　そうやな。

中尾　オープンにしようという方向転換の会議を三高会館でやった。

山口　それ，最初はそうかもわかりません。

中尾　最初，そのときはね，今西さんの命で僕が三高会館でその会合をアレンジした。三高会館は，それまで僕はそんな所在を知らなんだ，三高の人間じゃないから。教えられて，三高てこんな家を持っておったのかと。そのとき，結局，オープンにして山岳部，旅行部出身者をみんな入れようということになった。

山口　そのときの準備の事務局長は工楽さん。土倉さんがマネージャーみたいにして動いてて，その手伝いを僕がちょうど，確か，大学院に入りたてだったと思うから，27年にやったと思うんです。それで，北白川であったんですわ。

中尾　そっちのほうは，僕は覚えがないね。つまり，その公式的なの。

山口　皆一緒やったと思うんですけどね。林さんやら覚えてはらしませんか？

藤平　もう卒業してましたよ。

池田　20年の暮れから，21年，22年ちゅうころはこっち側だけのグループやわな。

藤平　20年から21年いっぱいぐらい。

池田　そやから，その当時，そろそろヒマラヤへ行かないかんなあというような話をしても，それがAACKとは結びついておらんわけですわな。

藤平　その当時はね。

斎藤清　そのころのメンバーは？

藤平　割かた数だけは揃ってたんですよ。八高系の人と学習院系の人と。

池田　東京系やわな。

藤平　そして，富山高校系の人がおったわけ，数が多いのはね。ところが，そのうちに，山岳部の部長が要るんじゃないか，スキー山岳部の，という話が出て，部長が現在，誰なのか，あんのかないのかもはっきりしなかったんで，洋平が，「木原先生のところに相談にいったらどうだろう」と。特に，「今西さんが帰ってこられて，いつの間にやら旅行部の看板がなくなって，スキー山岳部になってて，不埒千万だと怒っておられる」という風説を伊藤が伝えてきたんだ。今西さんは，「わしゃそんな怒った覚えがない」というんだね，4，5年前に聞いたら。そういうことで，こらあかんと木原先生のお宅へ直訴に行った覚えがある。

池田　だいぶ行った，あのとき。5人ほど。

藤平　そのときもお菓子代わりの薬食わされた。

池田　木原さんは，晩泊まって帰れ，というてくれたな。

マッキンレー論議

藤平　それで，「今西のヤツ」とはおっしゃらんかったけど，「ああ，今西君のことは心配すんな，俺がちゃんと代わりの部長を世話してやる」と。確か，酒戸さんの名前が出んかったかなあ。「酒戸君がいいんじゃないかな」と。

そんなことが一つと，そのうちに，我々もガヤガヤとやっておるうちに，主に洋平ですけども，「ヒマラヤへ行きたいけども，どうも今のシャバの情勢じゃ無理だ。一番手っ取り早いのがマッキンレーだ。夏休みに貨物船に乗り込んでって，向こうで中古の車でも借りれば行けるんじゃないか。夏休み中に行ってこれる」という話が出てたんですよ。21年のことなのか，22年になってるのか。21年だな，終わりごろかもしれないけどね。そしたら，どっからどう連絡があったんか知らんけども，これは全部洋平がやってたみたいだね，AACKとのは。梅棹さんが，私らに会いたいということで，じゃあ，と進々堂で会ったわけ。私と，あのとき，4人ぐらい行ったかね。洋平と舟橋，林，池田，こんなとこだったかな。

斎藤清　これは23年ですか？

藤平　いや21年か22年か。

林　もっと遅いような気がするんだけどね。

池田　もっと遅い。

林　梅棹さんが，そのいわゆる会見を申し込んできた。

藤平　これは，私が正確にいうと，20年の9月に復員してきて，21年の9月に卒業になって，22年の3月か春まで大学におった。だから，その間のできごとなんですよ，確か。だから，21年か22年。私の記憶では，主に2つぐらいのことが論議されておる。梅棹さんは，専ら，「なんでお前ら，ケチなアラスカなんかに行くんだ。なぜヒマラヤを目ざさない」ということだけ頭の記憶に残っている。それと，もう一つ，梅棹さんは，私らの山登りに対する非常な違和感を持っておられた。私とか洋平というのは，いわゆるクライミングオンリーの当時でいう先端的な登山をやってんじゃないのかと。私らとだいぶ違うというのが梅棹さんの頭にあったわけで，その登山論議とマッキンレー論議とが並行になっておるんですよ。マッキンレーというのは，まさしくこっちが一本取られた形で，おっしゃれば全くその通りで，私らにすりゃ，こりゃ主目的じゃないつもりで夏休みの片手間に行ってこれるじゃないか。こちらが全力を挙げるというつもりはなかったわけ。まず，そのことでヒマラヤというのを現実に突きつけてきたのは，梅棹さんだ。私らは，まだ潜在意識というか，もうひと山先だと思っていた。ちょっとなんか，えらい急にポコッと目の前に突きつけられて，こりゃ一本確かにまいった。それから山登りの考え方については，そうとうな口をきいた。

中尾　山登りの考え方についてはね，鈴木信がかなりはっきりしておってね。

藤平　例えば梅棹さんは，こういう質問をなさったんですよ。「君ら，そんな山登りをしておって，雨の中で焚き火を焚けるのか」と。今みたいに燃料を持っとるわけじゃないし，戦争中に山登りをしとりゃ，どんなときでも火をつけられますよ。私にいわせれば，正直いってそんなのは薮山の技術じゃないか。薮山の技術がヒマラヤで役に立つのかと。クライミングが主であるというのが私の考えであった。梅棹さんなんか，どうも，エクスペディションという頭が強いんですよ。そのへんの食い違いがどうしたってでてきた。「私ら，梅棹さんが考えておられるような山登りとかそういったものオンリーではありませんよ。山っていうのは，もっと広い意味でつかんでいる」というところで，お互い意見が一致したのか一致さしたのか知らないけども，今でも山登りに対する考え方についての違和感はありましたな。薮山の技術がヒマラヤで通用するのかと。やっぱり，ヒマラヤというのは，あくまでクライミングが主体だという頭が依然として残っていた。ところが，どうしてもそのへんの食い違いはあった。

岩坪　その話があって，後，もうパッと，割合きれいに藤平さんたちと梅棹さんが……。

藤平　あれは，あれだけいうだけいったら，お互いすっきりした。大体，4時間，コーヒー1杯で4時間。

斎藤清　その進々堂でですか？

藤平　えらい長い時間かかったと思う。

岩坪　私たちが，その話のむしかえしを聞くのは，例の探検部ができるときですけども，そのときに僕は，鈴木信さんのことを聞きました。

林　いわゆる進々堂会談というのは一つの契機であったことは事実。その前にすでに何回か，いわゆる鈴木信とここにいる山口，その間に三高の高橋太郎とか……。

山口　高橋太郎，知ってはりますか？

林　知ってる知ってる。高橋太郎，それから，末包慶太，そこらへんといわゆる何回か，我々との折衝があるわけです。それにやはり，鈴木信というものと梅棹さんというものとのいわゆる対比がある。その間に食い違いが大いにあるわけですわ。我々としたらどっちかというと三高勢タイプの代表というのはどうも鈴木信にあった。今の藤平さんの話じゃないけども，梅棹さんにはどうもくっつきにくいような要素が我々にはあったわけですよ。だから，話し合いというのは，どうも鈴木信との間で。ところが鈴木信と今西錦司さんとはこれは南朝北朝じゃないけれど，まことに意見の疎通を欠いておる。それで，鈴木信にいわせると，今西さんというのは，どうもいうことが猫の目を変えるように変わる。あれでは困るというふうなことでね。かなりの今西批判というのはあったわけですよ。

『岳人』創刊のころ

林　そのころなんか，ヒマラヤの火がポーッと燃えて，それで，我々と今西グループのパイプが，まあ，いうたら太くなってくる。

中尾　今の話に入る前にね，洋平やら梅棹とヒマラヤ計画を始めて間もないときに，やっぱり，鈴木信と進々堂で1回会った。ところがね，要するに鈴木信は，「洋平は立派な山登りだが，梅棹，中尾のごときは登山家の端にも入らん」といいよる。それがヒマラヤへ行くなんておこがましい，というのが本音だね。

岩坪　川喜田さんは，「自分は鈴木さんに三高山岳部を破門された」というてました。

山口　探検地理学会との確執ね。

中尾　こちらのつもりはだね，三高派の，まあ，ゴリゴリ登山派の中心の鈴木信と，マナスルやらんかという計画を組もうと思ったのにだね，そこで，結局，喧嘩別れみたいになっちゃった。

林　大したもんだな。

岩坪　その新しい新興勢力の前に，既に，南北朝が別れとる。

中尾　別れとるんだ。

藤平　もう，別れとったんか。

池田　そやけど，21年ころちゅうのは，まあ部室へ集まってヒマラヤちゅうよりか，外国の山へ行きたいという希望だけであってやな，手立てがどうのこうのということやなしに，希望だけは皆あって，そんな話だけはヤイヤイしてて，そういう空気の表れが，あの，『岳人』ちゅう山の本に集約されてきてるわけです。こらまあ，わて，発行者になってやったんやけども，その当事としては，AACKの過去の動向とかそういうような事柄は，全然関係なしに，自分らの淡い夢ちゅうものをなんとかこう実現できんかと。中尾さんや西堀さんやらにただで原稿書いてもろて……。

斎藤清　原稿料はただですか？

池田　ああ，ただや，ただや。ただでしたな，先生？　なんにもギャラもろてまへんな？　それから，だんだん安定してから人脈が出てきてるわけやな。

斎藤清　その，『岳人』なんですけど，採算合ってたんですか？

池田　だいぶ赤字やって，自腹切ってたけどね。最後に，八高出て伊藤の後輩やった立平いうのが……。

藤平　ああ，立平ね。石川テレビの社長。

池田　うん，立平が中日新聞へ勤めたわけや。アルプスをかかえながら，山の本がないちゅうことは，中日としては寂しい，ということで，亀山さんいうてな……。

藤平　亀山さんか。常務やったかな。

池田　それが，「ちょっと来い」いうんで，行ったんや。「立平君からこういう話聞いてね，それこっちへ譲らんか」ちゅう話。赤字埋めてくれんねんやったら，それ譲りまっさ，いうて，その場で譲ったんや。こっちが出したんが13号まで。14号から向こうが。

斎藤清　それまでは，あそこの北門出た臼井さんとこの……。

池田　ああ，臼井さんとこで。立平君も大学時分には，こっちで雇うてましてん。校正もこっちのほうですんの邪魔くそうなってきて，お前，やってくれ，いうて。そんな関係で，中日に入ったときに，印象がきつかったんやな。そやから，最終はとんとんになった。そんときに版権売ったからな。

斎藤清　版権も？

池田　ああ，版権，買うてくれたな。忘れもせんわ，4万円。

斎藤清　『岳人』の版権？

池田　うん。それで4万円もろて帰ってきた。

斎藤清　1000部ということになってますね，創刊号。大体，そのぐらい出たんですか？

池田　最後，2000部は出てたやろと思うがな。ほかにないねんしな。学校の山岳部，それから運動部や，そこら皆送り付けて。今でいう，東販とか日販とかあんなんとは関係なし。ただし，文部省から第3種郵便の許可だけは取りつけた。それもろたら，紙の配給もおましたんや。

斎藤清　『岳人』と山岳部との関係はどうでした？

池田　話していく間に，「なんやったらやろか」いうて伊藤君がどこやらの先生から原稿もろてくる。こっち側は，早速，それの仕事をしてるちゅう格好やったわけですわな。それと部とは関係なし。

藤平　結局，池田君と伊藤君が主としてやった。その縁で，いろいろ書かされちゃったということですわ。

斎藤清　京大山岳部のメンバーがそれを手伝ったとかいうことは？

池田　そんなん，なしや。

斎藤惇　伊藤さんは，その思い出話をなんかに書いていたね。

池田　それで，原稿を書いてもらいにいって，大体，人脈がわかってきてるわけや。

藤平　22年の3，4月ごろかなあ，私の下宿へ伊藤君が，「カンチの登路を研究せんか」いうて，風呂敷にいっぱい資料持ってきた。カンチェンジュンガの写真広げていろいろやって，ヤルンから登るということを結論づけた。初登のエバンスのルートあるでしょ。ヤルンから，でかいバンドを馬蹄形に見えた横，右側登っていく，あのルートを想定したんですよ。だから，ドンピシャリだった。ゼムー・ギャップからの東稜とか，バウアーの北東稜からとかなど，いろいろ見たけれども，一番可能性のあるのは，やっぱりヤルンからだと。その前に，ちょうど，ティルマンがエベレストの南面に入ってますわな。そのレポートを見ると，このほうが北面よりも絶対に確実やなという見方をしたんです。問題はアイスフォールの突破だけだろう。ここが突破できればそれまでよと。技術的に難しくないとみたわけだ。後は要するに，装備と体力の問題である。ルートとしての可能性ははるかに強いと。どうも，2つともね，今からみると，まことにドンピシャリだった。我々をして行かせてくれたら，もっと先に登っちゃったなと思ってんだけど。

山岳部の山行

斎藤清　山岳部としての最初の山行はどこですか？

藤平　最初は，どっか近所の岩場へちょこっと行ったことあるんだな。醍醐にある五丈岩と，高野の電車の停留所の横の岩場。なんか，ほうき持ってかなきゃ登れんかった。掃除してからでなきゃ。それから最初がね，21年の冬，正月だよ。白馬へ。

池田　あれが最初ぐらいかな。

藤平　汽車乗れんかってね。結局，林君とあんたと舟橋と4人じゃなかったかな。あれ，どこ登ったんだっけ？

池田　真っすぐ登るいうて，道，間違うて。

藤平　確か，あれは，白馬の正面尾根を上がると……。

池田　東面や。東面を上がるいうて。

藤平　東面の頂上の真下を上がったんやね。

池田　そう，そうそう。

藤平　夜中に道，間違えちゃって，横の山に登ったんだな。あれ，小蓮華かどっか上がっちゃったんだな。

池田　そういうこっちゃ。

藤平　あれは，『岳人』に載ってる。

池田　夏，冬は必ず行ってましたな。

藤平　22年の3月。剣の西面へ入った。私と池田君と舟橋，伊藤，杉山，5人だ。ブナクラの出合いにテントを張って，池ノ谷に直登して，右俣を上がった。その後で，2，3日して，今度は，猫又へ行って，そんときに，杉山が一緒だったんだ。右俣行ったときは，杉山はキーパーやった。右俣は上のへんでなんか、雪崩そうだったもんだから，左岸の尾根というより壁へ取っ付いて逃げたんだけど，これが大変しょっぱくてね。

斎藤清　それが，最初の冬山らしい冬山ですか，戦後の？

藤平　その前に，白馬。谷川岳に合宿したんは，その後かいな？

林　谷川岳はだいぶ後やな。あんた知らんか？

山口　僕は知りません。まだ，入ってへん。

酒井　池田さん，スキー山岳部は，1年後にはスキー部が独立しますので，山岳部になりますね。部長は，木原先生が，心配するなとおっしゃってくださったんで，どなたに？

池田　結局，決まらんかったな。

藤平　ともかく，その話聞いて，農学部で酒戸先生には会ったと思うんですよ。「うん，わかったよ」という程度の話で。

池田　正式にはなってないな。

岩坪　斎藤Yさんは，「木原先生が部長やってもなんにもしてくれはらへんから，誰か別の人に」というたとか。

斎藤惇　僕のリーダーのときですね。

岩坪　ということは，その当時は，木原先生が部長であったということになるんですけども……。

池田　まあ，なるんかしらんけど，部へ出てきたこともないな。

林　さっきね，有光さんの話が出ていた。あれは何年ごろですか，池田さんがいうとったスキー部を分かれさしたというの？

藤平　僕は卒業しとったんか？

池田　いや，22年やな。

笹ケ峰ヒュッテ

中尾　この，『50年史』は笹ケ峰の小屋の問題は別か？

林　それも，ちょっと話の中に入れなあかんね。

池田　あれ，なんや，修繕に行かされたんとちゃうかなあ。

斎藤清　戦中は，誰も管理してなかったんですか。

中尾　放り出してあった。

池田　そんで，こちらが修繕に行ったんや。

藤平　あのとき，笹ケ峰と志賀高原と2つ修理に行った。大学から頼まれて，志賀高原は私と舟橋が行ったわけ。秋だったと思う。屋根に上がってみたら，ボコボコ穴が開いててね。その後やね，山岳部とスキー部を別々にしたのは？

池田　そうや，その後ですわ。

中尾　あれは，高橋健治かの名前にして……。

岩坪　そうです。それで，高橋健治さんの名前で京都大学に寄付するという……。

林　スキー部が分かれたときに，小屋の問題で，我々は非常に困っとったわけですよ。志賀と両方で。面倒とってもみきれんと。この際，スキーだけという人もかなりいるから，スキー部を分かれさせたらいいんじゃないかと。そのとき，北村修一という男がそれをまとめてスキー部の初代ができたと思うんですわ。そのとき，志賀高原の小屋をつけて，我々から分かれたんですよ。

池田　22年やったと思うけどな。

岩坪　ヒュッテが，高橋ローゼさんの名前から京都大学の名前に移りまして，ヒュッテの土地を妙高高原町から京都大学は借りたときに，笹ケ峰ヒュッテの歴史みたいなのをコピーして，京都大学が竹田町長に渡しとるんです。それが，この書類なんですけど，この出典はどこなのか，ご存じでしたら？

林　これはわしも覚えとる。藤村，お前さんが書いた。

藤村　ちょっと見せてくれません？　懐かしいな。

岩坪　ヒュッテ，そのものの所有者は？

西堀　京都大学や，初めからね。

中尾　うーん，あれは，高橋家のものじゃなかったですか？

西堀　ないんです。

岩坪　登記書類はそうですよ。

中尾　僕の記憶では，財産税がローゼさんにかかってきて，ローゼさんが木原先生に相談した。それで，僕も木原先生にいわれてローゼさんとこへ行ったり，木原先生は大学と交渉して，大学寄贈の手続きをして，財産税を免れたような……。

西堀　最初，建てたときはそうではなかったな。後でそういうふうに変わったんかもしれん。

岩坪　大学に残っている書類は，中尾先生のおっしゃる通りです。高橋ローゼさんの個人の所有物です。

中尾　だから，それで，財産税のときにどうにかならんかという話が出てきたんです。

西堀　まだそのときは，ローゼと結婚してへんときとちゃうか？

斎藤清　高橋さんが亡くなった後に，ローゼさんに引き継いだんですわ。

西堀　なら，わかるけど。

中尾　どっかの時点で，高橋健治の名前になったんじゃないですか？

西堀　ローゼと結婚したのがね，我々が樺太行ったときと同じです。

斎藤清　樺太行ったときに，船で出会うわけですね。

西堀　船じゃなくてね，札幌で。それで，帰ってきてしばらくしてから結婚した。

岩坪　笹ケ峰のヒュッテで，大学の食堂の親父を連れて大スキーパーティーをやったはるの，AACKの『時報』に載ってますわね。

西堀　あれはね，でけてから2年経ってました。

西堀，ネパールへ

斎藤清　戦後のことを西堀さんに……。

岩坪　そう。ネパールへ交渉に行かれるときの様子を話していただくと，今までの話が，だいぶ補充されてくるんではないかと思うんですけど。

西堀　だいぶ記憶が薄れてますが。私はやや受け身な立場でいつもおったもんやから，ちょっと出てこい，いうから出てきたようなもんで。その前に，あの調査の問題については，伊藤ヨッペイのグループや，皆相談して計画を出したんとちゃうんか？

岩坪　そうです。

西堀　そのときまだ，私はフリーで暇な立場にあった。私が手づるを作ったんは，竹節さんがその前の年のアジア大会に出て，クリシュナを知って，そのクリシュナの名刺をもらったから。で，木原先生のお供して，インドへ。木原先生はインドへコメの種かいな，を提供しはったんで，ネールさんがお礼にインド学術会議の名誉会員になってくださいということで，第1回めのインド科学会議へ招待受けたんですな。私がついていくことにしたんだけれど，その当時はまだ，出国するのがそう簡単ではないわけです。もう一つ大事なことは，外貨をどうするかというのが大問題で。それでまず，学術会議に交渉に行った。亀山という化学の先生が会長で，前から知ってるもんやから，私も学術会議の推薦，日本代表として認めてくださいと。そしたら，「そんなこというたってあかんよ。木原先生は向こうから招待きてるし，藤岡はこれからいろいろと学術交流をするについて経験を積んでおきたいから是非にというので，交渉しておる最中なんだ。そこへ木原さんのお供さしてくれいうたって，それはあかん」というて，亀山さんは反対しよったんですね。そやけど，物理と生物がいるが，化学が抜けてるのんおかしいやないか，と自分は化学屋やもんやから。まあ，わかったんかどうか知らんけど，しゃあない，ということで，代表者の一人として認めてくれる。「しかし，これは学術会議の正式許可でも何でもないのやから，自分の個人的な手紙として扱ってくれよ」と。しかし，それがなかったら，出られなかったと思う。それからもう一つ，お金の問題。費用は，毎日新聞がもつといってくれたんですけど，それを外貨に替えることは，毎日新聞も直接はやれない。だから，UPの特派員ということにして，ダムダム飛行場で受け取ることになった。

この前，木原先生が亡くなられて，密葬で，あの人はなんていうたかな，当時自動車運転して羽田へ送ってくれた人に会ったが，「西堀さんは，後ろの座席から前の座席へ走ってる車の中で移ってきた。それから，あのときに，エテサン・ニシボリとの名刺をくれた。私もそれを今でも持っていますよ」とその人がいってたな。

ダムダム空港に着いたのが，それがね，31日の夜中なんですよ。

斎藤清　12月31日？

西堀　うん。なんぼ，場内アナウンスしてもろても，誰も金持ってきてる人は，いてはらへん。しょうがないからホテルへ行こうということで，グレートイースタンホテルへ落ち着いたんですよ。明くる日，インドの役人が来て、「何人日本からみえましたか」と聞いたとき，藤岡が，「ツー」いいかけたのを遮って，「スリー」にした。それっきり，私は正式代表に化けたわけ。ネールさんが三々五々，各国の代表を昼飯に招待するということで，あれはカルカッタの市長公舎だったな。そのときに，木原先生と我々が用意していった，誰かが作ってくれて持ってたんやけども，合同登山計画，インドと日本とのジョイントエクスペディション，ネパールへのプランがあって，それを説明したいから，時間をくださいいうことをあらかじめいうておいたので，早速，飯食うた後でソファに座って，主に私から説明したんです。そしたら「Quite Interesting」という言葉から始めて，「自分はもう，大変賛成だ」ということをネール自身が我々にいわはった。そして，バトナガーという科学教育大臣をネールが呼んで，「これが成功するように，万事あなたはお世話を申し上げろ」ということを英語で命じておられた。で，バトナガーが早速，「あなたがたがニューデリーにおいでになったら，そこで，細かい打ち合わせをいたしましょう」いうことになった。それから，ほかを回り，ニューデリーに到着して，計画を皆で話したところ，「これは，インドとしては，まだ実力もないし，ジョイントをする趣旨においては大変賛成するし，こうしたいと思うけれども，実現不可能である」ということをいうてこられたんです。そのとき，木原さんはほかへ回るいうて，私一人がインドへ残ることになった。それで，私が今西あてに送った電報があるはずなんやけども，それは，「トリツクシマナシ」という電報になっていたと思います。そしたら，今西から，また返事が来た。「ガンバレ」ちゅうか，あくまで頑張れと。それで，今度は鉾先を変えたんですよ。直接交渉をやろうと。インドとは別に。

岩坪　ネパール政府に？

西堀　ああ。それで，ネパール政府にコンタクトする努力をしようとした。そこで，ラフールというものが現れた。これは，非常に特筆すべき重要人物で，イギリスの隊がネパールに行くとき，世話をするリエゾンオフィサーであったわけです。しかし，本当はリエゾンオフィサーというけれども，むしろ，小間使いみたいやったんやろと思うんです。で，これが私にいろいろ入れ知恵してくれて……。

岩坪　それはネパール人ですか？

西堀　いいえ，インド人です。純然たるインド人です。それで，ニューデリーのそいつの下宿へ行ったら，屋根裏に住んどって，実に惨めな生活をしておった男であるけれど，だんだん話を聞いてると非常に詳しい。そして，協力者にして，彼のアドバイスで，インドなんてなことは考えずに，直接やったらええやないかとなった。それで，やり方についてのいろいろな秘訣は，彼にいろいろ教わったわけです。いよいよ単独で行くということに交渉を始めたのは，ラフールのサジェッションではあるけれども，それ自身にはラフールは関知していません。つまり，手の内を教えてくれただけ。「インドとネパールは決して親密ではないが，隷属しているわけではないから，堂々とネパールと交渉したらええやないか」と。それで，クリシュナへ手紙を出したんですけど，いつまで経ったって返事が来ないので，だめだと思った。そしたら突然，こっちがニューデリーにおるときに返事が来た。「パトナに使いを出すから来い」といってきたが，実は電報を出した人の名前が書いてないんですよ。誰かわからんけど，クリシュナがそれのアレンジをしてくれたことは事実だし，当時の首相であったコイララということは，後でわかったんですが，そういうことで，ネパールに行って，お願いしてきた。インドに出て，ラフールを呼んで，今度は登る準備としてのシェルパの選択を始めたんです。ヘンダーソンに会いにダージリンに行って，ラフールにも来てもらった。夫人がラフールをかわいがってたから。いい換えたら，ラフールのいうことならなんでも聞くというので。カルカッタに戻ってから，最後に，飛行機でいっぺんヒマラヤの写真を，特にマナスルの界隈を航空写真で地図をこしらえる程度の写真を写したいと思って，アレンジしたんだけれども，途中でインド政府からインターフェアが入って，もう酸素ボンベやら，そんなもん皆用意して，飛ぶその日の朝になってやめることになったんです。しゃあないから，せめて写真だけ写してくれいうて金やったんだけど，とうとう私が向こうにいてる間にフィルムを見ることができなかった。その後，田口二郎がインドへ私用で行って，そのフィルムを受け取って現像してみたら，どこの山やわからん。これがマナスルやいわれても，わしもそうかいなと思わなしょうがないし，地図やらで調べても全然わからん。

中尾　あれは，踏査隊が帰ってきてからでしたかね。そのポジができたのは？

西堀　いや，そうやない。踏査隊が持っていったんや。

中尾　持っていったんですか。

西堀　わからずじまいで持っていったんや。

中尾　なんだか，割に小さい山だったような。

西堀　そのようだ。ガネッシュの端くれみたいなところを写しとったんやないかと思う。

マナスルをJACに譲る

岩坪　その当時，ネパールと交渉しておられるときには，西堀先生の頭ではOKになったら，日本からどういうふうなのが来るのかと思ったはりましたか？

西堀　帰ってくるときは，王様が，「この山は登れるまで日本に許可をあげろ」といわはったんですが，そのときはまだ，許可そのものは，受け取ってきていないわけです。口約束だけ。それで，帰ってきて，皆に報告したときから始まるわけです。大体，私としては，初めて行ったヒマラヤであるし，こいつ，飛行機から見ただけやけれども，果たしてどこまで登れるやろかなあ，ということで。これはやはり，ステップをそうとう踏まんならんなあ，ということは感じてたのが一つと，初めてそういう国際的ないろいろな交渉をしたときに，やはり，日本山岳会という一つのポジション，私はそのとき，FFで行ったんですからね。AACKという言葉は一つも使うてないんです。

岩坪　それはなぜです？

西堀　そうしたほうが，入りやすかろうという配慮があった。

岩坪　学者として行っておられるわけですね？

西堀　学者として行った。しかも，触れこみははっきりFFとして。

岩坪　学術会議には，ケミストとして，行ったはるんでしょ？

西堀　そうです。それはインドに対して。

岩坪　ネパールへは，今度はFFのメンバーとして？

西堀　FFです。その当時の政治事情ていうのはね，おかしなもんですよ。例えばね，日本在外事務局へ行ったときに，私はネパールへ入りたい，といったら，「そんなばかなことはやめてくれ」という。なんでや，と聞いたら，「もし，日本にネパール政府が許可をしたら，ソビエトが入れてくれ，いうたときに断れないではないか」と。そんなおかしな理屈はない。あんた，一体，どこの国の人ですか，というてやった。

林　最初，マナスルという名前が出たのは？

西堀　それは，今西がサジェッションした。

林　今西先生が？

西堀　うん。調べるなり，「やんねんやったらマナスルやぞ」とこういうた。木暮さんが日本山岳会のなんやらに書かはったのがあるでしょ。

中尾　その一覧表を見て。

西堀　一覧表を見て，「8000m以上の山はそれしかないなあ」いうて。

中尾　今西さんがね，アンナプルナの次に高い山でと。

林　それは，どこにある山か，さっぱりわからんかったんでしょ？

西堀　ちょうど，藤木九三さんが，『ネパール』ていう大きな本を持っておられて，それを借りて持っていったんです。旅行中にもずっとそれを読んでました。

林　それで，マナスルという山の所在や，アンナプルナの近くにあるとか，そこらへんは？

西堀　いや，飛行機から見たとき，どれがそれやろなあと思たって，全然わからへん。許可を得るためには，ちゃんとした位置をいわんなん。それで，聞いてみたけど，誰も，マナスルなんていったって知らへん。役人は全然知らへん。地理の先生に聞きにいったら，それも知らへん。どないしょうかと思っていたら，カイザーラナ将軍がやね，「家のライブラリーに地図があるよってに自分で探せ」と。それで，行ってみたら，彼は玄関に待っておって，部屋へ案内してくれて，明治天皇の写真の前を通ったとき最敬礼をしたら，「おお，お前はリアルジャパニーズだ」といって背中を叩かれて，それから態度がずっとさらによくなって。でまあ，晩飯食わせたりなんやらしてくれて……。

斎藤清　そこで見つかったんですか？

西堀　そこのライブラリーで，私はすぐ見つけました。

中尾　それは何万分の一，百万ですか？

西堀　それを写真に写したんだけどね。何万分の一だったかね。

岩坪　3つに分かれたのですか？

西堀　いやいやもっと詳しい。

中尾　紫色の？

西堀　そうそう。

中尾　それじゃ百万分の一です。

西堀　ああそうか。それで，カイザーラナ将軍に見して，これや，ていうたんです。「ああ，それなら国境からだいぶ離れているから心配ない」と。その翌日に，また，王宮に呼ばれていった。そのときに，ほかの大臣，外務大臣なんかがいよって，そこで，将軍が，「ドクターニシボリが要求しているのはこの山です。だから，国境からは離れていますから，国交上の問題はありません」ということを皆に説明した。そしたら，王様が，「それなら，この山が登られるまで許可を与えろ」ということをいわれた。私としては，その前に3，4度呼ばれて，王様に，日本のことをいろいろと聞かれたりしていたが，「登れるまで許可を与えろ」とこれほどいい言葉はなかった。許可が来たんはだいぶん経ってからですよ。

中尾　6月かもしれん。京大の中でしばらく迷ってたんです。京大の中でね，FFていうものがわからなかった。

西堀　ははは，そうやと思う。

マナスル偵察隊

岩坪　西堀先生のそういう交渉の結果如何と日本で待っている今西さんやその周りにおる中尾先生らのグループでは？

西堀　それについてはね，かなり早い時期に，私は，登山そのものは，京都大学という一つの小さな単位ではなくて，日本全国的な色彩を持ったものがよろしいという進言をした。で，木原さんは，一番先に賛成をされました。それで，木原さんと私と2人で日本山岳会に持ち込んだわけです。ところが，向こうは槙さんやそういう連中が，随分よう集まったというほど，大物が皆集まりましたよ。そのときに，結論は，第1回の偵察隊は京都大学がイニシアチブをとってやりますと。そして，登山そのものについては日本山岳会がやる，いうことやったわけです。で，その場で決めたのは，今西錦司をリーダーとしてAACKでやると。そのときに，AACKというたか，京都大学というたかこのへんはわからんけども，まあ，京都です。それはあくまで，登山そのものではなく，学術調査という形式をとります。リコネッサンスですというふうなことまで，割合，具体的に決まったですね。それから，後の細かい交渉は，ほとんど日本山岳会はあまりやってないんでしょう。

岩坪　でも，高木さんや田口さんみたいにAACKでない人も入ってるわけでしょう。

西堀　それは後で出てきた話やけども，我々は雪の経験はあっても，氷の経験はほとんどない。誰かないかということになって，まあ田口がよかろう，ということで，田口をそれから高木を入れることになった。

林　田口いうのは，スイスのグレードを持っていたとか。それをどうして抽出されたかどうか，私は知らんですけども，今西さんはこの京都大学の山岳部ていうのはその当時は，認識はそんなになかったわけです。

中尾　それで，AACKの再建委員会はね，1951年の秋だったか，ひょっとしたら，西堀さんの留守中だったかもしれない。最初に三高会館でやったの。

林　その，今西さんはアンナプルナのⅣ峰を試登したときに，僕と田口と高木がね，どれが強いかということを双眼鏡で一生懸命見てた。そのとき，高木が一番先にへばって，「もう俺行けんけどお前行け」というて，僕と田口が登ったが，だんだん2人とも同じようにへばってきた。もうこれくらいでええやろう，引き返そうかという結論を2人で出して帰ってきた。それをしつこく，高木がなんでどうなったか，という話を今西さんが盛んに聞くわけですわ。なんでそんなことしつこく聞くんかなあと僕は思った。やっぱり，今西さんの頭の中ではね，どっちが強いか，というふうなことをしつこく考えていた。

中尾　あのとき，今西さんは，なんでマナスル行くのにアンナプルナⅣ峰へ先に行ったか。あそこはティルマンが行って，その目盛りが付いている。

林　うん，そうです。

中尾　そこで試してみたら，すぐ日本の力量がわかると。だから，ティルマンの手をつけたところに行った。そういうふうに記憶している。その林君と田口，高木3人が第1キャンプに上がって，そして明くる日だったかな，ちょっと吹雪気味になってきて，僕が補給隊を連れて上がっていったら……。

岩坪　中尾さんが，「あいつらは登る気があるのかないのか」とブーブーいいながら下りてきたいうのはそのときの話ですか？

中尾　それで，帰ろうということになってね，僕はサーッと一気に下りて帰ってきた。「京都の連中は逃げ足が速い」といわれてね。

山口　そのときの偵察隊の隊員の選考のことで，京都のほうで，やっぱり，いろいろ企みがあってね。どうせ，偵察隊にドクターが誰か要るだろう。そうするとやっぱり，慶応の辰沼さんをJACが選んでくる可能性がある。やはりそれは，AACKのほうで今西さんに選択ささんといかんと。それで，そのときに，伊藤さんと林さんがドクターとして名前が出てた。伊藤さんは肥え過ぎて，僕らと一緒に行ってもみそつけたりしてたんで，林さんを絶対行かさないかんとなった。まだ，隊員の選択がはっきり決まってないときに，今西さんが仙台かどこかウマの調査かなんか行ったはったんです。で，絶対に林さんをとるように今西さんに植え付けとかんといかん，と藤村が今西さんとこへ伝えにいったように記憶してるんやけどね。

西堀　確かに，辰沼君を非常に押している気配があったんです。それで，私はそのことを今西君にいった。それを許したら崩れるぞと。で，偵察隊の人選についてはもう一切，日本山岳会系統は発言せんいうようにしてください，という交渉も念を押したんです。ただし，田口と高木の問題はね，むしろ私は推薦したほうです。

中尾　今西さんは2人をよく知ってたみたいでした。

西堀　私，よく知ってたし，彼もよく知ってたね。田口君の兄貴も。実際，京都関係では誰もこういう経験がないんです。だから，どこまで田口や高木にそういう経験があるのかいうことを，全然見当はついてないけれども，少なくともゼロではないだろうということぐらい。で，やっぱり，人間としてこれはいいだろうと。

中尾　そのとき，林君が決まってびっくりした。というのは山岳部と付き合いがなかったから，林君を知らなかった。初めは，伊藤洋平のいい出しで私が動いて，梅棹と伊藤洋平と私と3人だけで進めているような時期がだいぶあった。そして，結局，伊藤洋平は外れていった。そのことについては深く立ち入らなかったが。

山口　冬に穂高へ広瀬やザッカスたちと行ってちょっとみそをつけたり，その前の年に涸沢で合宿をしたときに，林さんが入られた次の年ですが，伊藤洋平さんが入ってきたんですが，若い連中からすると，肥え過ぎてて馬力もないし……。

岩坪　AACKの計画をJACに譲ったということで，四手井さんが桑原さんに，「腹を切れ」といわれたと聞きましたが？

西堀　反対する人は，当然あると思ってるし，若い人で反対もあるだろうけれども，これ，やりましょうというので方針を変えたのです。

山口　そのころはまだ，FFの名前でやったはったんですか？　例えば，僕とか林さんとか伊藤洋平さんとかは入ってませんね。

西堀　戦争末期にJACの副会長をしてたことがあって，私としては，計画をJACに持っていくということは，決してそう不自然なことではなかった。それで，マナスルのとき，私と木原さんが出かけていったけれども，交渉は主として私がやりました。そのとき，明らかに，慶応臭さがあったので，警戒は要すると思った。ともかく，イニシアチブをとって偵察隊とか，学術の面では釘をさした。しかし，隊員としてAACKの存在は，十分重視してもらいたいということを付け加えたのは，慶応臭さが漂ってたからで，そういうことを無視されては困ると思ったからだ。

中尾　マナスル計画は，今から思うと，大変幸運だったと思うんだ。それは，木原さんがインドのコングレスに日本代表として選ばれたということが飛び込んできて，そして，西堀さんに行ってもらうということは，もちろん，今西さんが考えたことで，そして，既に，毎日新聞というスポンサーがついていた。当時，外国へ行くなどということは，費用も手続きも大変だったが，毎日新聞がやってくれるというような，当時としては考えられない運のいい進行をしたといえる。もう一つ，運がよかっ

たのは，竹節さんの紹介のようなものにすぐ応えてくれたというクリシュナの人柄ですね。

西堀　それは，ラフールがいってくれなかったらやってなかった。というのは，直接交渉したらあかんという先入観があったから。

中尾　今になったらよくわかるけれども，インドとのジョイントエクスペディションの交渉なんて，ものすごく難しいね。例えば，アッサムヒマラヤの交渉なんかは学術の手でアプローチしたけれども，全部ものにならないんだ。初めはいきそうにみえて，そのうち，途中でだめになっちゃう。最初に話すときは好意的で，見込みがあるなと思っていたら，そのうちに，壁にぶつかっちゃう。

西堀　インドというのはずるいというのか，複雑過ぎてわからん国ですな。それからみたら，ネパールというのは単純ぽい。

中尾　インドがそういう国だということを知らなかったから，西堀さんがインド側と一生懸命交渉された。

西堀　ネパールは，インドに対しては日本に対する満州のような存在だと聞かされ，仮に満州に交渉しようとすれば，日本に対して知らん顔はできないということと同様に，インドを立てろといわれていた。そして，行ってみると，初めのうちはよくわからなかったが，ラフールが教えてくれた。そのラフールを紹介してくれたのが，ビスバスだった。ビスバスはカルカッタの植物園長で，木原先生の知り合いだった。

中尾　ビスバスは淡水藻類をやってきたんです。ガンジス川の水を浄化してカルカッタの町に給水する。その浄化槽の中の淡水藻類。

西堀　そこまではっきり覚えてないが，私がFFだということで，大変歓迎してくれた。そうでなかったら，あそこまでいかなかっただろう。それから，ビスバスの線でヒマラヤンクラブのメンバーにしていただいたのも，紹介者3人が必要だったのに，ビスバスがアレンジしてくれた。それに行ったとき，「General Itoはどうしているか」と聞かれたが，彼は私の前に会員になってたんだが，Gen Itoと書いてあるので，General Itoだと思ったらしい。伊藤愚だとかFFだとか，いろいろなところでおもしろい効用があったものだ。だから，そういう意味で，ラフールの存在というものは，山登りに関して重要であった。

知床とアンナプルナ

岩坪　その後で，マナスルへAACKの若手は，ほとんど入れず，知床へ行って，その後，アンナプルナへ移っていくんですね。そのへんをお話ししていただきたいのですが。

藤平　知床という話を，最初に伊藤にしたのは私だと思う。そのころ，私の後輩の佐伯富男が北大にいて，「冬の知床というのは，誰もやってなくて，日本では最も極地に近い条件になるところだ」ということを聞いた。北大には，今，それをやる実力がないという。福井にいたときだったかな，そのときに，伊藤と何かで会ったときに，「おい，知床をやらないか。北大が前から狙っているが，穴場じゃないか」とこういってたわけなんだ。

斎藤惇　藤平さんは，知床の話をどこで注目したわけですか？

藤平　佐伯君の話でだ。

山口　僕も，三高で一緒やった井上から，北大は，冬はやり残しているということを聞いた。その前に，早稲田がペテガリに行ってるでしょ。北海道の冬で，まだ誰も行ってないところがあるということやった。

藤平　私は，ちょうどそのとき，小樽にいて，富男が北大にいたもんだから，遊びにきたんだ。その話を聞いた後，福井に転勤した。そのときに，何かで伊藤と会って話をしたんだ。震源地は北大だ。あんなことが京都におってわかるはずがない。

斎藤惇　『岳人』の5月号か6月号に，「知床というところがある。誰か注目しないか」という記事が載ったことがある。あれは，伊藤洋平さんが書いたんじゃないのかなあ。へえ，そういうおもしろいところがあるんだなとそのことが頭にあるときに，伊藤洋平さんがルームにひょっこり現れて，「どうや，知床やらんか」といわれた。

藤平　筋道としては，大体，合っている。情報ソースは北大だということだ。

林　あのときは，伊藤が隊長で，藤村が副隊長だったね。それは現役だったのか？

藤村　大学院だ。

林　それで，君らが現役だったのか？

斎藤惇　そうです。とにかく，その日に話を聞いて，皆でそれをやろうではないか，ということで，ワーッと拍手をして，あっという間に決まったことを覚えている。

山口　ただ，そのときの山岳部のリーダーのシャク（藤田）は反対だった。

斎藤惇　それは，伊藤洋平さん個人に対する強い反発だった。

山口　そのころ，マナスルのほうは，洋平さんは見込みがないようやけど，舟橋さんとか藤平さんは，隊員に選ばれるんやないかということがあったでしょ。そして，知床に行く前か帰ってからかに，舟橋さんやらも漏れたということで，林さんが，大層，憤慨したはった。

林　私が決まる前に，ほかの隊員は本決まりになっていて，最後に，医者の問題が残っていたと記憶している。それで，裏工作があったかどうか知らんが，私が医者として決まった。伊藤にこれはえらい恨まれるなあという感じだった。

藤平　本隊では，京都が入る目は初めからないんだよ。実際のリーダーシップを握ったのは，谷口さんなんだ，慶応の。谷口さんはやはり後輩がかわいい。そこへ，京都勢がしゃしゃり出てきた。初めからお呼びじゃないということだ。その注文が逆に，アンナプルナのときにリアクションとなる。あのとき，金がなかったもんだから，ＢＣのメステントが時間がなくて作れなかった。マナスルの本隊が帰ってきたときに，カトマンズにだいぶ装備を残してきていて，そのメステントを借りようという話だった。東京のほうが私と舟橋君で，今西寿雄さんが出てこられて，その話をしようということで，槙さんのお宅，茅ケ崎へ夜遅くに伺った。そうしたら，すぐ理事会に相談してみましょうといわれて帰ってきた。終電にもう少しで遅れるところで，槙さんの家から茅ケ崎の駅まで走ったんだけど，距離が4キロほどあって，20分ほど走って，飛び乗ったんだ。今西さんは，槙さんがＯＫといったという形をとられて帰った。次の日か1日おいてか，私がAACK東京代表ということで，理事会に呼び出された。実は，その理事会の席上で，1時間半ほどの四面楚歌の猛烈なつるし上げを食った。「大体，京都はけしからん。白紙委任といいながら，あの人事の巻き返しは何ごとか」と。「メステントは絶対に貸せない」という。「次も使うんだから，それまでに汚されては困る」と。ほとんど，面罵といっていい調子で，1時間半，一人でつるし上げられたんですよ。

西堀　どんな連中だ？

藤平　爺さまがたですよ。中堅どころは黙っていた。僕も売り言葉に買い言葉でね，だいぶやり返した。ひょっとすると，槙さんに面と向かって，会長辞められたらどうですかといった覚えがある。ともかく，貸す気は一つもないわけだ。それで，帰ってきて，寿雄さんは結果が知りたいものだから，電話してくれといわれていて，電話をした。実は，だめだったんだ。僕も正直いって売り言葉に買い言葉で，それならいらんと啖呵を切ったというと，「もういっぺん頭を下げてこい。間に合わんから謝ってこい」といわれた。わしは，もう二度と頭を下げる気はせんといって，寿雄さんとも電話で喧嘩になった。それで，一計を案じて，ちょうど，福岡山の会があのとき，ヒマラヤへ行こうと，彼らは装備を作ってしまっていて，パーミッションが取れなくて，行けなくなってしまっていた。福岡の緒方君に電話をして，お前とこのメステントを貸してくれと頼んで貸してもらった。だから，アンナプルナの写真を見ると，ベースキャンプのメステントには，「ＦＹ」と書いてある。ということで，そのときは，えらいひどい目に遭ったんだが，日本山岳会の中堅どころは，そこまでは思っていなかったんでしょうがね。

岩坪　今西寿雄さんがアンナプルナの隊長になった経緯はどういうことでしょうか。

藤平　よく知らんのですが，ある程度，裏で筋書きを書いたのは洋平じゃないか。その前に，AACKか何かの会合が大阪であったんですよ。そのとき，今西寿雄さんが初めて出てこられて，その帰りに洋平が，「これはいい人がいるじゃないか。是非，寿雄さんを担ぎ出そうじゃないか」という話をした。当時，ＯＢとの関係，南北朝の話でいい加減，嫌になっていたころで，京都在住のＯＢというのは，狷介不羈な人が多くて，一国一城の主が多過ぎてどうにもならんかった。一人の顔を立てれば，片方立たずということで，嫌になっていたところに出てきた今西寿雄さんという人は，そういう意味では違っていたんだ。こういうと失礼ですが，リーダーらしいリーダーという感じがした。何かのときに担ぎ出そうという伊藤君の腹だったんです。私らもそれには全員賛成していた。

山口　AACKの会員は，マナスルでみんなシャットアウトになったんだけど，その前の段階で，マナスルの話は全部ＪＡＣに持っていこうということになったので，それでは，AACKでどこかをやろうということになって，ある程度，鈴木信さんなんかが中心になって，ワークマンの本などで，サルトロカンリなんかを考えていた。ところが，サルトロカンリはパキスタンの国の問題でだめだという話をしていた。そういう時期があったと思う。今西寿雄さんを上層部にプッシュしたのは，鈴木信さんだというふうなことをご本人から聞きました。

藤平　確かに，鈴木さんはだいぶ裏で力になっていただいたのは事実だ。それから，先ほどのＪＡＣで，もう一つ文句を食ったのは，中尾さんなんですよ。「なんでお前らアンナプルナⅡなんて考えたんだ」といわれたので，正直なところをいったんです。中尾さんの現地からの手紙で，アンナプルナⅡの南面はやれそうだという私信があったので，それで考えたのだといったら，「中尾佐助は不届き至極だ。そういう報告を山岳会を差し置いて京都に知らせるとはもってのほかだ」と。そういう調子のつるし上げだったんです。そういうのを1時間半もやられると，27，8の若いときですから頭に来ますよ。

中尾　「中尾の誤報」ということになっていますが，前年に北面を見てるからねえ。南面でも，例の登れないところは前山で見えなかったんだ，雪煙が上がっていて。

あそこなら登れそうだという軽い気持ちで，向こうの山から見えましたという程度だったんだ。まさか，それで出てくるとは思わなかった。

岩坪　伊藤洋平さんというのは，すぐ下の一緒に山へ行った人たちは，すぐバテるとかいわはりますけど，伊藤さんと直接交渉のない私などからみると，伊藤さんの将来に対する洞察力というのは，大変，優れていて，優秀な人であると思うんですが。

斎藤惇　戦略家ですな。

中尾　経過を見ていて，伊藤君が京都からヒマラヤへ行けなかったのは，実にかわいそうに感じた。いろいろと手を打ち奔走した仲間なんだ。僕はネパールへ続いて2回うまく出られたけれど，伊藤君はみんな外れてしまった。

藤平　伊藤君の最大の功績というのは，ヒマラヤというものを契機にして，離れていたＯＢと現役をくっつけたということですよ。

斎藤惇　私が覚えているのは，知床から帰ってきて，祝賀会をホテルニュー京都でやったとき，今西錦司さんが出てこられたんです。伊藤さんが，「今西さんなんて，これまで見向きもせんかった人が，知床が成功したから見直して出てこられた」といって，大変喜んでおられた。

林　ヨッペイの歌というのを，俺は後から聞かされた。

山口　あれは，知床でできたんですわ。

藤平　僕は，伊藤洋平とは一緒に剣へ登ったし，京都近郊の山も行ったし，アンナプルナへも登ったんで，いうと，高校時代はクライマーだっただろうけど，あのころは正直いって，皆さんの評価通りだったとは思う。ただ彼の性格が誤解を受けてて，そのへんがディスカウントされているという気がする。アンナプルナへ行ったとき，伊藤君が中間に配置されているということで，ものすごく安心感があった。僕らが思い切って突っ込むでしょ。伊藤君が第2か第3におってくれているということがものすごく安心感になっていた。いろんな事態に対して対応できる判断力を持っている。カーッとなって一直線に走らないという戦略的な力を持っているということね。

西堀　伊藤洋平という人は頭がいいというか，先見の明もあり，AACKに大きな貢献をしているということを私は感じてました。そして，彼を南極のメンバーに加えることを非常に積極的に考えていました。どうしてかというと，山登りについては，いつも努力していながら加われなかったことを感じてたから。そうしたら，船にものすごく弱くて，船にヨッペイ，だった。

林　彼は，僕がシアトルへ留学したときに，僕の書類を全部処理してくれた。一面リアルでありながら，一面浪花節的な友情というものを持っていた人だ。

中尾　ＦＦの委員会を作ったときに，伊藤洋平の先生を委員にわざわざいれたんですよ，木村さんを。

藤平　山へ登るのに不便なのは，あいつは漬物とみそ汁が大嫌いだった。その当時，そんなものしかないですから，本当に困った。

西堀　南極へ行く船の中でも，いつでも話題の中心だった。

斎藤惇　そんなときでも，へこたれた顔をしはらへんでしょ。

平井　穂高の現役の合宿に入ってくれたし，冬の穂高にも入ってくれたし，それから，知床につないでいった。そのへんはかなり現役を意識していた。

斎藤惇　普通，あれだけ現役の前で，10歩行って休んだりしたら，それからは入らんもんやけど。アンナプルナの隊員選考のとき，最初は投票しましたね。

藤平　外れとったのか？

山口　立候補者同士で投票したんです。そしたら，ザッカス，広瀬というところが上になって，ヨッペイさんは隊員の定員から，まだ後やったわけですわ。

斎藤惇　やっぱり，医者は要るということでね。

藤平　寿雄さんはね，『アンナプルナ日記』の最初の隊員紹介のところで，ヒマラヤ実現の功労者は彼だ，きっかけを作ったのは彼だ，とはっきり書いておられるんですよ。それは，もう最初から寿雄さんは入れるつもりだった。抜くつもりは全然ない。ああそうか，投票の結果というのは全然知らんかった。

平井　あのときは，新徳館で投票したんや。

南　北　朝

西堀　マナスルに登頂したとき，槙さんもよく，今西寿雄をやってくれたと思います。

中尾　やっぱり，槙さんに京都に顔をたてようという気があったんじゃないですか？

藤平　確かに，京都に対する顔だてはあったと思いますが，私は，もっと純粋にとりたい。あのとき，どうしてもここで成功させなきゃならん隊長の立場としては，それより先に，誰がベストかということで決めると思うんだ。私だったら，絶対それをとる。

斎藤清　寿雄さんが圧倒的に強かったということでしょうね。

藤平　それは，寿雄さんは圧倒的に強いと思います。ギャルツェンと組ませて，しかも，確実に登れるといったら今西さんでしょう。加藤と組ませてやるかね。確実にとるなら今西さんをとる。あの前の年に，私と2人で剣に登ってるんですよ。黒部の下ノ廊下を登って，内蔵助へ上がって，剣へぬけたんです。その次の年に，マナスルへ行かれた。今西さんが先に音をあげられたのは，あのときが初めてだった。

林　アンナプルナで今西さんはどうですか？

藤平　強かった。はっきりいって，最後のアタックのときは，僕のほうがお荷物だった。もう少し上げられるのに，あそこでやめたのは私への配慮でした。帰りに落っこちた回数は，私のほうがはるかに多い。風で吹き飛ばされて。ただ，一番大きいスリップを止めたのは僕のほうです。40メートルほどすっ飛んだのはね。

中尾　もう1日天気がよかったら登ってただろうね。

藤平　あのときは正直いって，残念でしたという気持ちはなかった。それくらい，こてんぱんにいかれとったということでしょうな。

中尾　ティルマンでも尻尾巻いたんだから。

藤平　あのときに，藤村君には迂回ルートで荷物を輸送してもらった。まことに器用な芸当だったと思う。藤村君がうまく追いつくであろうという計算だった。大体，計算通りだったんだね。あれは初めての隊にしてはでき過ぎだったと思う。

中尾　あのときは，大四手井が準備にものすごく働いて，「こんな有能な人がいることがわかった」と木原先生がいっとった。

斎藤惇　鈴木信さんがずうっと詰めっきりで……。

林　要するに南朝の系列だな。

山口　アンナプルナのときは鈴木さんが，チョゴリザのときは近藤さんが中心にいはった。

岩坪　近藤さんは，AACKが社団法人になるときに，事務局長としてものすごく働かはったんですね。

山口　その前から，チョゴリザの準備のときの事務局全部をやらはった。

斎藤惇　アンナプルナで，夏合宿を半分に削って現役を動員した。

中尾　さっきの進々堂会談のとき，鈴木信さんは，梅棹や中尾がヒマラヤへ行くなんてと。

岩坪　私が1回生に入ったときには，山岳部にとってのええ方は四手井，鈴木，近藤という人たちで，今西，梅棹，中尾というのは，イケズの人たちというふうな雰囲気を先輩から感じていました。

藤平　中尾，梅棹，川喜田という系列は，プロフェッショナルだという感じがした。最後は，山のことをうっちゃって，自分の学問のほうへ行くだろうという不信感が先にある。本質的には山屋でないと。プロフェッショナルを持ってんだから，そっちへ動くと思っていた。実際にそうなったわけだけどね。

平井　僕らが山岳部へ入ったときには，伊藤洋平さんも何もかも知らん時代やった。それが，昭和25年の秋にカギャの2階に梅棹さんも中尾さんも鈴木さんも皆よって顔合わせしてくれた。そのときにリーダーやってた築山が，「私たちは天気図もとっていろいろやってます」というたら，梅棹さんが，「そんなことは，僕ら現役のときには常識やったよ」てなことを，はっきりといわはったことを覚えてます。

中尾　川喜田や梅棹が，登山家に信用がなかったのは実に無理のないことなんだ。第1次マナスル登山隊のベースキャンプへ川喜田と2人で行ったときにね，ワヤワヤと話していると，上高地へ行ったことのないのは，川喜田二郎一人だけだった。別に，上高地がどうということはないんだけれど。

まとまりだした戦後の京大山岳部

平井　僕は25年入学ですが，そのとき初めて，京大山岳部としてまとまったような，スタートしたような気がする。

山口　そうや。俺やらは造反しとったから，三高派は。俺は24年に入学して1年のときは，山岳部に入ってへんのや。25年に俺と広瀬と長谷川とが山岳部に入って，三高山岳部的な山登りを植え付けようというわけで入ったんや。

平井　それで，初めて，25年の真砂の合宿になったわけですか？

山口　そう。その前に24年の秋に，冠山の遭難があって，救援を頼まれて，広瀬と一緒に行った覚えがある。

平井　ゴチャゴチャしてたんが，なんで25年にまとまったんですか？

山口　それまでは，部員の数が少なかった。

藤村　25年にむちゃくちゃ増えた。

林　藤村がリーダーになった，25年からまとまりだした。藤村の影響力は，実に大きかったと思う。京大山岳部の歴史の中で実に残念なことは，藤村がアンナプルナでポショッと消えてしまったことだ。このことは，特に，私が発言したということを覚えておいてもらいたい。

平井　そらそうですよ。林さんはミリタリズムでね。私みたいな小さなもの，弱いものは，早く辞めさせろと，はっきりいわれた。藤村御大は，ちゃんと頑張っとんのやから置いとことね。だから，林さんのあれやったら，僕やショウちゃんはなかった。

斎藤惇　今の平井もクーラカンリもなかった。

酒井　『京大山岳部時報1950』（報告第1号）によると，学制の改革で新制度になって，人数が増えたので活動が盛んになったというふうに受け取れます。

平井　25年というのは，旧制の最後の入学なんです。藤田陸奥麿や吉村クモスケというのは，旧制の最後で入っ

てきた。

斎藤惇　僕は新制第1回，24年。

山口　Yは旧制高校からやし，ズブの新制というのはポコが最初やな。

藤村　今までの話の中の，藤平，林，伊藤というのは高等学校の山岳部で活躍しておられた。一つの修業が済んでられたわけだけれども，25年にポコたちが入ってきたときには，初めてのものばっかりで，そこで，大きく変わった。

岩坪　私が1回生に入ってきたときに聞いた話では，山岳部が今のようになったのは，藤村御大というものすご偉いリーダーがおって，その人が頑張って，今のようになったんだと。それまでは，林さんみたいな人がリーダーでと。

酒井　怖いだけで……。新人をうまくトレーニングするような人は，もうちょっと後からだと。

山口　それはねえ，ちょっと戦後の空白的なあれがあるわけや。林さんやらまでは高等学校で山へ行ってて。藤村も岐阜で山へ行ってたけど。藤村や僕が入ったころというのは，山岳部へ入ってきて途中で辞めてしもた人がいるんやけど，そういう人は，旧制高校でも山へ行ってなかった人でそういう落ち込んだ時期が1，2年あったんや。

藤村　それを，僕らがつないだんやと思うわ。藤平，伊藤，林という大変なベテランがいらして，僕らは直接指導を受けた。今まで薮山歩きばっかりしてたんが，岩登りとかいろいろね。それを，全くの新人が入ってきて，それをつないだんやという，そういう時代やったと思う。そのころ，オールラウンドでコンプリートといって。23，24年が落ち込んでたんやね。

山口　僕と同じ学年で，高校で山行ってたんいうたら，俺と築山だけなんや。藤村の年やったら藤村だけやろ。

藤村　それと伊谷がおった。

山口　伊谷は山岳部に入っとったけど，全然活動してなかった。

藤村　そやけど探検的なことで，僕らの時代の代表やったと思う。

林　藤村の次が築山か？

山口　そう。その次がシャク。シャク，ジャン，ザッカスは一緒。その次がYやらやけど，山岳部に入った年次は一緒ですわ。新制と旧制が一緒に入ったから。

平井　ザッカスは，僕と一緒に入ってきたけれど山岳部入ったんは1年後。

斎藤惇　シャクの次には，中島がリーダーになっとったな。

藤平　ザッカスというのは，どこかでえらい迂回をしてきたわけだな。あれは俺と1つしか違わない。

山口　ザッカスは僕と一緒で，僕が3年遅れてるのにあいつはもう1年遅れてる。

平井　海兵から来て，1年，先生をしとった。

斎藤惇　藤村さんの力も大変大きかったと思いますが，三高山岳部がうまいことスッといったのは，山口と広瀬の人格やと思います。

藤平　そこで，へたらずに成功したというのは大きい。

山口　なりかけたことがあったんですよ。山岳部があって，スキー山岳部があって，広瀬やらの旧制高等学校1年がなくなったときに，旅行部いうのを復活しようというので，教養のとこに張り紙をした。24年。鈴木さんやらとの相談で，一回やってみたらどうかいうのんでね。そのとき，林さんや藤村が，そんなこといわずに一緒にやったらどうやとそういう話し合いが，一度，旧三高のルームであって，それなら考えてみようということで。三高のルームというのは，ポコのころもあって，今のテニスコートで，昔の南グラウンドの北側にあった。松の木が目印で。

林　南北朝の話の前に，そういう話があった。山口がおらんかったら，鈴木信とも話し合いはできとらんし，川喜田さんや梅棹さんや，ひいては，今西さんとも全く別のものになってたかもしれん。中興の士は，山口ということだ。

斎藤惇　末包さんがリードしてたら，絶対一緒になってない。

林　あれはすごかった。

山口　そのことについては，今の話と直接関係はないが，少しトラブルがあった。京大山岳部が剣に行くというので，テントやアイゼンを三高山岳部が京大山岳部に貸した。赤谷山から剣北部をやるというので。あれ，林さん覚えたらへんか？　そしたら，テントを燃やさはった。それに，アイゼンやグラウンドシートを全然返さへんかった。

林　それは，岡本とか，毛利とかに聞いてみろ。

山口　そうそう，毛利さんも来てはった。それで，三高山岳部が京大山岳部を三高のルームへ呼びつけた。そのときに，末包が「いくら学生といえども社会人としての認識がないのか」いってどやしつけるように怒った。そのとき，林さんが怖い反抗的な目で末包をにらみつけはったんを覚えてますわ。僕は，その後，舟橋さんの吉田山の西側のお寺みたいなところの下宿にアイゼン返してくれいうて何回も行った。そういうことで，わだかまりがあって，すぐに京大山岳部に入る気がしなかった。末包は，結局，入っていない。初めて僕と広瀬と長谷川が入った。

林　その事実は全く記憶にない。

岩坪　それは，京大山岳部が火事いくのとどっちが先ですか？

山口　火事はその後や。

林　三高が燃やしよったんとちがうか。

藤平　いつごろだ。私たちが剣へ行ったときは，全然借りていない。

山口　その後でしょ。毛利さんがおった。舟橋さんもからんでますよ。それで，まだ燃える前の西部食堂の西の京大山岳部ボックスへ催促に1，2回行ったことがある。たくさん本があるなあ思て，感心した。私が三高の山岳部にいたころだ。昭和21年のころで，当時は，旅行部はなかった。

伊藤　そのころ，旧制三高，旧制京大，新制京大というのはどういうふうに？

平井　新制京大が発足したのが，昭和24年や。旧制三高がなくなったのは，25年3月。旧制は，25年で全部なくなった。

斎藤惇　僕らの学年は，1年しか旧制高校へ行かなかった。すぐ，新制大学が発足して，また，試験を受けた。

アンナプルナ以後

岩坪　今までの話で，アンナプルナまでは済みました。その後，山口さんやザッカスたちがいろいろと活動することになるのですが，そのあたりを，まとめてみますと，1955年，KUSEのカラコルムヒンズークシで，56年に藤田和夫隊長で，その前年にできた探検部から本多，吉場がパキスタンへ行きまして，57年に松下進さんが隊長で，本多，荻野，私，沖津がスワートへ行きまして，58年にやっとチョゴリザ。そのあたり，アンナプルナから帰ってきてからどうだったんですか？　マナスルが成功するのは，56年ですね。

山口　林さんがそのころは，だいぶ関与したはって，西ネのカンジロバヒマール，ダウラギリⅣ，シスネヒマールとかね。南極の話もからんでくる。まあ，暗黒時代やないけど，いうていくとこ全部蹴られて。一つはアンナプルナがあかんかって，京大山岳部が信用をなくして，そのころ，スポンサーとして新聞社しか考えられへんかった。そのスポンサーに皆蹴られた。

林　山口は，カンジロバヒマールなどを一生懸命，いっていたが，結局，だめだった。そういうのが大変ショックだったけれども，今西寿雄さんや藤平さんは，帰ってきたら，その後，何もしないじゃないかという気持ちがあった。

藤平　私にしても今西寿雄さんにしても京都を離れてた。それが一番の障害になった。もう一つは，アンナプルナが赤字だった。

近藤　そうや。赤字の始末で苦労した。川崎重工へボンベの謝りにいったら，不良取引のはんこを押したのを見せられた。

藤平　未払いが残ったし，カルカッタで借金してきてるし。大半は，まあ，今西さんが被られたんでしょうけど。

近藤　木原さんがちょっと出してくれはった。

藤平　私も，なけなしのころに被ってるんです。何年間か，ボーナスが一銭も家に入ってない。幸いにして，女房の家が自由業だったので，ボーナスの存在を知らなかった。そのうち，社宅住まいだったので，近所の奥さんがたから聞いて，ボーナスの存在を知ったわけだ。3年間ほど入ってない。アンナプルナは，全部調達する前に行ってしまったから，帰ってきてから，後始末のために金くれとはいえなかった。だから，チョゴリザのときは，是が非でも登らんと，またえらいことになると思った。

林　アンナプルナの後遺症が，チョゴリザまで残ったんだな。

中尾　今西寿雄にチョオユーを薦めたけど，彼はどうしても動かなかった。

近藤　南北朝の始まりというのは，そのころとちがうか？

斎藤清　KUSEのとき。

近藤　四手井さんは反対やった。

中尾　AACKとFFが大対決して，FFはAACKを切って……。

平井　加藤泰安さんが外れたんは，そのせいですか。輸送係で入ってたでしょ。

岩坪　KUSEは，京都大学主催になっていたので，教官にできない人は切らざるを得なかったのでは？

山口　僕が覚えているのは，京園でね，AACKを切るいうので，今西さんと四手井さんが両方とも角突き合わせてやらはって，間に入って並河先生がおろおろして困ってはった。

岩坪　あのころは，今の海外科研というシステムはなかったけれども，費用を文部省からもらって，京都大学に実行委員会を作ってのあれですから，そういう人は事務手続きで入れようがなかった。梅棹さんも京都大学の非常勤講師にした。

中尾　井上靖が行きたいといっていたんだけど，これは不調になった。泰安と2人で話にいったんだけど。

岩坪　あれがもしも，アンナプルナのときのように，一般募金で成立していたら，山派の大勢も入っていたでしょう。

中尾　あれは，朝日新聞がスポンサーになったような形になってるけれど，文部省が国費を探検に支出した最初だった。それから，南極という大物が出てくるわけだ。

近藤　南極から帰らはるとき，船の中から西堀さんが桑原さんに電報を打たはった。あのころ，鈴木さんはムツーッとしとった。

岩坪　そのころ，山口さんは南極へ行こうと頑張ったはったわけですね。

山口　そうや。

平井　わしもそうやった。

山口　それで乗鞍まで行った。僕，川口，北村，平井。ヒマラヤは行き詰まってた。

西堀　東京の空気は，先ほどのマナスルの話もあって，なかなか深刻ですよ。そこに日本の宿命があるのかもしれん，東京と京都という。後で私が進言するまでは，越冬ということは考えさせてもらえなかった。

平井　どうして，AACKは，もっと人を送れなかったかなあという気がする。

西堀　ほんの数名入れるだけで，精一杯だったんだ。

藤平　南極のときは，振り切れなかったね。あのとき，私は会社を辞めなければ行けない立場で，ヤクザな道に入るか，プロフェッショナルに進むかという選択だった。

岩坪　南極へ行って，みごとに転身しやはったんは，伊藤洋平さんやね。あれで，山はやめて，学の道でいこうと。

斎藤惇　スパッと，そこで足を洗ったね。

西堀　いいや，船酔いがひどかったんや。

藤平　船自体が貧弱やったね。出発のとき，西堀さんの奥さんに，「大丈夫かしら。心配だわ」などといわれて，弱った。

西堀　確かに，今とは雲泥の差だ。

ヒマラヤ遠征の裏話

岩坪　南極と同時に，チョゴリザの話が出てくるんですね。私が，1957年にスワートへ行き，カラチへ帰ってきたら，日本大使館で，加藤泰安隊長のアプリケーションが来てまして，これははよ帰って，これに寄せてもらおうと心に決めて，帰ってきたんです。

山口　泰安隊長でチョゴリザへアプリケーションを出してたけども，ちょっとも返事が来んので，もしも，ということで，川喜田さんの西ネパールの計画に合体して，俺やらは，山へ登ろ，ということで，進々堂で話してたんですわ。

岩坪　進々堂で今西錦司さんが，かなり私らにしゃべらしてから，ポッとポケットからチョゴリザの許可書を出さはったんや。AACKの会長は桑原さんで，ヒマラヤ委員会の委員長が今西さんで，さんざんしゃべらして，山口さんやらがブスッとしてから，実はな，いうて許可出してきはって，相変わらずずるこい人やなあと思た。

平井　なんで，サルトロカンリの名前は出てこなかったんですか？

山口　難しいということと，峠を越えんなんから。

平井　アンナプルナからKUSEまで，チョゴリザの「チョ」の字も出なかったし，許可が来て，初めてチョゴリザの名前を認識したんですけど……。

山口　それは，カラコルムに入れるようになってきたからやんか。

斎藤清　誰もチョゴリザを見てなかったんですか？

山口　そうや。でも，立派な写真あるからなあ。

中尾　FF育ちの僕からみると，ネパールもカラコルムもFFが開いたね。

藤平　初め，チョゴリザなんて興味がなかったね。ダウラギリⅠをやりたくてしょうがなかった。あれは登れると確信もってたから。8000の中では，ダウラギリはやれると思ってた。

平井　チョゴリザの帰り，スカルドで，サルトロカンリへ偵察に出かけるかという話があって……。

岩坪　なぜ，それをしてこなかったかいうて，帰ってからの座談会で梅棹さんやらにえらい文句いわれたんとちごたんですか？

平井　しかし，あのとき，泰安さんが，「行きたいとこ紙に書いて出せ」といわれても，皆口でいうてるだけやったから。

山口　いやいや，そんなことあらへんよ。スカルドで，だいぶ粘ったんよ。俺とザッカスとサルトロの偵察に行かせいうて。そしたら，桑さんと泰安さんが，俺が休職で行ってる状態やから，はよ帰れいわれたんや。

平井　ザッカスは，「君は病気が，まだ治ってないから，病院のあるところでないとダメだ」と泰安さんにいわれてた。

岩坪　59年は行かへんのですけど，ノシャックの準備を始めるわけですね。

平井　サルトロの許可が来んから。マライーニがノシャックという山を見つけて，前の年にそのへんに入ったという情報があって，電報で登ったかどうか聞いたら，登ってませんと。

近藤　ノシャック前にサルトロの募金を始めてて，吉井さんから，回せ回せとやかましくいわれた。

斎藤惇　ノシャックは，オシメさんやったか？

山口　ノシャックは，オシメさんのかなりの執念で成立したんや。

岩坪　オシメさんは，チョゴリザに行けなかって，どうしても次は行くぞ，いうて頑張ってはったわけです。チョゴリザのときに，私は食糧係で，オシメさんにえらい世話になったんで，ノシャックのときは，わりかし頑張るわけです。

平井　ノシャックは，山日記の山の一覧に，「未踏」で出てたんを見つけたんや。あれは偵察で，次の年に本隊出すつもりやったんやね。

斎藤清　本隊の候補者は？

山口　行きたいのは，あのころはいっぱいおった。決まってはいなかったけど……。

平井　チョゴリザの登攀隊長は，初め，ザッカスやったんやけど，ザッカスではちょっとしんどい，いうんで，藤平さんにお願いした。3月ごろやったな。

岩坪　ザッカスは一生懸命にやりよんのやけど，上の人には，「あれは，頼りない」と思われとった。会議のときに遅れてくるとか……。

近藤　アンナプルナのときも，あんまり評判ようなかった。

岩坪　ザッカスは，洋平さんと反対に，下のものには大変うけがよかったけど，先輩たちにウサン臭がられてた。

藤平　アンナプルナのとき，意外にもろいという気がしたんだね。アンラッキーな男やった。

林　あいつは雑いからね。五郎とか，ポコみたいな子分がついていて，初めて役に立つ。

平井　山口さんとペアになってたんやね。

山口　そやけど，チョゴリザの準備のときは，ようやりおうてた。お互い，いいたいこというてても，こいつはこういうやつということが，互いにわかっていたからね。キャラバン中でも，しょっちゅう，いい合いしてた。泰安さんや桑さんが，大変心配しはって，別々に歩かしてはった。

林　アンナプルナのときなど，安田武君にテントに関して，かなり世話になったね。チョゴリザのときもか？

岩坪　安田さんは，アンナプルナの装備がよくなかったということが原点にあって，チョゴリザ，サルトロと続いてる。ナムナニもブータンのマサコンも世話になっているんですよ。常に，アンナプルナのジェットストリームが頭の中にあるんですよ。植村直己は，「安田さんの作ってくれた装備が，最後には頼りになる」といっていた。

林　安田というのは，特筆すべきだ。

ヤルンカンを見つけた中尾佐助

平井　サルトロの次に，なんで，ヤルンカンということですが，中尾先生が，「AACKは，情報を得るのをサボっている」とおっしゃった。

中尾　私が，カンチの辺りに，大阪府立大学の連中を偵察に派遣して，対面の山へ登って，写真を撮ってこさせた。その写真をもとに，大阪府大が力不足でできんということで，AACKに持ってきたんだ。

平井　ほんで私が最初からやってたんやね。

岩坪　初めは，サウスもウエストも両方やろうという話やったんやね。

平井　すぐに許可が来たけれど，インドから横やりが入って，即，とりやめになって，舟橋さんが交渉に行かはった。なぜあかんかと聞くと，カンチェンジュンガという名前がいかんというので，中尾先生の案で，ヤルン氷河の源頭にあるのでヤルンカンという名前で出しましょうということになって，それでアプリケーションを出して，それでもらちがあかんので，ジャンとランプが登場するんや。

中尾　クリシュナがね，今西寿雄と飯食ってるときに，こっちのインチキを見透かしたように，「ヤルンカンなんて名前はない」なんていいだして，僕はね，このやろう，俺があそこへ行って調べたんだ，といったんだ。ヤルンカンを知らんのは，お前の無知なんだって，猛然とやったんだ。それで最後に，許可書来たでしょう。シッキム側もいかんといってたね。インドの政府も，その後でひっくり返してだましてやろうと考えていた。

岩坪　とにかく，ヤルンカンという名は消えない。

平井　ヒマラヤンジャーナルもそうなっている。命名者は中尾さんやけど，公式には，住民に聞いたことになっている。

中尾　クーラカンリにしても，マサコンにしてもいい山だが，それも僕が薦めてたんだ。

岩坪　中尾さんの功績は大ですな。ブータンまで来たところで，それでは，これで終わらせていただきます。

（編集：斎藤清明）

高所医学生理学の展望
― カンペンチン，ナムナニ，マサコン ―

松　林　公　蔵

1　はじめに

わたしは，1982年カンペンチン，1985年ナムナニ，マサコンと4年間に3回の遠征に参加する機会を与えられ，3峰に初登頂する幸運に恵まれた。この幸運は，望外のことであった。同時に自ら医師として，自覚的意識をもって高所を体験し，高所環境下での行動の中での諸種の医学的問題点をひろいあげ，次にそれをフィールド調査のテーマとして実地に検証し得たこともまた貴重な体験であった。

わたしたちが一連の遠征登山活動の一環として行った高所生理学的研究によって浮き彫りとなった問題点，そしてそこから得られた知見は，従来高所生理学の学問分野で未解決であった領域の一部を明らかにすることができた。しかし同時に，高所問題に対して新たな疑問，さらなる研究テーマを提出していることもまた事実である。

ここでは，この一連の学術調査を通して，高所生理学の部門で得られた成果について，できるだけわかりやすく述べてみたいと思う。

2　カンペンチン以前

わたしたちは，山岳部の現役時代，高所医学レクチャーを通して，ヒマラヤ高所登山では，血液が濃くなり，全身に浮腫が生じ，ひどい場合は，脳や肺に水がたまって高所性脳浮腫，肺水腫となり，これらが高山病死の大部分を占めることを教えられていた。

しかし，このように脳や肺に水がたまってくるメカニズムについては，心臓説や腎臓説があり，いまだにその詳細は不明で，世界中の高所生理学者がこの問題の解明に全力をあげている。低圧室での実験や，登山前後での人体機能の比較といった研究が精力的に行われているが，現在に至るまでその詳細は不明である。

高所環境下で人体に生ずる生理学的変化はおよそ平地の生理学では想像を絶するすさまじいものがあり，高所生理の研究は実際に高所で行わなければ解明できないのではないかということをわたしが肌で感じたのは，医師になって2年目，関西学院大学のカラコルム遠征隊に参加して，自ら初めて高所を体験した1979年7月のことであった。

標高3500mを超えたあたりから，全隊員が多かれ少なかれ身体のむくみを覚え，著明な頻脈を呈してきた。同時に頭痛，嘔気，嘔吐，食欲不振，下痢といった自律神経症状である。平地で体力があるか否かはあまり問題ではなく，急速に高度をあげてゆく者に顕著であった。やがて4500mのベースキャンプでしばらく滞在し，高度に慣れるにしたがって，安静時の脈拍は正常化し，尿も十分でるようになって，種々の自律神経症状が嘘のように消えてしまう。

このときわたしのもった印象は，高所で最初に反応するのは，心臓や腎臓自体ではなく，それらを調節する自律神経系とホルモンバランスではないかというものであった。生理的変化が，高所に達して数時間であらわれるのではなく，症状があらわれるのに2～3日かかることも，自律神経系の関与を考えさせられたひとつの要因である。

とくに医学的研究テーマや測定機器ももちあわせずに入山したわたしたちは，以後1か月の登攀活動を無事に終えたが，登頂はできずに断念して下山した。わたしの印象は，あくまで漠然としたものにすぎず，帰国後は日常の診療と“平地の研究”に戻り，高所問題は記憶の一隅を占めるものとなりつつあった。

高所における自律神経系の関与を実際に検証する機会が再び訪れたのは，それから2年半後，斎藤Yさんからの1本の電話で，「1982年にチベットへ行ってもらうから，医学調査の研究テーマを考えておきなさい」というものであった。当時わたしは遠く鹿児島の病院に勤務しており，まさに寝耳に水のような状況で，高所問題を再び自分の問題としてとりあげることになる。

3　カンペンチン

わたしは神経学を専攻する神経内科医であるので，神経系という視点から人間の生理現象をとらえる習慣が身についてしまっている。

神経は，大脳皮質を中心として複雑な精神現象を営む高次神経系，運動や知覚刺激を伝える体性神経系，それに内臓諸臓器を調節している自律神経系の3つに大別され，前2者がある程度“意志”のコントロール下にあるのに対して，自律神経系は意志とは関係なく活動している。

心臓の拍動を決め，腸管の動きを調節し，発汗や体温保持，そして広く血管の収縮や拡張をつかさどっている自律神経系は，体外環境に合わせて内臓の働きを調節しているひとつのシステムである。これは交感神経系と副交感神経系という，2つの拮抗するサブシステムに分けられ，前者は主として動物が闘争状態にあるときに優勢となる。瞳孔を広げ，血管を拡張させ，心拍動を増し，血圧を上げ，胃腸の動きを抑制するのは，主としてこの交感神経系の働きである。

外界と人間の身体とのバランス調節にあずかる自律神経系が，高所登山という異常環境下にまず最初に反応するであろうことは，当然予測されることである。しかしながら，内外の文献をあさっても，ヒマラヤにおける自律神経系の反応を系統的に調べたものはほとんどないことがわかった。

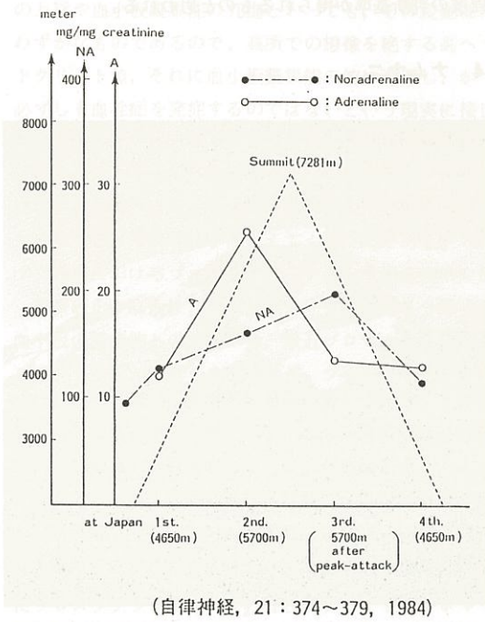
そこで最初のテーマとして，高所における交感神経の活動を考えてみることにした。

(1)　高所滞在時における尿中カテコールアミンの変動

交感神経が活動すると，神経の末端からカテコールアミンという神経伝達物質というものが放出されるので，血中あるいは尿中のカテコールアミンを測定することによって，交感神経の活動の程度を知ることができる。

カンペンチンでは，尿中のカテコールアミンを測定することとし，日本出発前にコントロールをとり，以後，ベースキャンプ（4650m），前進キャンプ（5700m），頂上（7281m）往復後の5700m，およびベースキャンプ帰着時の計5回の尿を採取した。尿は塩酸処理を行った後，液体窒素中に凍結保存して日本にもち帰り，高速液体クロマトグラフィー法で測定した。

その結果，ノルアドレナリン，アドレナリンというカテコールアミンが高所では著明に上昇していた（図1）。



（自律神経，21：374～379，1984）

図1：高度による尿中ノルアドレナリン，アドレナリンの変動

すなわち，高所登攀時には交感神経系が異常に亢進していることがわかった。これは考えてみれば当然予測されることではあるが，初めて明らかとなった事実である。

肺水腫や脳浮腫は，血液の液性成分が血管から肺や脳に漏れ出ることであるので，この血管の透過性をカテコールアミン，すなわち交感神経系が変化させている可能性があり，これは将来さらに検討されるべき問題である。自律神経系の調節破綻が高山病を結果している可能性がある。

(2)　高所における心電図の変化

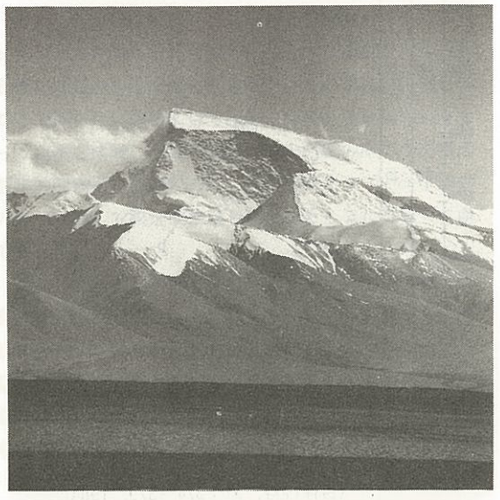
チョゴリザやサルトロ・カンリ遠征以来，主として中島ダンナさんや斎藤Yさんの努力によって，ヒマラヤでの心電図変化に関する膨大な資料が蓄積されている。

今回も，従来の研究を継続する意味で，各高度で全隊員の心電図を記録した。ヒマラヤでは，肺に負荷がかかり（右室負荷），酸素濃度が低下するために，一種の虚血性心臓状態となる（ST低下，T陰性化）という従来

の知見を確認し得ただけであったが，若干のＳＴ低下をきたしていた40歳代の隊員でも無事登頂を果たしており，自己のペースをくずさぬ限り，安全に登攀活動が可能であることを実証している。

心電図のみで登頂可能か否かを論ずるのには問題が残るが，心拍数とＳＴ低下の程度を考えあわせると，ある程度の判断基準が得られるものと思われる。

4　ナムナニ



高所では，低酸素環境に伴って赤血球が増加することが古くから知られているが，血球成分を正確に測定した報告は意外に少ない。

ナムナニ遠征は，学術隊の規模が大きいのとベースハウス（4700ｍ）までトラックで入れることもあり，比較的大がかりな医療機器をもちこむことが可能である。

したがってナムナニ登山では，高所で血液が濃縮される問題を中心に，いくつかのテーマを医学部門の学術研究課題としてとりあげた。

隊に医師が３人いるということも，各種測定を行ううえに大きなメリットとなった。

(1)　高所登山時，高ヘマトクリット下における血小板凝集能

ヒマラヤ低酸素環境では，赤血球が増加し，血液中の有形成分（ヘマトクリット）が異常高値を示すことが古くから知られている。一方，血液中には，出血した場合に止血作用を営む血小板というものがあり，この血小板が塊をつくると逆に血栓をつくりやすくしてしまう。

現在の成人病医学，すなわち脳血栓や心筋梗塞の研究分野では，ヘマトクリットの高値（血液が濃縮している状態）と血小板凝集能の亢進という２つの要因は，脳血栓や心筋梗塞をひきおこしやすくする血液側の２大危険因子として恐れられている。

高所登山時には，生理的条件下で著明な高ヘマトクリットを呈するが，血栓症の発症はそれほどには多くない。したがって，高所環境下では，血栓形成に対する何らかの防衛機構が働いている可能性が推測され，まず血小板の凝集能に着目した。高所での血小板凝集能に関する研究はいまだに報告されていない。

測定にあたっては，自動血球算定装置，血小板凝集能測定機（東亜医用電子株式会社）を借用し，ベースハウス（4700ｍ）で測定した。

ヘマトクリットの高所での変動の結果を図２に示す。

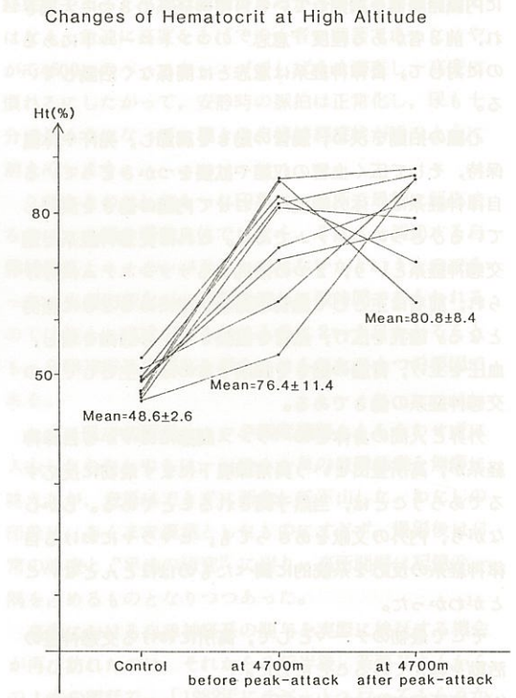


図２：高度によるヘマトクリットの変化

ヘマトクリットは，だいたい40～50％が平地での正常値であるが，今回の測定では，76～80％と異常な高値を示しており，このようなことは平地では絶対におこり得ないことである。

次に，血小板凝集能の成績を図３に示す。血小板凝集能は図３上段に示すように，Ⅰ型が正常であり，Ⅱ→Ⅲへと移動するにしたがって亢進を示している。この型別に隊員の血小板凝集能を分類すると，多少の例外はあるものの，4700ｍベースハウス到着時に凝集能は一時的に

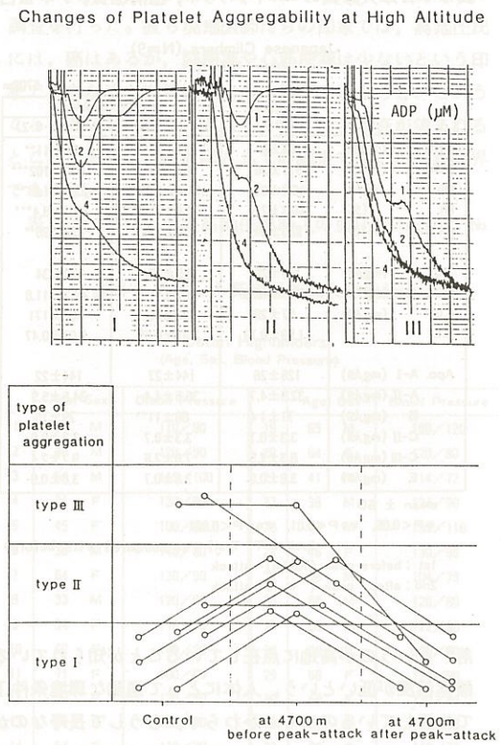


図３：各高度での血小板凝集能の変化

亢進を示し，高度に順化するにつれて正常化する傾向を有した。

しかし，高所ではヘマトクリットが高いので，測定技術上，血小板凝集能はいっけん低めに出ている可能性が高く，高所で血小板凝集能は亢進していると考えてよい。

高所環境下では，ヘマトクリットが高値を示し，それを代償するために，血小板凝集能は低下するのではないか，というのが当初の予想であった。が，結果は逆であった。ヒマラヤで，ヘマトクリットとともに血小板凝集能が亢進を示しているという事実は驚くべきことである。脳血栓をはじめとする，全身の血栓症をひきおこしかねない極めて危険な状態といえるからである。血小板凝集能を特異的に抑える薬にアスピリンがある。日常の病院でも，脳血栓や心筋梗塞の治療や予防に最近頻繁に使われ出している。高所でも，血栓などが疑われる際は，アスピリンをまず使用すべきである。ヒマラヤでは，よくおこる頭痛に対してアスピリン（バファリンなど）を愛用している人が多いので，この場合結果的に血栓の予防を行っていることになろう。ともかく，ヘマトクリットが異常に高く，血小板凝集能が亢進しているにかかわらず，血栓症の発症はさほど多くない。したがって，血栓に対して阻止的に働いている何らかの未知な予防的機構が生体内に存在するに違いない。もしもこの血栓阻止機構やその物質が解明されれば，脳血栓や心筋梗塞というもっとも多い成人病の治療に大きな福音をもたらすことであろう。平地における生理状態では，ヘマトクリットの上昇や血小板凝集能の亢進といっても，その変動幅はわずかなものであるので，高所での想像を絶する高ヘマトクリット値，それに血小板凝集能の値に遭遇し，かつ必ずしも血栓症を発症するのではないという現実に接しない限り，体内に未知なる血栓阻止機構があるかもしれないというような発想は生まれてこなかった。この点，日常の生理学的研究からでは得られない，ヒントというものをフィールドワークは与えてくれたのである。

(2)　高所におけるプロスタグランディン代謝産物の変動

動脈硬化や脳血栓，心筋梗塞を研究している分野で，血小板の凝集能との関連から，最近プロスタグランディンという物質が注目をあびている。プロスタグランディンは最初，精液の中に発見され，子宮を収縮させる働きがあることが解明されたが，その後，脳や血管，血小板などにも存在し，極めて大きな薬理学的作用をもつことがわかってきた。1985年の医学生理学部門のノーベル賞は，このプロスタグランディンに関する業績に対して与えられ，今後さらに注目されてくる物質であろう。とくにプロスタグランディン I_2（PGI_2）と，トロンボキサン A_2（TXA_2）は，前者が血管を拡張させ，血小板凝集能を抑制するのに対して，後者は血管を収縮させ，血小板凝集能を亢進させるという，相反する作用をもって生体のコントロールを行っていることが最近わかってきた。高ヘマトクリットと血小板凝集能が亢進する高所では，脳血管は拡張していることが知られている。また高所性脳浮腫や肺水腫は，微小な血栓が脳や肺の血管を閉塞させるのではないかという説が古くからある。このへんの鍵をにぎるのが PGI_2 と TXA_2 であるので，高所での両者の動きを追ってみることが必要であるが，このような研究は今までに全くない。もっとも PGI_2 と TXA_2 の半減期は極めて早く，直接これを測定することは困難なので，その代謝産物である $PGF_1\alpha$ と TXB_2 の両者を測定した。その結果，高所に登るにしたがい，両物質はパラレルに上昇し，とくに，高山病や凍傷にかかった隊員で著明であった（図４）。この両物質の，高所での役割についての解釈はさらに今後の検討を要するが，高山病発症のひとつの鍵をにぎっていることには間違いないと思われる。

(3)　高所での血清脂質，アポ蛋白の測定

血栓との関連で，ヘマトクリットや血小板凝集能，プ

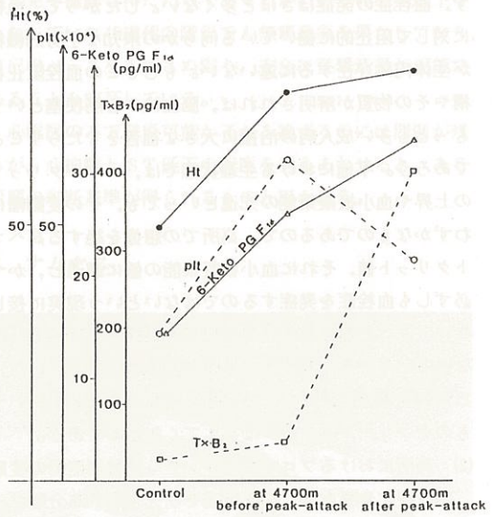


図4：高度による，6-Keto $PGF_1\alpha$，TXB_2の変化

ロスタグランディンとは別に，コレステロールを中心とする血清脂質を無視することはできない。コレステロールは動脈硬化に主要な役割を担い，現在動脈硬化に阻止的に働くHDL－コレステロールと動脈硬化をつくる方向に働くLDL－コレステロールの2種類に大別されている。俗に良いコレステロールと，悪いコレステロールといわれるゆえんである。Nestelらは，オーストリアの登山隊の成績から，高所ではHDL－コレステロールが通常の数倍に上昇していると報告している。もしもこれが事実であれば，興味ある所見であるが，Nestel以後追試が行われていない。わたしたちは，隊員の各高度における血清脂質各分画の測定を行ってみた。

結果は表1に示すように，血清脂質は，わたしたちの場合全く高度による変動を認めなかった。測定方法が，Nestelよりもわたしたちの方が正確な点もあるが，日本人と西洋人の人種差や食物の影響も考慮されねばならず，さらに今後の検討を要する問題である。

(4) チベット高地住民の血液学的，血清学的検索と動脈硬化の程度

わたしたちのように通常平地に住む民族が，高所へ登ると，すさまじい生理学的変化がおこることが，これまでの調査成績でわかってきている。

では，一生の間，低酸素環境下で生活するチベット高地民族は，いったいどうなっているのであろうか。

アンデスの調査では，アンデス高地民族は，ヘマトクリットが高いにもかかわらず，脳血栓や心筋梗塞は極めて少ないという疫学調査があり，いくつかの“長寿の部落”というのが高地に点在していることが知られている。酸素濃度が低いという，人体にとって過酷な環境条件下で生活しているのにもかかわらず，どうして長寿なのか。これは素朴な疑問であり，現代文明社会で問題となっている動脈硬化を中心とする成人病の秘密に一歩ふみこめるのではないかという期待もあって，チベット族の調査を企画した。

表1：日本人隊員のヘマトクリット，血清脂質，アポ蛋白

Japanese Climbers (N=9)
(Age : 29.4±5.2)

at 5700m

		Before (85・2)	During Climbing 1st (85・4・27)	During Climbing 2nd (85・6・2)
WBC	(×10²)	66±9	124±26***	88±11**
RBC	(×10⁴)	511±36	793±142***	870±102***
Hb	(g/dl)	16.2±0.9	21.4±1.8***	23.3±1.6***
Ht	(%)	48.3±2.6	76.4±11.4***	80.6±8.4***
plt	(×10³)	285±54	628±225**	428±98**
T.C.	(mg/dl)	169±28	155±22	147±34
HDL-C	(mg/dl)	58.3±13.8	49.7±11.7	49.2±11.8
T.G.	(mg/dl)	97±26	102±49	182±171
A.I.		1.99±0.70	2.21±0.55	2.03±0.47
Apo. A-I	(mg/dl)	126±26	144±27	144±22
A-II	(mg/dl)	32.9±4.7	36.5±4.4	34.5±5.9
B	(mg/dl)	71±14	88±11**	79±15
C-II	(mg/dl)	3.3±0.7	3.3±0.7	3.3±0.9
C-III	(mg/dl)	8.3±2.5	7.8±2.6	9.2±2.4
E	(mg/dl)	3.8±0.6	3.9±0.7	3.8±0.9

mean ± SD
*P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001
(paired T−Test) (as compared with before)
1st : before peak (7694m)−attack
2nd : after peak (〃)−attack

今までに，チベット族に関するまとまった医学調査はほとんどなく，その実態はヴェールでおおわれている。

チベット民族の動脈硬化などに関する調査のためには，採血が必須である。しかし，チベット民族は採血されることを極めて嫌がる。この壮大な研究遂行の最大の難関は，この一点にあった。中国政府としても，少数民族保護政策のうえからも，少数民族が嫌がることを強要することはできない。

斎藤Yさんや吉田与和氏の中国登山協会に対する強力な働きかけ，登山協会とチベット衛生部との緊密な会議，阿里地区人民政府の例外ともいえる好意的協力，朝から深更まで放牧民のテントを回って採血にあたった李舒平医師，幾多の政府機関，多くの人びとの一致協力した努力の成果として，3800～4500mに放牧生活を送るチベット高地民族35人の血液が採取された。チベット族の疾病に関する疫学調査に関してはほとんど知られていない。

わたしたちは，キャラバンの過程で，獅泉河の人民病院，解放軍病院，普蘭の病院，三十里営房の駐屯軍医務班，そしてウルムチなどに勤務する医師たちに対してチベット高地民族の疾病分布，死因などについて聞き込み調査を行った。彼ら現地医師たちの印象では，高地住民には，癌はあるが，脳梗塞や心筋梗塞は少ないという印象で，少なくとも漢民族よりは長寿であるらしいということであった。将来，きちっとした疫学調査が望まれるところであるが，遠征隊としての調査ではこの辺が限界であろう。

表2は，チベット族高地住民35人の血圧であるが，No.19と23で高血圧を認めるが，残りは収縮期血圧（上の血圧）はさほど高くない。しかし拡張期血圧（下の血圧）は，全般的に高いので，両者の差である脈圧が小さくなっているのが特徴的である。母集団の数が少ないので，断定的なことはいいがたいが，高血圧が多いというわけでは決してない。平地民族のわたしたちが高所に登ると高血圧を呈するのと対照的である。

表2：チベット高地民族35人の血圧

Tibetan Highlanders
(Age, Sex, Blood Pressure)

	Age, Sex		Blood Pressure		Age, Sex		Blood Pressure
1	63	M	110／90	19	65	M	180／120
2	48	M	120／90	20	64	F	120／80
3	54	M	140／100	21	41	M	114／72
4	31	F	120／80	22	36	M	124／90
5	45	F	100／80	23	72	M	158／116
6	36	M	140／80	24	46	F	130／90
7	64	F	130／90	25	36	M	104／79
8	33	M	120／80	26	68	M	120／80
9	34	F	110／70	27	63	M	122／80
10	62	F	140／90	28	68	F	120／80
11	71	F	100／80	29	68	F	120／90
12	39	F	120／80	30	68	F	130／80
13	59	F	120／90	31	67	F	110／80
14	54	F	110／80	32	69	F	110／70
15	58	F	120／80	33	67	F	118／88
16	37	F	110／80	34	43	M	130／90
17	34	F	140／110	35	39	F	120／80
18	58	M	130／100				

表3：チベット高地民族35人のヘマトクリット，血清脂質，アポ蛋白

Tibetan Highlanders
(3800～4500 high)

		Male (N=16)	Female (N=19)
Age		49.2±13.8 (33−72)	56.5±13.2 (31−71)
RBC	(×10⁴)	588±57	604±42
Hb	(g/dl)	17.7±1.8	17.8±0.9
Ht	(%)	56.7±6.0	58.4±4.0
plt	(×10³)	124±28	116±32
T.C.	(mg/dl)	128±21	137±32
HDL-C	(mg/dl)	48.8±10.2	50.7±9.8
T.G.	(mg/dl)	91±33	88±34
A.I.		1.66±0.40	1.74±0.64
Apo A-1	(mg/dl)	122±21	120±21
A-II	(mg/dl)	30.4±4.5	28.3±4.8
B	(mg/dl)	56±16	61±20
C-II	(mg/dl)	2.6±1.2	2.6±0.9
C-III	(mg/dl)	6.3±2.0	6.6±1.7
E	(mg/dl)	2.9±0.6	2.9±0.7

mean±SD

次にチベット族35人のヘマトクリット，血清脂質の結果を表3に示す。ヘマトクリットは，平均民族よりは高値で，わたしたちが高所に登ったときに示すほどには高くない。平均57～58%である。これでもわたしたちの常識的医学からいえばたいへんな血液濃縮である。

一方，総コレステロール（TC）は，全般的に低く，この値は戦前の日本人の値とよく似ている。しかし，良いコレステロール（HDL－C）は，その割に高く，両者の比をとる動脈硬化指数（AI）は極めて低い値となっている。この点だけをとりあげてみると，チベット高地住民は，血液が濃く血栓症をつくりやすい傾向を有するが，動脈硬化の方は欧米や日本人などの平地民族に比べて極めて軽いといえる。

このデータのみから，すべてを結論づけることはできないが，低酸素環境という過酷な条件にあって，かつ血液が濃縮された状態のチベット族の方が，動脈硬化の程度は軽いという知見は，現代の動脈硬化学にひとつの新しい光をあてるものであろう。

(5) チベット族の血清脂肪酸

グリーンランドのエスキモーの調査から，Dyerbergが，魚油に含まれる脂肪酸の一種であるエイコサペンタエン酸（EPA）を多く食するエスキモーには動脈硬化性疾患が極めて少なく，EPAには抗血栓，抗動脈硬化作用があると報告して以来，EPAは全世界の脚光をあびている。

日本においても，農村部と漁村部の比較調査から，魚類を多く食する漁村民には，動脈硬化性疾患が少ないという追試レポートもなされ，「動脈硬化を予防するためにはサバを食え」と一般的にいわれるほど広く人口に膾炙されるようになった。ではいったい，魚肉などを食する機会のないチベット高地住民ではどうなっているのであろうか，というのがこの研究の素朴な動機であった。

その結果，予想通りチベット族の血清中EPAは低値を示した。正確な疫学調査で，チベット民族の動脈硬化が少ないとすれば，DyerbergのEPA説には一部修正を加えねばならぬであろう。

もっとも，EPAの抗動脈硬化作用自体は間違いのないことであり，わたしたちの成績や，人種差などを考慮に入れるべきで，すべてEPAで説明することはできな

いという点で，今や一世を風靡しているＥＰＡ万能の論調に一種のくさびを打ち込む役割を担ったことになる。

(6)　その他

以上にのべた医学的テーマのほかに，李舒平医師が，高所で水分の出納をつかさどるホルモンのひとつであるアルドステロン，および心臓の収縮力を評価する心機図の測定を行っており，現在データ解析中である。

また，高所における種々漢方薬の効能を治験し，心電図の資料収集を行った。

(7)　角谷隊員の高山病

以上，ナムナニ登山のかたわら，わたしたち医師団がくり広げた医学調査とはまた別に，本登山でひとつのエポックをつくった，臨床的事例をあげねばならない。

角谷隊員の頂上直下での高山病である。

1985年５月28日，第２次アタック隊がまさに最終キャンプ（7420ｍ）を出発しようとしたとき，現地時間午前７時半ごろ，角谷隊員が体調の不調を訴えた。

彼は，「平衡感覚がおかしいから，アタックはとりやめる」と訴え，やがて自力行動不能に陥った。そして閉眼し「寒い寒い」とくり返す。口唇が紫色となり，体温36.4℃，脈拍80，呼吸数79～120，やがて彼は昏睡状態に陥った。

斎藤副総隊長は，肺水腫と判断し，平林登山隊長をして日本人隊員３名，中国人隊員３名は登頂を断念し角谷隊員をテントに包んでただちにひきおろす指令を与えた。この間，角谷隊員が一時的に覚醒したおりに，斎藤副総隊長の指示でラシックス（利尿剤）１錠の投与がなされている。角谷隊員のひきおろす作業と並行して，酸素を角谷隊員に与えるべく，チベット族隊員２人が先行し，さらに角谷の直接治療にあたるために松林と吹田佳晴がＢＣを後にした。

テントにくるまれた角谷に３本のザイルを巻きつけ，それぞれの両端を６人が持ってそろそろと下降し，一方ＢＣからは４人の隊員がひたすら登るという作業は約８時間にわたった。

この間角谷の尿の出はよい。

午後４時55分，Ｃ２で下降部隊と合流したわたしは，角谷の身体を診察した。脳浮腫の兆候はすでにない。呼吸，脈拍も比較的落ちついているが，背部に軽度のラ音が聴取される。

この時点でわたしは，彼の救命可能を確信した。

トランシーバーから伝えられる角谷の状況からみると，まさに奇跡的である。

万全を期すために，さらに500ｍ下のＣ１まで下ろすこととし，Ｃ１に到着後ただちに，肺や脳の水分をひくためのグリセオール，ステロイドの点滴を開始した。

脳浮腫や肺水腫は，脳や肺にはよけいな水が貯留するが，体としては脱水状態にある。したがって，水分を補給しながら水をひくといった療法が必要である。点滴が入るにつれ，角谷は驚くべき速さで回復の兆しを見せ始めた。

夕食のオジヤをすべてたいらげ，尿量も順調である。夜間もわたしの隣で安らかに眠り，翌日，杖で身体をささえながらも独力でＢＣへ下山した。

角谷の呈した症状を後に詳しく分析してみると，7420ｍキャンプで肺水腫をきたしたことはほぼ間違いない。呼吸数の速拍，哨鳴，Ｃ２でもまだ背部にラ音を残したことは，これを物語っている。

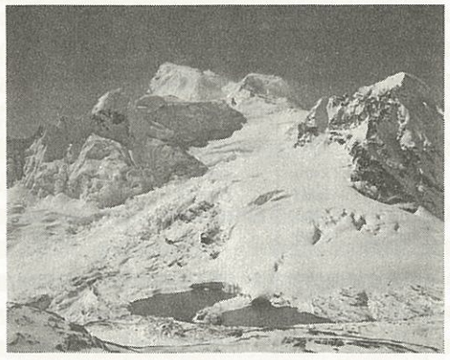
しかし，脳浮腫の存在については疑問な点が多い。平衡失調や意識障害は，脳浮腫の存在を疑わしめるが，Ｃ２では全く脳浮腫の痕跡をとどめていなかった。

おそらく，80～120／分にも及ぶ過呼吸によって，血中CO_2が低下し，そのために脳症状をきたしたものと考えるのが妥当と思われる。

いずれにせよ，登山史上に残る奇跡的な生還といえよう。

高山病の治療は古くから，「第１に下山，第２に下山，第３に下山」といわれる。彼の生還をもたらしたものは，日中双方の隊員たちの必死の努力による1300ｍの下降である。高山病の治療が，臨床医学をはるかに越えた何ものかであることを，わたしは痛切に知った思いがする。

5　マサコン



ナムナニ登山によって，7420ｍ最終キャンプで高所肺水腫に陥った隊員の劇的ともいえる救出活動を体験し，高所医学フィールドワークのノウハウをようやく会得したわたしは，日本に帰って１か月後には再びブータンヒマラヤのマサコン峰に出かけることになっていた。

ブータンは長期にわたってジャングルを抜ける文字通りのキャラバンであるので，そこに投入できる医療機器にはおのずから限界がある。

ナムナニから帰った時点で，わたしの頭の中に２つの高所医学上のテーマが浮かんでいた。それは，カンペンチンでやり残した，もうひとつの自律神経系である副交感神経系が高所でどのような働き方をするのかという点と，いまひとつ，高所に登るということ自体が，神経系とくに脳に何か後遺症を残さないかということである。

とりわけ，8000ｍ峰の無酸素登山が広く行われるようになりつつある現在，低酸素の脳に与える影響の解決は焦眉の問題と思われる。

(1)　高所における副交感神経機能

カンペンチンにおける尿中カテコールアミンの成績から，高所登山時には，自律神経のうちの交感神経系が著明に亢進することを明らかにした。

では，もうひとつの自律神経系である副交感神経系はいったい高所でどうなっているのであろうか。

高所では，嘔吐や下痢，ひどいときは胃潰瘍になるといったような副交感神経症症状がよくおこるが，高所での副交感神経機能に関する研究は今まで全く報告されていない。

副交感神経機能を評価する指標として，心拍数の変動をモニターするという方法がある。心臓の拍動の一拍一拍は，規則的ではあるが，厳密にいうと，一拍と一拍の間隔は呼吸の変化などによって微妙に変動しており，副交感神経機能が低下するとこの変動が小さくなり，亢進してくると変動が大きくなる。

これを測定するには，心電計とコンピューターがもうひとつあれば手軽に行える。

今回はマサコン登山のポイントとなる高度で，この心拍変動係数（ＣＶＲ－Ｒ）と，脈拍（ＨＲ），血圧（ＳＢＰ）との関係を明らかにすることを目的とした。図５にその結果を示す。これをみると極めて興味深い事実が浮き彫りとなってくる。すなわち，人が高所に登ってゆくと，まず3500ｍから4500ｍくらいのところで脈拍の増加という形で生体は反応する。次いで5000ｍ付近まで登ると，このあたりから交感神経が緊張してくると同時に血圧があがり出す。それとともに，ＣＶＲ－Ｒの著明な上昇に示されるように副交感神経機能も高まり，その結果として，脈拍（ＨＲ）が正常に復する。すなわち，5000ｍ以上では，交感神経はずっと亢進状態にあり，血圧も高値が続くが，副交感神経（脈拍を低下する方向に働く）は，5000ｍのポイントを通過するときに一時的に過緊張を示す。そしてこの点が，順調な高度順応には必要なものと思われる。

したがって，5000ｍ近辺で，安静時に脈拍が多い人は，十分に順応できていないと考えてよい。

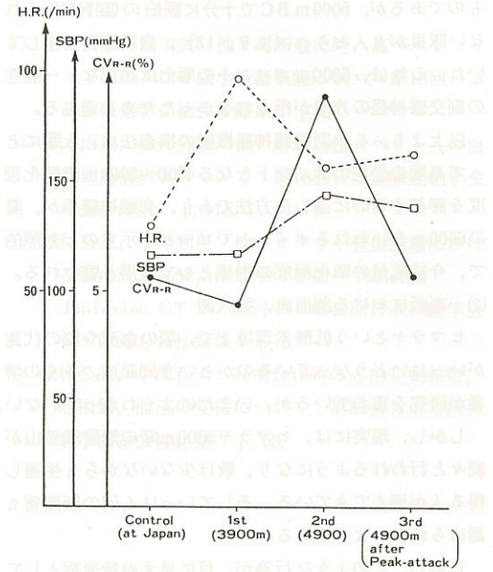


図５：各高度での心拍数，血圧，心拍変動係数の変化

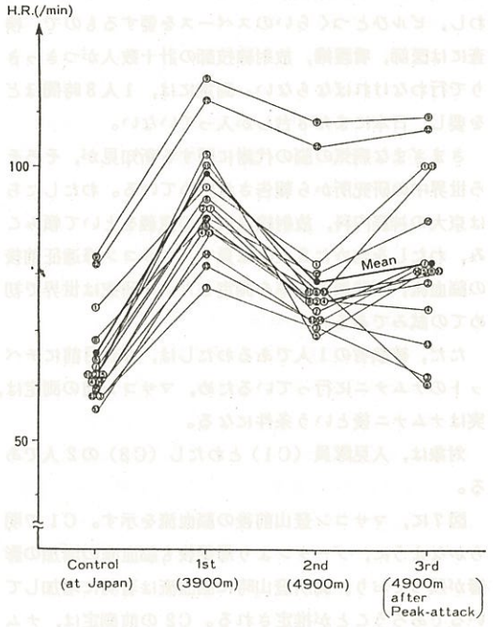


図６：各高度における隊員の心拍数

図6は，個々の隊員の脈拍を各高度順にプロットしたものであるが，5000ｍＢＣで十分に脈拍の低下が得られない隊員が２人おり，（№９，12），高度障害を呈していた。これは，5000ｍポイントの順化に必要な，一過性の副交感神経の亢進が得られなかったためと考える。

以上より，この副交感神経機能の検査法は，人間にとって高度の最初のポイントとなる4500～5000ｍの順化程度を評価するのに適した方法であり，交感神経系が，魔の6000ｍといわれるポイントでピークを示すのと対照的で，今後隊員の順化程度の指標として有用と思われる。

(2) 高所における脳血流，脳代謝

ヒマラヤという低酸素環境下で，脳の血流や脳の代謝がいったいどうなっているのかという問題は，多くの学者が研究を重ねているが，いまだによくわかっていない。

しかし，現実には，ヒマラヤ8000ｍ峰の無酸素登山が続々と行われるようになり，数は少ないながらも生還し得る人が増えてきている。そしていっけん何の脳障害も認められないようである。

しかし，このような行為が，目に見えぬ後遺症として将来ボケを生じてこないという保証は，現在のところ全くない。

京大病院には，1984年末から，Positron Emission CT（PET）という機械が稼働しており，これによれば，脳の血流，脳の酸素摂取率の測定が可能である。ＰＥＴは，大がかりな医療機器で，地下でサイクロトロンをまわし，ビルひとつくらいのスペースを要するもので，検査には医師，看護婦，放射線技師の計十数人がつきっきりで行わなければならない。測定には，１人３時間ほどを要し，日本にまだ３台しか入っていない。

さまざまな病気の脳の代謝に関する新知見が，そろそろ世界中の研究所から報告され始めている。わたしたちは京大の神経内科，放射線科にその意義をといて頼みこみ，わたしを含めた２人の隊員で，マサコン峰遠征前後の脳血流，脳酸素摂取率を測定した。本研究は世界で初めての試みである。

ただ，被験者の１人であるわたしは，２か月前にチベットのナムナニに行っているため，マサコン前の測定は，実はナムナニ後という条件になる。

対象は，人見隊員（Ｃ1）とわたし（Ｃ2）の２人である。

図７に，マサコン登山前後の脳血流を示す。Ｃ1で明らかなように，ブータンより帰朝後も脳血流の増加の影響が残っており，高所登山時に脳血流は著明に増加しているであろうことが推定される。Ｃ2の前測定は，ナムナニ後なので，前値のほうが異常に高い。すなわち高所では，低酸素環境を代償するために赤血球が増加し，かつ一番大事な脳血流も増加していると考えられた。

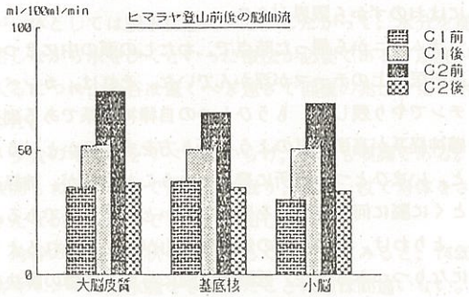


図７：ヒマラヤ登山前後の脳血流

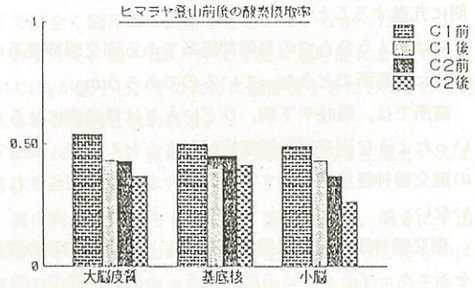


図８：ヒマラヤ登山前後の酸素摂取率

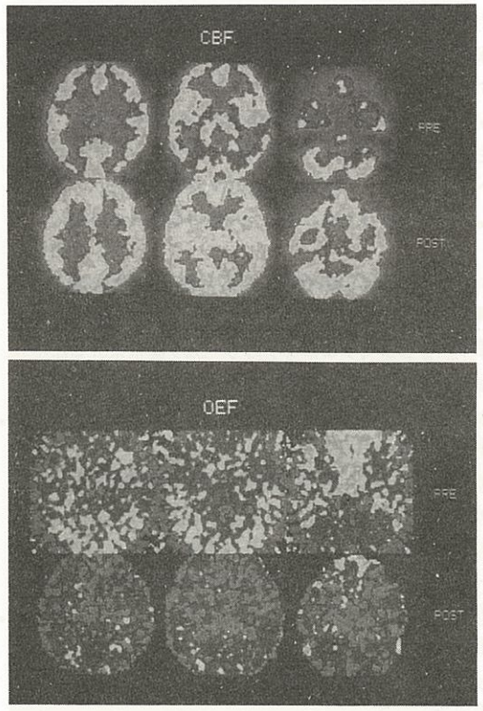
したがっていったん，そのバランスに破綻が生ずると，脳に水がたまってしまう高所性脳浮腫といった状態になりやすいものと推定される。

一方，脳の代謝機能を直接反映している脳酸素摂取率の変化を図８に示す。この図をみると，酸素摂取率は，登山の前後で低下している。２か月前にナムナニに登頂しているわたし（Ｃ2）は，ナムナニに行っていないＣ1よりも前値も低い。この事実は，俗にいえば，登山前後で頭が悪くなったといってよいであろう。

これは，下山して酸素が急に豊かになるための，一種の rebound（反跳）現象で，可逆的な可能性が強いが，ヒマラヤ登山による，非可逆的な脳の後遺症である可能性も必ずしも否定できない。

Ｃ1の脳血流（ＣＢＦ）と，脳酸素摂取率（ＯＥＦ）のブータンヒマラヤ登山前後（Pre, Post）で画像表示した写真を掲げておく。ヒマラヤ前後でＣＢＦの上昇，ＯＥＦの減少がひと目で明らかである。

今後，8000ｍ無酸素登頂を成しとげる人びとに被験者になってもらい，さらなるデータの集積と検討が望まれる。



6 おわりに

以上，３つの遠征に参加する機会を得て，医学部門の学術調査では，かなりの成果をあげることができた。このような成果をあげることができたのも，京大の学術調査の伝統が綿々として続いている結果と思われる。

チョゴリザ以来，林一彦先生や，斎藤Ｙさん，中島ダンナさん，高木ゼンカなどによって受け継がれてきた医学的実証的精神と，データの集積に負うところが多い。

そして今，次なる遠征というフィールドで，さらに確かめておきたいテーマと夢はふくらむいっぽうである。

ここに，先達の人びとの努力に敬意を表し，感謝する次第である。

文　献

1) 松林公蔵，福山秀直　他：高所滞在時における尿中カテコールアミンの変動について—チベットヒマラヤでの検討—自律神経　21：374, 1984.

2) Dyerberg, J., Bang, H. O. et al. : Fatty acid composition of the plasma lipids in Greenland Eskimos. : Am. J. Clin Nutr 28 : 958, 1975.

3) Nestel, P. J., Podkolinski, M., et al. : Merked in crease in high dencity lipoprotein in mountaineers. : Atherosclerosis 34 : 193, 1979.

4) 松林公蔵，塩栄夫　他：高所登山時，高ヘマトクリット下における血小板凝集能について：第18回日本動脈硬化学会総会抄録集：p. 86.

5) 藤本直規，松林公蔵　他：高所居住チベット人の血漿脂肪酸組成について：第18回日本動脈硬化学会総会抄録集：p. 118.

6) 松林公蔵，小澤利男　他：ヒマラヤ登山前後における脳血流，脳酸素摂取率の変動— Positron Emission CT での検討—：第40回日本神経学会中・四地方会抄録集：p. 8.

7) 松林公蔵，小澤利男：高所登山時の心拍変動係数，心拍数，血圧の変化について：第39回日本自律神経学会総会抄録集：p. 53.

西域紀行 ― ナムナニ元老団 ― 行動概要

（1985年6～7月）

山口　克

このたび，日中友好納木那尼峰合同登山隊の登頂成功を期して，「祝賀代表団」が結成され，その一員として同行しました。

メンバーは，AACK側からは，四手井綱英団長，近藤良夫副団長，瀧川悠紀夫，藤田和夫，原田直彦，林一彦，山口克，藤田陸奥麿（後発）の8名，同志社大側からは，吉村公一副団長ら9名，事務局・京都日中友好協会関係からは，吉田興和秘書長，奥山茂彦副団長ら6名，さらに櫻内義雄名誉団長，橋本龍太郎，柳川覺治ら国会議員団関係5名と在北京日本大使館員である大和滋雄文化参事官，平田忠敏医務官の2名，計30名からなる大部隊であった。

中国側からは，中国共産党中央紀律検査委員会委員の黄中先生を長として，許競中国登山協会副主席ら10名ばかりの方々が常に同行して接待に尽力くださいました。ここに厚くお礼申し上げる。

年が明けると還暦をむかえるという自分が，京大側の最年少とあっては，別名「元老団」とよばれてもしかたがない。

今後，この方面はさらに続々と開放されて，訪れる方も多いと思われるので，時間記録を主体に，その行動概要のみを記します。

6月24日（月）

大阪国際空港発（11：00）――上海上空――北京首都空港着（15：20　日本時間）

北京首都空港では，史占春副主席ら中国登山協会の各氏，中江要介北京大使らの出迎えを受け，北京西苑飯店に到着。

夜は中国側の招待により，李夢華スポーツ相ら列席のもと，北海公園の「仿膳」において旧宮廷料理の会食。

ホテルは25階建ての北京では最も新しいものだが，室の魔法瓶にはヌルイ湯が少しだけ。これも現在の中国らしいところか。

6月25日（火）

北京首都空港発（8：45）――烏魯木斉（ウルムチ）空港着（12：30）――賓館着（14：00）

中国民航CA1229便にて首都空港発。「請勿吸烟」の電灯はいつまでたっても消えない。この4時間弱は喫煙者にはつらい。

機内からはゴビの一端，祁連の山々がよく見える。

ウルムチ空港では，新疆ウイグル自治区主席をはじめ，新疆登山協会会長等々多数の出迎えを受ける。

賓館で小憩，昼食後，絨毯工場，新疆展覧館，バザールなどを見学。

夜は小宴会。

広い森の中に点在する賓館の建物は，ソ連との友好時代に，ソ連の技術指導者のために建てられたものだけに，重厚な感じの立派なものである。

ウルムチの標高は約900m。

6月26日（水）

賓館発（8：00）――南山牧場（9：30～12：00）――賓館（13：10～14：10）――烏魯木斉空港発（15：20）――阿克蘇（アクス）空港着（17：35）――賓館着（20：25）

午前中にカザフ族自治の南山牧場見学。標高2200mくらいのところに大滝あり。ここが行きどまりで，下流の小川沿いに美しいアルプ風の牧場が広がっている。野外で接待された薬味のきいたシシカバーブ（烤羊肉串）とナンの風味は格別であった。

ウルムチ空港からは，双発プロペラ48人乗りのアントノフ機で，ひとまずアクスへ向かう。天山山脈の東端をスレスレに越え，同山脈とタクラマカン沙漠の境の沙漠よりを一路西へ。残念ながら雲のためにトムール（ポベーダ，7439m）をはじめ白い峰々は全然見えない。初めて見る異様な沙漠の景観に圧倒される。

アクスで給油，小憩後，カシュガルへ飛ぶ予定であったが，カシュガル方面は強風のため，3時間ばかり空港で待機後，結局フライト中止。急遽アクス泊まりとなる。機内持ち込みの手荷物だけ，着のみ着のままの1泊となる。

思いもよらぬ多数の来客による受け入れ側の戸惑いと，当方の空腹も含めた苛立ちとが重なって，賓館ではちょっとしたトラブルがあった。

アクス自治県の総人口は150万，うち，ウイグル族110万，漢族30万，残りは他の少数民族。沙漠のなかのオアシスといっても，その広さは，大阪府と同じくらい。われわれのもつオアシスのイメージとは桁違いの大きさである。農業が主体で，ここの米はとくにうまいとのこと。また，セメント，砂糖，紡績などの工場もある。共産主義になってからの躍進ぶりはめざましく，スウェン・ヘディンの訪れたころのイメージを一掃されてしまった。

6月27日（木）

阿克蘇発（8：25）――喀什（カシュガル）着（9：35）――賓館着（10：05）

中国は北京時間で統一されているので，ここまで来ると3時間ばかりズレている。10時といっても実質は7時くらい。ここの賓館も，全館絨毯を敷きつめた立派なものである。

14時過ぎ，予定よりすこし遅れてナムナニの隊員たちが，土地の子どもたちの歓迎の列に迎えられて到着。みんな雪焼けの元気な顔をほころばせている。これでひとまず，元老団の最初の目的は達成したことになる。

昼食後，イェティカール・モスク（艾提尕尔清真大寺）とその周辺のバザールを見学。

夜は，隊員の斎藤，平林，岩坪，井上らとスコッチで歓談。

カシュガルの標高は，約1350m。

6月28日（金）　小カラ・クル湖行

賓館発（7：20）――ゲズ渓谷入り口（8：40）――ゲズ検問所（9：45～10：30）――ブルン・クル（11：30）――小カラ・クル湖（12：10～14：35）――ゲズ検問所（16：15～16：35）――賓館着（19：30）

この道は，4000～5000mの峠をいくつか越えて，タシュ・クルガンからパキスタンのフンザへ通ずる中パ公路の前半部である。ランドクルーザータイプの8台の車に分乗して早朝出発。

1時間余で舗装はなくなり，ガタガタの道となってゲズ渓谷に入る。両岸がせばまってくる。シプトンのころには渇水期以外は通れず，チャクラギールの北のウルグ・アルト峠（約5000m）越えを強いられて，4～5日は要した行程である。ゲズの検問所（2300m）のところで，初めて前山越しにクングールの一角を望む。連夜の睡眠不足から，ゴルジュの部分は眠ってしまう。

谷がひらけ，うすみどりの湖，というよりは湿地帯のようなブルン・クル（約3200m）の広々とした眺めは，チャクラギール（約6600m）の白い双峰を背景にして素晴らしい。小カラ・クル湖に近づくころから，左手にクングール（7719m）が頭を見せはじめる。

小カラ・クル湖で昼食，小憩。

元老団ということもあって，原田，林の両医師は血圧や脈拍測定に忙しい。小型のボンベから酸素を吸う人もいた。さすがにこの高さだけあって，みんなセーターを着込む。小雪もチラチラ舞う。

ムスタグ・アタ（7546m）は上半分は雲に覆われ，頂上は瞬時一瞥のみ。めずらしく，その真上に虹がかかっていた。

帰りはカシュガルまで一直線。往復500km近いガタガタ道のドライブだけに，全員がかなり疲れた模様であった。

6月29日（土）　カシュガル滞在

午前，清の乾隆帝に仕えた香妃（シァンフェイ）の墓でも有名なホージャ墳と絨毯工場を見学。

昼過ぎ，後発の櫻内名誉団長，柳川顧問ら一行が到着。（藤田陸奥麿はさらに1日後に到着）

午後は自由行動。

夜は，登山隊・元老団合同での中国側主催の大レセプション。挨拶はすべて，ウイグル語⇌中国語⇌日本語で延々とつづく。主菜の圧巻は「子羊の丸焼き」。ウイグルの食物は，肉類に加え，野菜・果物も豊富で飽きることがない。顔まで脂ぎってきて若がえったような気がする。

夜遅くに，シプトンのころからゆかりの大劇場でウイグルの踊り「マシラフ」，民族音楽を鑑賞。

時差の関係もあって，夜寝るのが遅く，睡眠不足が続く。

6月30日（日）

喀什発（9：10）――英吉沙（エンジシャ，ヤンギ・ヒッサール）（10：30）――莎車（サーチャ，ヤルカンド）（13：00）――葉城（イェーチャン，カルガリク）着（14：05）

登山隊とわかれて，われわれはアカズ峠への旅に出る。

日本製のマイクロバスに分乗して，ほぼ緑の見られるオアシスのなかのよい道を伝ってヤンギ・ヒッサールへ。ここはかつてのキャラバンの要地である。チチクリク峠（4630m）を越えてタシュ・クルガンへ向かう拠点でもあり，刃物の名産地としても知られている。

ここから先はタクラマカン沙漠の端を通る砂の道である。車の窓を閉めきっていても，いつの間にかサングラスが曇り，ノドがいがらっぽくなる。

ヤルカンド・ダリヤ（河）の大きな橋を渡り，探検記などでわれわれに馴じみ深いヤルカンドは，そのまま通過する。同行の中国の人たちは，古来からある中国名の莎車とよばないと，あまりよい気がしないようである。他の地名についても同様。

砂ぼこりにまみれて葉城につく。ここもカルガリクと

いう名で馴じんできたところである。ここの賓館は，一般には未開放のことでもあって，これまでのウルムチやカシュガルのものに比べ，格段に落ちる。水も極端に不自由となり，中庭の手押しポンプで汲みあげねばならない。沙漠の町だなあという感が深い。

昼食，小憩後，バザールと近隣の模範農家を見学。果物とヨーグルト攻勢にあう。

葉城の標高は約1400m。年最高気温は35℃，最低気温は－30℃。大雪のときには1mぐらい積もるらしい。

7月1日（月）　　アカズ峠行

葉城発（8：10）── 柯克亜（ククヤーン，9：10）──阿克美其特（アクミチーチ，10：30）── アカズ峠（11：00～11：50）── 葉城（14：20～16：00）── 莎車（17：35～17：50）── 喀什着（21：15）

いよいよ今日は待望の崑崙へ。

葉城をあとに一路すこし西寄りに南へ。相変わらず砂ぼこりの道を進む。1時間ほどでククヤーン（1900m）のオアシスを通過。左手遥か山裾にククヤ油田の櫓が見える。

10時すぎ，やっと崑崙の入り口にかかる（2400m）。平坦な道を進んできたと思うのに，意外にも高さを稼いでいる。初めて，野生のラクダ数頭を散見。

ここからは山の中腹に切られたスリルに満ちた道を登る。右側通行なので対向車があると右側の崖に寄り，なおさら，ヒヤッとさせられる。右手方向にアクミチーチ（2650m）の小さな緑の部落を見下ろすころから，さらに道は険しくなる。ほとんど灌木も草もない，泥が積み重なったような斜面に圧倒されるばかりである。

アカズ峠（3300m）では「阿卡孜大坂（ダバン）」という中国字での落書きあり。

昼食，小憩。

崑崙の峠といっても，主脈の峠の手前の峠といった感じ。遥か南方は，砂曇りで泥の山がうっすらと望まれるのみ。せめて，この先のセラク峠（4900m）まで行ければ，崑崙主脈の雪の峰々も見られただろうにと，元老団の年を悔やむ。それにしても，往時，カラコルム・パスを越えてカシュガルへと向かうキャラバンは，おそらく，この峠に達してホッとしたのではないかと，感無量であった。

帰路は葉城まで一直線。砂ぼこりのため窓を閉めきっているので暑くてたまらない。葉城手前でクーラーをかけたとたん，パイプにつまっていた砂がワッと車内に満ちて，ひと騒動。ドライバーの疲労のため葉城で2時間ばかりの大休止。ヤルカンドの電話局の前で10分ばかりの休憩があっただけで，カシュガルへ直行。ヤンギ・ヒッサール手前で小さな砂嵐(?)に見舞われる。

夜遅くカシュガルに到着。13時間の行程は年寄りたちにはちょっとキツかったようである。

7月2日（火）

喀什発（13：40）── 阿克蘇着（14：50）

日はさしているけど，相変わらずの砂曇りで，下界はかすかに見えるのみ。アクス近くでやっと視界が開け，アクス・ダリヤが印象的であった。

アクス到着早々，立派な果樹園の日陰のある広場で，ハミウリ，すいか，桃，アプリコット等々の果物を賞味しながら，「一幹旗公社（イーカンシークンシャン）」の人々の歌と踊りの歓待をうける。「酒の歌」「タリムの歌」……。

夜は例によって大宴会。丸焼きにするのに15～16時間もかかる子羊。超大串のシシカバーブ。すいかをくりぬいてフルーツポンチ様にしたデザート，……。前回とは打って変わって準備万端整ったもてなしであった。

真夜中にバザールなど，町を見物。茶店で土地の人と交歓。

賓館のトイレは立派な水洗となっていた。6日間で完成されたことになる。

就寝は翌1時半。

7月3日（水）

阿克蘇発（11：30）── 和田（ホータン）着（12：50）

空を飛ぶのだけれど，いよいよタクラマカン沙漠大縦断。今度の旅で僕が最も興奮したのがこの行程である。

アクスの大オアシスを過ぎてまもなく，タリム・ダリヤの支流(?)がよく見える。飛行機はアクス南方の湖（上游水庫）を右下に見て，ちょうど伏流しているらしいホータン・ダリヤの真上に沿って，一路南へ。蛇行する河が沙漠に消えてゆくさまが手にとるようだ。12時をすぎて，眼下は一面の沙漠。しばらくは塩類の白い斑点が見えたが，それもなくなり，全くの砂の上。かなりの時間，砂曇りのため下界は何も見えない。12時半，マザルタークの上はとうに越えたようだ。砂の雲？が，ときどき晴れ，沙漠のアバタヅラが見えはじめる。スウェン・ヘディンが救出されたのは，この辺りだろうか。

タクラマカン沙漠万歳！

と，叫びたくなる。ホータン・ダリヤが見えたと思ったら，すぐオアシス。ダリヤを右に見て，着陸態勢をとり，これを渡ってランディングする。

待望のホータンである。

ここの賓館は浴室には恵まれないけれど，ウルムチ，カシュガルのものに匹敵するほど立派であった。

昼食後まもなく，旧遺跡の見学に出発。車で北へ約30分，「約特干（ヨートカン）遠王」の遺跡である。西漢の時代に黄金が出たところらしいが，溝のような小川のほとりに，畑のある何の変哲もないところなのに，泥土製の碑以外は写真撮影は禁止。シルクロードのNHK取材班が，くどく要請したにもかかわらず，紹介されなかったところのようで，中国側のわれわれに対するサービスぶりがうかがわれる。これも閣僚格の国会議員同行という恩恵によるものか。

続いて樹齢500年のクルミの木。布札克（ブザック）にある水利庁，玉の工場見学を終えて，夕刻，白玉河の河原で「崑崙の玉？」拾いに興じる。

夜は，相変わらずの祝宴。ここでも子羊の丸焼き。各自に本当の「崑崙の玉」がプレゼントされた。

真夜中まで，近藤副団長の室にて，若い者？だけで酒宴。

就寝は2時。

7月4日（木）

和田発（13：40）── 阿克蘇（14：55～15：20）── 烏魯木斉着（17：30）

午前中，絹織物工場の見学。蚕の繭から美しい織物までの一貫作業である。ホータン博物館では，于闐（ウテン）国といわれたころの仏教遺跡の発掘物が陳列されていた。ホータンのホータンらしいと思われるところは見ぬままに，忙しいスケジュールに追われて，アクスへと飛び立ったのは心残りであった。

アクスで給油のため小憩。とても暑い。ウルムチまでの行程は往路とちがって，庫車（クチャ）や庫尓勒（コルラ）のオアシスがよく望まれた。天山東端の尾根筋に新雪をみとめる。

ウルムチでは，新疆最後の夜の大レセプション。子羊の丸焼き。いろいろのセレモニー。歌手と楽団のアトラクション。黄中先生の話術にはいつも魅了させられる。ウイグルの人たちの声と声量は素晴らしい。元老団の連中もハッスルして歌いに歌う。

7月5日（金）

烏魯木斉空港発（15：40）── 北京首都空港着（19：00）

午前中，絨毯工場へショッピング。結局，ウルムチの街らしいところはなにも見ずに出発。

ボグド・オーラ（ボゴダ，5445m）の山々の眺めが素晴らしかった。帰路のフライトはPIA（パキスタン航空）であるのに，ここでも「請勿吸烟」とはまいった。

北京では，祝賀団として来中した一同と初顔合わせ。

7月6日（土）　　北京滞在

午前中，毛沢東紀念堂，故宮見学。

午後，人民大会堂において，胡耀邦総書記と会見。

夜は，同じく人民大会堂において，中華全国体育総会の招待によるレセプション。

7月7日（日）　　北京滞在

八達嶺（長城）と明の十三陵（定陵）を見学。日曜日の車の停滞の間を，パトカー先導によるドライブはスムーズであった。

夜は日本側のエキシビション，芹洋子のリサイタル。

7月8日（月）　　北京滞在

王府井（ワンフーチン），友誼商店などでショッピング。

夜は，北京飯店にて日本側の招待によるレセプション。

7月9日（火）

北京首都空港発（14：50）── 大阪国際空港着（19：15）

中国登山協会の多くの方々，北京駐在日本大使館の方々の見送りを受け，日本側登山隊，元老団，祝賀団そろって出発。

いまだ梅雨の明けきらぬ薄暗がりの大阪国際空港に無事帰着。多くの出迎えを受け，解散。

（1986年11月）

崑崙の氷河偵察行

（1985年7～8月）

中尾正義

1　「かよへる夢は崑崙の……」

1985年7月1日，成田空港から，今回の崑崙行の母体である「アジア高山地域の比較氷河研究」の事務局（名古屋大学水圏科学研究所）に電話をかけた。出国する旨の連絡をしたところ，研究代表者である樋口敬二教授が直接いいたいことがあるので自分で電話口に出たいといっているという。「ええなあ，初めて崑崙に行けるなんて……。『紅蒲ゆる』を何べんも歌うてきてくれや！」とのこと。他に特に用はなかった。

「かよへる夢は崑崙の　高嶺の彼方ゴビの原……」

学生時代に何度歌ったことだろうか。その夢がもうすぐ実現するのだ。期待に胸がふるえる。と同時に，夢の実現に青春を賭けてきた多くの先人をさておいて，自分なんかが最初に行ってもよいのだろうか，という申し訳ないような気持ちも強い。身近では，崑崙入山の許可を取るのに努力してきた上田豊氏も，南極越冬中で今回は参加できない。ともかく，多くの先達の執念と夢とが背景にあることを思い，身の引きしまる思いで北京行きの中国民航930便に乗り込んだ。

2　北京，烏魯木斉（ウルムチ），喀什（カシュガル）

北京空港には，蘭州氷河凍土研究所の謝自楚所長が自ら迎えにきてくれていた。宿泊は，中国科学院関係者の場合はほとんど常にそうだとのことだが，北京北西部にある友誼賓館が既に予約してあった。ロシア人が設計建設したという代物で，どっしりとした立派な建物が10棟近く，広い庭をはさんで立ち並んでいる。うち1棟は中国科学院が常時借り上げているとのことで，その中の1室には，科学院のサービス部門の人が常駐している。日本からでも，この部屋に電話すると，中国民航やホテルの手配，タクシーや観光旅行の準備など何でもやってくれるとのこと。ただし，ほとんどの手続きに結構な額の手数料を取られる。

日本を発つ前にアナカンで送った約200kgの荷物は，成田出発時には北京にあるとの情報を得ていた。宛先は，いちおうウルムチの空港留めにしておいたのだが，代理店側でも通関が北京になるかウルムチになるかわからないとのことであった。結局，北京に着いて調べたところ，既にウルムチに送られたことがわかった。これで北京での仕事がひとつ減った。

ともかく中国国内の中国民航がらみのことはわからないことが多い。われわれの座席の予約もそうである。日本の代理店で航空券を購入したときには，成田→北京→ウルムチはＯＫ。しかし，ウルムチ→カシュガルの間はどうやっても座席の確認ができないとのことであった。それどころか，コンピューターのディスプレイには"no flight"と出力されてくるとのこと。このことは，成田空港を出るときに中国民航のオフィスに行って，私自身，中国人スタッフに確認したが，「コンピューターへの入力がないから何ともいえない」の一点張りであった。代理店は，ウルムチ以降については，一応openの切符を作っておくが，中国では新たに切符を購入しないと座席予約をしてくれないかもしれないから，そのときは購入してくれ，帰国後払い戻すから，という。こうして出国してきたのだが，北京で確認してみると，何とＯＫだったはずの北京→ウルムチの間さえ，何の予約もされていない。あわてて予約する。このときは，日本で発行した航空券は有効で，新たに購入する必要はなかった。これも，たまたま応対する中国民航のスタッフの質や気分によって異なるようだ。航空券と座席予約という概念とがきちんと分離されていないのがその原因ではなかろうか。予定より1日遅れて中国入りする旨の連絡があった国立極地研究所の渡辺興亜氏（北大山の会）の北京→ウルムチの座席予約を変更したときには大いに手間どった。なまじ切符にＯＫと書いてあったものだから単に便と座席の変更だけでは済まず，ＯＫの航空券を払い戻し，新たに1日違いの座席予約付き航空券を購入しなければならないという。結局，払い戻し，購入それぞれに相当の手数料を取られる羽目になった。

北京からウルムチに向かう前々日に，順調に登頂を終えたナムナニ隊のうち，ラサ経由の隊が北京到着とのこと。ナムナニ隊の宿舎である西苑飯店を表敬訪問して西山孝氏と再会することができた。カシュガルからの道路状況の話などを聞く。わが調査隊もカシュガルからは新疆・西蔵公路を南下，甜水海まではナムナニ隊と全く同じ道をたどるからである。

北京からウルムチへの飛行機からは，ゴビの砂漠が実によく見えた。北京空港で6時間も出発が延びたイライラも吹きとんでしまう。三日月形をした砂の山が後から後から重なって出てくる。人っ子ひとりいない。機内の騒音や飛行機の爆音が実際には聞こえているはずなのだが，窓の外の景色を見ていると，シーンとして全く音のない世界に自分がいるかのような錯覚にとらわれる。

ウルムチ空港は暑かった。35℃だとのことである。今回の偵察隊の隊長になる蘭州氷河凍土研究所の鄭本興教授，秘書長の張振栓氏らが迎えてくれた。アナカンの荷物の通関もあっさりと終わった。ライツ社の測定用カメラに再出国の条件をつけられただけであった。

翌日から3日間，蘭州氷河凍土研究所が維持している天山站の氷河観測所および標高4,000m付近に懸かる天山の№1氷河に案内してもらう。ここの氷河観測は1959年に開始され，文化大革命による中断はあったものの，20年以上にわたって観測資料が蓄積されている。中国国内で最も詳細に調べられている氷河であろう。ウルムチから天山山脈を越えてタクラマカン砂漠へと抜ける幹線道路が氷河のすぐ横を通っていて，輸送や観測の便はすこぶるよい。

7月11日，遅れて中国入りした渡辺興亜氏とウルムチ空港で落ち合い，鄭，張氏とともにカシュガルへと飛ぶ。ソ連製の双発機は天山山脈の東端を南に越え，あとは天山の南斜面側をオアシス群に沿って飛行する。途中アクス（阿克蘇）で給油。タクラマカン砂漠の核心部ではないが，周辺の乾燥地帯が飛行機からよく見える。目を引いたのは，現在の河川と交差し合流し，また分かれる過去の河道跡の群である。空からの眺めだけではその時間的経過はわからないが，それぞれの時代時代に実に多様な河道の変遷が生じた様子が窺われる。かつて湖底であったために非常に平らなタクラマカン盆地では，植生が貧弱なことも手伝って，ほんのちょっとしたきっかけで，河道がすぐに変化するということが繰り返されてきたのであろう。こういう景色を見ると「さまよえる湖」がさまようということが何の不思議もなく受け入れられる。

アクスでの30分の休みを除いて，3時間15分の飛行を終え，いよいよカシュガルに到着である。陸路カシュガル入りを終えていた中国側隊員8名が出迎えてくれていた。これで，今回の日中共同西崑崙氷河学術調査隊全員が揃ったわけだ。日本人2名，中国人10名の陣容である。中国側の内訳は，大学院生1名を含む研究者が5名，補給長とでもいうのか設営の長が1名，コック1名，それに車両の運転手3名である。車は，中国製のジープ2台，トラック1台が準備されていた。

3　新疆・西蔵公路（カシュガルから甜水海）

この道は，ナムナニ隊もほんの3か月ほど前に通ったばかりである。7月12日，朝からトラックへの荷物の積み込み。ナムナニ隊の井上治郎氏に残置を依頼しておいた氷河に旗竿を立てるためのドリルを受け取りに登山局へ行く。渡辺氏が持ってきたビデオカメラのバッテリーチャージャーの調子が悪く，その修理をしたい旨申し出たら，案内されたのはなんと中国国営放送の放送局であった。一般の電器屋では修理ができないのか，それとも科学院と国営放送という中央政府の機関同士ということで相互補助の便宜があるのだろうか。ともかく放送局でちゃんと修理してくれた。

翌朝カシュガルを出発。ジープ2台，トラック1台の堂々の行軍である。ヤルカンド（莎車）を通ってカルガリーク（叶城）までの250kmが今日の行程だ。ヤルカンドでは昼食を兼ねて休憩し，今後約1か月の調査のための新鮮な野菜や果物，卵などを購入した。有名な哈密瓜（ハミウリ）は時期的にやや早いらしく味はいまひとつだったが，買い食いした甜瓜（いわゆるメロン）の味は格別のものであった。

ヤルカンドを出発してしばらくすると，ヤルカンド・ダリヤを渡る。「西北チベットと東部パミールとにまたがる高原に，氷河や融けかかっている雪原から来る水，泉や降雨の水がすべて集まり，これはその後一つに合して，壮大な開鑿峡谷のなかを流れて，上流の各地でそれぞれゼラフシャン，ラスケム，ヤルカンド・ダリヤとさまざまの名で呼ばれる大河となる。とちゅうでいくつかの支流によって増強されて，この川は東トルキスタン砂漠を1,500kmに渡って完全に貫流し，ついにはカラ・コシュン湖に注ぎ込む」と，ヘディンは書いている（ヘディン中央アジア探検紀行全集，『チベットの冒険』，鈴木武樹訳，白水社）。カラ・コシュン湖は，いわゆる「さまよえる湖」ロプノールが，そのほとりに栄えた楼蘭王国から離れて，その西南方に移動していたころ，つまりヘディンの記述のもとになった1900年前後の第2回探検時における名前である。その後30年あまり経ったときには，それが，かつてのロプノールの位置へと再び戻りはじめており，この湖が1,600年周期の「さまよえる湖」であるというヘディンの報告で，つとに有名になった。ヤルカンド・ダリヤの源は，パミール高原はもちろん，カラコルムのＫ2峰にも及び，崑崙山系の水の一部をも飲み込んでいる。

学生時代にヘディンの探検記を何度も読みかえした者にとって，ヤルカンド・ダリヤはなにか特別の川に見える。渡り終わってから写真を撮りたいと伝えたところ，絶対に橋の写真を撮らないでくれ！と，それも強い口調

でいう。確かに，新疆・西蔵公路の政治的，軍事的役割を考えると，公路沿いで最大規模の川であるヤルカンド・ダリヤを渡る橋は，極端に重要なものであろう。数年前に外国人研究者がこの橋の撮影したことが橋の守備隊に見つかり，本人はもちろん，案内の中国人も処罰されたとのことである。

右手にアルチンターク，正面には崑崙山脈の西端を眺めながら，電話回線用の電柱の立ち並んだ砂漠の中の道をひたすら走って，夕刻にはカルガリークに着いた。

翌7月13日早朝，昨日までと比べるとひどく暗い。嵐でも来ているのかと思いながら外に出てみると，黄色い砂がサラサラと降っている。黄砂だ。10年ほど前に有珠山が爆発したときに札幌に降った火山灰を思い出した。よく見ると，あたり一面黄砂が5～10mmほど積もっている。砂といっても非常に細かく，直径が0.1mmよりもはるかに小さい。厳密には，砂と呼ぶとおかしいのかもしれない。その上を歩くと，靴のまわりにフワッと砂が舞い上がる。ジープもトラックもみなその頭に黄砂を載せている。ちょうど運転手が車から砂を払い落としているところだった。

車に乗って出発してからも視界は数十mしかない。濃い霧の中を走っているかのようだ。ヘッドライトに照らし出されて前方にパッと浮かびあがるラクダの群れがなんとも幻想的である。車はぐんぐん高度を上げてアカズ峠，セラク峠を越え，崑崙山脈の南面側へと入り込んだ。人民解放軍の駐屯する麻扎（マザ，標高3,750m）である。1日でいっきょにここまで登ってきて頭が痛い。夜は兵站の兵士による歓迎会があるとか。めんどうだが出席しないわけにはいかない。焼酎の乾杯攻めがなかったのが救いであった。

今回の偵察行では，中国側の研究者もまだ足を踏み入れたことがないという，西部崑崙の氷河地域の自然を知ることはもちろんであるが，今後共同して研究を進めることになる中国側研究陣の実力もまた見極めなければならない。この日の行程を含めて，チベット高原への高度順化に関しては，中国側はほとんど注意も払っていないし，また知識もあまりないようだった。もっとも，彼らの多くは毎年のように中国各地で高所を経験しており，しかも今回は彼らのほとんどがK2峰周辺での調査を終えた直後であったという事情もあるのかもしれない。高度のせいで調子の悪い者が出ると，ただその場所で泊まりを重ねるだけで，あらかじめ宿泊地より高い高度を積極的に獲得するといった方法は考えたこともない様子である。この点では，同じ中国人でも登山関係の人間と，いわゆる研究者という人たちとは同じように考えない方がよいのかもしれない。

マザで，もう1泊した後に黒卡峠（ヘーチヤー）を越して，康西瓦（カンシーバ）へ。ここにはこの地域で唯一の気象観測所がある。そこの気象データの入手には金がかかる。1文字あたり数元とのこと。えらく高い。もっとも，自分たちで手書きで写すのはかまわないという。身体の調子が悪くここに残ることになった補給長が写してくれることになった。ただし1984年の気温と降水量の月平均値だけである。

カンシーバの気象台では多数の羊を飼っている。調査期間中の蛋白源として1頭購入した。60元である。カンシーバで2泊したのち，最後の峠である奇台峠を越してチベット高原に入った。急に広々と拡がった高原にポツンと立っている甜水海の兵站に泊まる。このあたりは旧湖底で，風化した湖底堆積物の丘を散見することができる。場所によっては塩が地上に結晶しているところもある。

4　崑崙山麓の大草原

甜水海からは新疆・西蔵公路と分かれて，崑崙山脈南斜面の山麓を東進していよいよ崑崙の核心部へ入ることになる。7月19日，朝の気温＋4℃。出発準備は整ったが，車のエンジンが始動しない。エンジンの冷却水を湯と入れ替え，キャブレターをバーナーであぶって，やっと出発することができた。気温が下がったからという説明だったが，下がったといっても朝の最低気温でさえマイナスではない。5,000m近い高度にきて，空気が薄くなってきた影響もあるのだろうか。

それにしても，中国製の車，特にジープはトラブルが多い。これまでも沿道でかなりてこずったが，今後もずっと悩まされることになる。この日は追い風であったことも手伝って，特に午後になって気温が高くなってきてからは（といっても15℃前後であるが），ジープのエンジンのオーバーヒートが頻発する。水温が上がってくると，車を風向きに止めてエンジンを切り，風でエンジンを冷やす。エンジンが冷えたころ再び始動してしばらく走る。野帳の記録を見ると，走行8分，停車8分，走行10分，停車9分……とある。走行と停車の繰り返しで，実働時間の約半分しか走っていないのだ。

甜水海を出て1時間あまりで，阿克賽欽（アクサイチン）湖に着く。塩湖である。その水はなめるとすぐわかるほど塩辛い。採水した水を帰国後分析したところ，塩分濃度，酸素同位体組成ともに海水とほぼ等しいという結果が出た。

これまでのところ，沿道の周りはすべて砂，石，岩ばかりで，いきものの息吹を感じることができない死の世界である。カリガリークとマザとのほぼ中間にある庫地（クダイ）というところで，タクラマカン周辺のオアシスでよく見られる白楊樹（ポプラの一種）と別れてからは，樹木と

いうものを1本も目にすることがなかった。樹木どころか草もほとんど生えていない。マザやカンシーバ周辺の川沿いに点在する紅柳（タマリスク：茎が赤みがかった高さ数十cm程度の草）の茂みになんとか心の安らぎを求めた程度である。甜水海を出てからはその紅柳も姿を消し，草木を全く見なくなった。動くものといえば，上空を流れる雲と，風に吹かれて舞い上がる砂塵だけである。これが崑崙なのだろうか。「紅崩ゆる……」を歌いながら，一度は行きたいと恋い焦がれていた崑崙山脈とは，花咲き鳥が歌う楽園でなければならないはずだ。それが，かくも荒涼とした砂嵐の歌しか聞けないところとは……。次第にファイトが萎えていくのを感じる。

アクサイチン湖からさらに2時間，小さな峠を越した。するとどうだ，目の前に見渡す限りの大草原が拡がっているではないか。左手に立ち並ぶ崑崙の高峰から右手のチベット高原にかけて一面の黄緑色のじゅうたんだ。ヘディンも書いている。「北チベットの高原で誰が真正しんめい，南米の草原にも見まがうものを予想したろう！

そして，地平線のはてまで，一面に藁をしきつめたように黄色い」（ヘディン中央アジア探検紀行全集，『トランス・ヒマラヤ』，青木秀男訳，白水社）。草原のあちこちには頂上に氷河をいただくヌナタクも散見できる。荘厳な景色にうっとりと見入る。

草原に車を乗り入れてどんどん走る。鼻歌もでてくる。さっきまでの滅入った気持ちは吹っとんでしまった。調子が悪いのは車だけだ。草原に生えていたのは，長さ十数cm程度の日本の茅を短くしたような植物である。ヘディンがヤプカクと呼んでいる雑草だろうか。さほど密集しているわけではないが，砂地に一定の間隔をおいて連続的に生えているのだ。遠くからみると一面に草を敷きつめたように見える。久し振りに見る植物にすっかり興奮してしまった。風に吹かれてそよそよとなびく様は稲穂をさえ思い起こさせる。

前方に何か動くものがいるのに気がついた。目を凝らすと，かなり大きな動物のようだ。角が見える。鹿かカモシカの一種だろうか。中国人たちは野生の羊だという。羊にあんな長い角が生えているはずはなかろう。見えだすと次々に見えてくるものだ。あちらに数頭かたまっているかと思えば，こちらにもいる。1頭でポツンとのんびり草を食っているものもいるし，こちらをじっと見ているものもいる。たしかに角のないものもいる。帰国後写真を見てもらったところ，チルーと呼ばれる動物で，角があるのが雄，ないのが雌ではないかとのことだった。

何頭かを目印にしてジープからの視認限界の距離を測る。と同時に，ジープの走行距離に対する視認したチルーの数を数えてみた。その結果，なんと19.2km²あたりに29頭もいることになった。0.7km²あたり1頭という数字だ。この程度の植生では体長2m前後もあるチルーをこんなに多数養うことができるのだろうか。しかも，チルーだけではない。さらに大型の野生のロバもいることに気がついた。クランまたはキランと呼ばれている動物だろう。こちらの方はやや数が少なく，24km²あたり（ロバの方が視認距離が長い）6頭，つまり4km²あたり1頭という結果が得られた。まだいた。兎のような動物だ。それらしい糞に気づいていたのできっといるには違いないと思っていたのだが，体型が小さいために実際に認めたのはしばらく経ってからだった。その後，氷河調査の前後にも何羽もみかけたから，これもまたかなりの数が生息していることだろう。

草原をジープで走りながら，あちらこちらでのんびりと草を食ったり，ブラブラと散歩をしているような動物たちを見ていると，崑崙はやはり地上の楽園だったのだと嬉しくなってくる。少なくとも動物たちにとっては天国のようである。まだ人間に対する恐れを知らないとみえて，数十mの距離まで近づいても逃げようとしない。この大草原は，驚くことに氷河末端のすぐ近くまで続いている。だから，動物たちも氷河のすぐ近くでも遊んでいる。夕陽を受けて紅く輝く氷河を背にして立つロバやチルーのシルエットを見ていると涙が出るほど美しい。

ネパール・ヒマラヤでは，高く登るにつれて喬木が姿を消し，次いで灌木が姿を消し，岩と砂と雪の世界となり，そして氷河の世界となるのがふつうである。そこでは高みに行くにつれて気温が次第に下がり，ついには植物が姿を消してしまうのだ。しかしこの崑崙ではどうだろう。岩と砂の世界から，生命あふれる大草原となり，そしてその草原にとり囲まれて氷河がある。生命の存在が気温ではなく水の存在とのかかわりで定められているからに違いない。氷河がある，つまり水がある崑崙の高みだけが，周囲の乾燥地の中に浮かび上がった一種のオアシスとしてこの大草原が存在しているのであろう。

5　崑崙の氷河

この日は里田河を遡って，崑崙山脈中の最高峰である崑崙峰（写真1，2）に最も近い谷の奥に泊まる。中国では1970年代の半ばころ航空測量を行い，70年代の後半にこの地域の地図を完成した。まだ完成間もない10万分の1の美しい地図である。この中に，崑崙峰は崑崙山脈中唯一の7,000m峰で，7,167mと記してある。崑崙の最高峰は，ひところ，和田（ホータン）に近いところにある莫斯山（ムズターグ）ではないかといわれていたこともあったが，この崑崙峰に落ち着いたようだ。

上記の詳細な中国の地図は，見せてはくれるが絶対に

写真1　崑崙峰を真近に見るキャンプ地。標高 5,100m

写真2　崑崙峰（7,167m）。崑崙山脈の中で唯一の7,000m峰である

やれないとのこと。それどころか，今回の調査中でもその管理が極めて厳しい。われわれが見たいというと地図をもってきてくれるが，必ず2人ペアでやってくる。もちろん，日本人のところへ地図を置き去りにすることはしない。われわれが見終わるとすぐにまた持ち帰ってしまう。写真機でコピーをとられるのを極度に警戒しているようだ。

中国製の地図を見せてもらって驚いたことは，米軍発行のナビゲーションチャート（崑崙山脈周辺は100万分の1しか発行されていない）が，かなり正しいということである。これだけでも収穫だ。大スケールの議論をするには，ナビゲーションチャートで十分だということだ。世界中にこのチャートを公表しているくらいだから，米軍内部には，中国製のものにも劣らないくらい詳細な地図があるに違いない。だから，中国の地図の管理もそんなに厳しくやらなくとも，1部や2部くらいくれたってよいじゃないか，とも思うが仕方がない。中国製の10万分の1の地図には，約2kmごと，格子状に線が引いてあり，経緯度方向それぞれに変な記号が書いてある。なんでも，大砲の着弾地点を推定するためのチャートを地図が兼ねているらしく，このことが地図を極秘扱いにする理由のひとつなのだろう。

崑崙峰のふもとには中4日滞在した。周辺の氷河やモレーンを偵察する。ここでの滞在中，おもしろいものを目撃した。それは川の末端である。ヘディンも書いているように，このあたりでは「高く登れば登るほど川の水量は増す。下流になると，水が，あるいは蒸発し，あるいは地下に浸透して減るのだ」（ヘディン中央アジア探検紀行全集，『トランス・ヒマラヤ』，青木秀男訳，白水社）。このことは，私自身も川の水量観測をしているときに気づいたのだが，そのうち，観測している水量がどんどん減っていき，ついにその末端がでてきたときには驚いた。しかし考えてみれば当たり前のことなのかもしれない。上流から流入してくる水の量が蒸発量と地下

への浸透量とを下まわれば，そこには末端が形成されるはずである。供給水量と消失水量とのバランスで，形成された川の末端は前進したり後退したりしている。氷河末端の前進や後退と同じ現象なのだろうが，時間スケールが短いぶん，見ている目の前で変化するのが実におもしろい。崑崙山脈から出る多くの河川も，こうしてタクラマカン砂漠へと消えていくのであろう。

現在では，崑崙の玉で有名な白玉川（ユルンカシュ）を主水源とするコータン・ダリヤもタクラマカン砂漠の砂の中に吸い込まれている。しかしごく最近まで，コータン・ダリヤはタクラマカン砂漠を南から北へと横断してタリム川へと合流していた。白玉川は崑崙山脈の北斜面を主水源としているから，このことは，崑崙山脈からの水の供給量が最近でも減少してきていることを示唆しているようである。

シルクロードの南路が，崑崙山脈の北縁つまりタクラマカン砂漠の南縁沿いに走っている。沿道には多くのオアシスが点在しているが，おもしろいことにそのほとんどは旧の集落よりも100km近くも南面つまり山側に位置している。言い換えると，従来のシルクロードは現在の道路よりもはるかに砂漠の中央寄りを走っていたことになる。このことは，これらのオアシスを潤していた崑崙山脈からの河川の水量が極端に減少し，集落がより上流寄りに移動せざるを得なかった歴史を物語っているのではなかろうか。

このあたりの渇水期の水は，そのほとんどが崑崙山脈中の氷河の融解水によってまかなわれていることから考えて，これらの氷河に過去大きな変動が生じていたことが十分予想される。この意味でも，崑崙の氷河の現状や変動史の解明には，大いに興味が持たれるところである。

変動史の解明には，最近脚光を浴びている氷コアの解析が最も有効な手段となろう。氷コアとは，氷河を掘削して採取する長い柱状試料のことで，それぞれの時代に形成された氷が時間の流れに従って得られるものである。この試料を解析することによって，各時代におけるその場所の過去の気候状態や氷河高度などを推定しようというわけである。

7月24日，崑崙峰のふもとのキャンプを引き払い，本観測時に予定している氷コア採取作業に適した氷河を探しにいくことにした。勝利峠を越えて，郭扎錯（ゴーツァコ）湖側へと入る。この湖はヘディンにレイク・ライトンと呼ばれた湖である。このあたりも一面の草原である。ヘディンがこの地を訪れた80数年前には，野生のロバやチルーのほかに狼も多数生息していたらしいが，われわれは狼だけは全く見かけなかった。既に絶滅してしまったのだろうか。湖の北岸から南側を望むと，その頂上に雪をいただいた峰々が真っ青な湖の上に立ち並び，一幅の絵を見る思いだ（写真3）。

われわれはゴーツァコ湖を後にして進路を北に向け，崑崙主稜側へと登る。高度5,500mを超えてジープもトラックも気息奄々である。氷河末端に近づくにつれて石コロの数が増えてくる。トラックのタイヤよりも大きい石がゴロゴロでてきて，車は右に左に石を避けながらルートを作っていく。草原では時速50キロ近くで走ってきたのだが，ここでは5キロ以下におちる。めざす平頂氷河（山塊全体が氷河で覆われ小型のアイスキャップつまり氷帽と呼ばれる形の氷河を中国ではこう呼ぶ）の末端にある氷河湖の横にテントを張った（写真4）。この氷帽は崇測平頂氷河と呼ばれている。

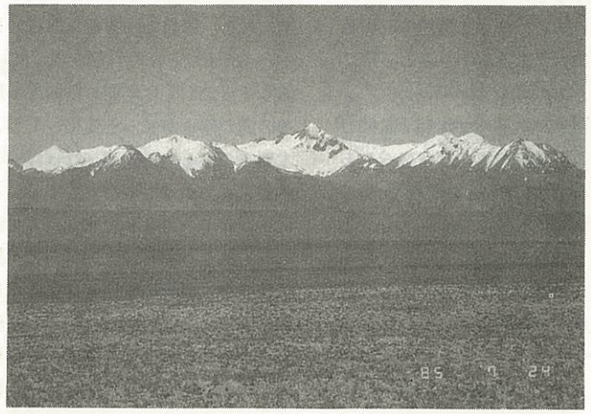


写真3　ゴーツァコ湖北岸から南を望む。かつてヘディンがこの湖で帆走し，嵐に遭って難破しかけた

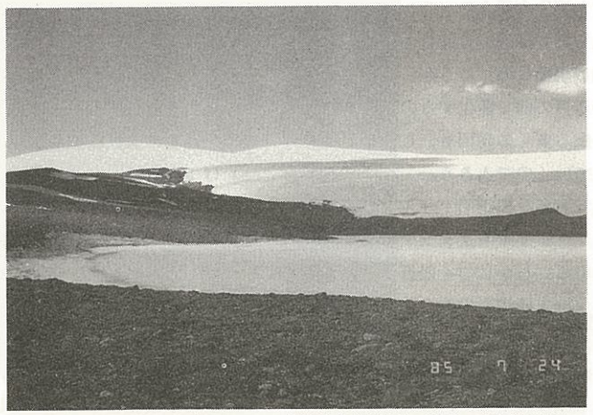


写真 4　本調査で氷河掘削を予定している崇測平頂氷河。頂上の標高 6,530m。手前にある氷河湖のほとりにキャンプした。標高 5,790m

翌日は休養日だったので氷河湖を一周する。ここまで登るとさすがに草は生えていない。しかし湖には名も知らない小鳥がたくさん遊んでいる。スズメとツバメのあいの子のような鳥である。蝶も飛んでいる。あいかわらず生命が満ち満ちていて心楽しい。湖岸にはロウソク氷も多数できていて，目を楽しませてくれる。

次の日の朝は一面の雪景色となった。積雪 5 ～ 8 cm，降水量にして約 5mm である。崑崙峰のふもとのキャンプ地でも 1 度降雪があったので，1 週間の間に 2 回，合計 10mm 以上の降水があったことになる。カンシーバの気象観測所の年間降水量は，1984年の場合で 23.5mm しかない。7 月と 8 月の合計はわずか 3.3mm である。これらの値と比較すると，わずか 1 週間で10mm というのがいかに多いことか。山によく降るということなのだろう。だからこそ，氷河も形成されるし，そして周囲の乾燥地帯への水源としての役割を果たすことができることになる。山麓の大草原も納得できる。

翌 7 月27日。快々晴。平頂氷河に登って氷河を試掘してみることにする。モレーンの丘をできるだけ登ったあと氷河上へ下り立つ。裸氷の表面に数 cm の雪をかぶっているので，念のためザイルを出してコンティニュアスで進む。氷河上は傾斜も緩く歩きやすい。この程度の傾斜ならスノーモービルでも十分登高できそうである。そうすれば本調査のときには荷上げがずいぶんと楽になるだろう。

傾斜も緩くコワイところもないが 6,000m を超えるとさすがにしんどい。氷帽の頂上は無理としてもその手前にある肩まで行くつもりで出発したのだが，行けども行けども目の前に見えている肩になかなかたどり着かない。夕方 4 時ごろになって，もうここらでよかろうと妥協して登高を中止。途中ではあるが，そこで氷河を掘ることにする。振り返るとゴーツァコ湖とその南方の峰々が黄砂の霞の中に幻想的に浮かび上がっていた。

ボーリング器材を運んでくれている人民解放軍の兵士，王君と宋君とがやや遅れている。この両君は甜水海の兵営からわれわれの手伝いのために来てくれた人たちだ。標高 4,450m の兵営に数年滞在しているだけあってこの 2 人は強い。ともに20歳代前半という若さもあるのだろうが，高所で最も頼りになったのはこの 2 人であった。

2 人が着くまでの間にピッケルで氷河の表面にピットを掘る。50～60cm 掘ったところで黄砂と思われる明瞭な汚れ層がでてきた。もし汚れ層が年に 1 回しか形成されないとすれば，氷コアの年代や堆積量の推定が非常に楽になる。両君の到着後採取した 2 m の氷コアの中にも 40～60cm ごとに汚れ層が入っている。これは可能性がありそうだ。もし年間に数回汚れ層が形成されるのなら，層の間の厚さがもっと変化してもよさそうに思うからだ。本調査のときに再度調べればはっきりするだろう。ともかく，この地点に旗を立てておくことにする。ここ以外にもルート上で 4 本の旗を立てて雪尺にする。次の日にこれらの旗を測量。本調査時に再測すれば，氷河上の堆積速度や氷河の流動速度などを求めることができる。

本調査では，われわれが今回偵察した崑崙の南斜面側が主たる調査対象となるが，北斜面を調査する別働隊も出す予定である。したがって，今回の偵察行の最後に，北斜面と南斜面とを結ぶ峠，古里雅(クリヤ)山口の偵察を行うべきであると中国側に申し入れた。これが大議論になった。中国側は明日にも下山するという。現在のキャンプ地で

さえ，中国側の初めの意図に反してかなり奥に入り込み過ぎているらしい。峠の偵察の必要性を力説して基本的には中国側も了解したのだが，彼らの出してきた切り札はどうすることもできなかった。もうガソリンがないという。今回のオペレーションは彼らのやり方を見るということもあって完全に彼らにまかせきりだったのが悔やまれる。ガソリン計算をいったいどうやったんだ，と腹も立つが，今さらいってもないものはどうしようもない。妥協案として，ジープ 1 台で行けるところまで行く，ほかのメンバーはジープ 1 台とトラック 1 台でゴーツァコ湖岸までキャンプを下げるということで合意した。

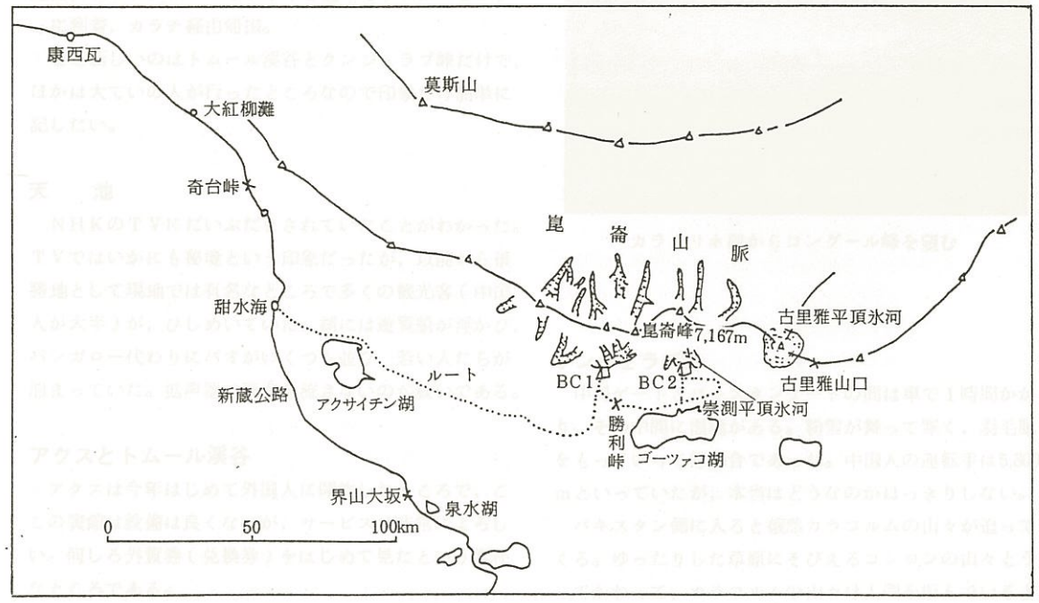
7 月30日，キャンプ地を発って東へと向かう。崇測氷河（崇測平頂氷河の東側に長く延び出している氷河）の末端付近で側堆石を登って氷舌を見おろす。ザクザクに割れた氷河である。というか，氷舌がアイスピナクルの連峰で構成されているといった方がよいかもしれない。氷舌の側方，下方に融け残ったアイスピナクルがポツン，ポツンととり残されている。氷河が後退した名残であろう。側堆石の中に直径 20m ほどの小さな池があった。その水の酸素の同位体組成は海水よりも O^{18} の割合が多い。池が形成されたのち蒸発によって池の水量が減った結果だろう。

古里雅山口までは行けなかった。その横にある古里雅平頂氷河を望見する。この氷河はわれわれが調べた崇測平頂氷河の 7 倍以上もの規模をもつ氷河で，中国国内では最大の氷帽である。その横にならんでいる氷河の列はさながら氷河の展覧会だ。氷河群を堪能してから，進路を南西へ，皆の待つゴーツァコ湖へと引き返した。

6　崑崙をあとにして

こうして，今回の偵察行は終わった。主山塊の東端を越える古里雅山口の偵察ができなかったのは何としても残念である。また，そのすぐ西に位置する中国最大の古里雅平頂氷河も遠望するだけで終わってしまった。しかし，次期の本調査のための予察としては，十分の成果があったと考えている。

中国側の隊員たちも，終わってみれば気のよい仲間たちであった。種々のいきちがいはあったものの，考えてみればそのほとんどは意思がうまく伝わらなかったことにその原因があったようだ。ともかく彼らとの会話には苦労した。われわれ日本人は 2 名とも中国語がわからず，彼らは日本語を解せず，わずかにカタコトの英語がわかるという程度だったからだ。われわれの中国語の語彙が増えるにつれて，だんだんコミュニケーションができて



いるということを実感として感じられるようになっていった。

今回の中国側隊員の中では，いわゆる指揮権がはっきりしていないようにも感じられた。いわゆる中国側の隊長（とわれわれは思った）の了解をとっただけでは，ものごとが進まないことが多々あったからだ。そのことに関連する設営関係の隊員，特に車の運転手にあらかじめしっかり話をしておくということが，ことをスムーズに運ぶ要点のようである。短期決戦スタイルの登山隊にみられるような人間関係ではなく，より長期的な，たとえば南極越冬隊でしばしば感じられるような，じっくりとした内部の根まわしを要する構造なのだろう。そういう意味でも，すべての隊員たちとある程度つき合えるだけの中国語の知識があれば，もっと楽しめたのではないかという気がする。

次期の本調査では，今回偵察した地域が主な対象となる。しかし前述したように，崑崙山脈の北斜面にも別働隊を出すことを予定している。北面側は南面側と違って地形も急峻で，車が南面側ほど威力を発揮しないであろう。輸送の主力には，昔ながらにラクダや馬，ロバなどをあてるという旅行形態をとらざるを得ないだろう。そこには，このあたりでは珍しい火山もあれば，ユルン氷河を代表とする長大な氷河も多数懸かっている。「通へる夢は崑崙の」その崑崙は，今，われわれの目の前にその扉を開いたばかりなのだ。

（※編注　崑崙峰は1986年8月16日，東京農業大学隊により初登頂された。また『コンサイス外国山名辞典』（三省堂）によると，ムズターグは6,638mとある。）

クンジェラブ峠を越えて

（1986年8月）

藤　平　正　夫

今夏，唐突だったが，「エベレスト旅行社」のクンジェラブ峠越えのツアーに参加することになった。コンダクターの「かもしか同人」の大蔵喜福君を含めて一行7名であった。

8月8日から8月22日までの間に，いくたびかトラブルが生じたが，全行程をほぼ予定通りに終えることができた。

経路は大略次の通りである。

香港経由広州。広州からウルムチ。ウルムチ滞在中，ボゴダ山中の天池，トルファン往復。ウルムチから空路アクスに行き，トムール渓谷に100キロほどジープで入る。

アクスから車でカシュガル，タシュクルガン経由でクンジェラブ峠を越え，フンザに入る。フンザからチラス経由，カラコルム・ハイウェイを通ってラワル・ピンディに到着，カラチ経由帰国。

こと新しいのはトムール渓谷とクンジェラブ峠だけで，ほかは大ていの人が行ったところなので印象だけ簡単に記したい。

天　池

ＮＨＫのＴＶにだいぶだまされていたことがわかった。ＴＶではいかにも秘境という印象だったが，以前から景勝地として現地では有名なところで多くの観光客（中国人が大半）が，ひしめいていた。湖には遊覧船が浮かび，バンガロー代わりにパオがいくつも並び，若い人たちが泊まっていた。拡声器で音楽を流さないのが救いである。

アクスとトムール渓谷

アクスは今年はじめて外国人に開放したところで，ここの賓館は設備は良くないが，サービスは非常によろしい。何しろ外貿券（兌換券）をはじめて見たという素朴なところである。

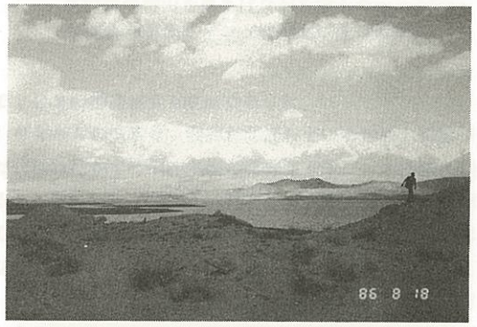
ここから見る天山連嶺は絶景である。いかにも天山の名にふさわしく蒼天の果てをかぎるハンテングリ，トムール（ソ連名ピーク・ポベーダ）は心を激しくゆさぶるものがある。

特別許可を得てトムール渓谷へ100キロばかり入った。ちょうど田部井淳子さんの女子登山隊がトムール攻撃中であった（惜しくも失敗したと後日聞いた）のでＢＣまで西瓜を届ける手配をした。

カラクリホ湖とコンロンの山々

コングール，コングール・チュービエ，ムスタグ・アタはさすがに素晴らしい。簡単に接近できるのが魅力。

タシュクルガンの飯はまずいが，もうパキスタンの人が入りこんでいる。



カラクリホ湖からコングール峰を望む

クンジェラブ峠

中国ゲートとパキスタンゲートの間は車で1時間かかり，その中間に国境がある。粉雪が舞って寒く，羽毛服をもっていって好都合であった。中国人の運転手は5,300mといっていたが，本当はどうなのかはっきりしない。

パキスタン側に入ると俄然カラコルムの山々が迫ってくる。ゆったりした草原にそびえるコンロンの山々とうってかわって，カラコルムの山々は人間を拒んでいるように荒々しく険しい。

パキスタンの税関はすこぶる楽でアルコール飲料の有無を聞くぐらいである。

クンジェラブ峠

フ ン ザ

今や大観光地化し，民宿・ホテル建築ブームである。フンザ銀座には飲食店やみやげもの屋が軒をつらねていて，日本語の看板まであったのにはビックリした。

投宿した「フンザ・パークホテル」は5，6室の民宿でフランスのラジオ局の人がフンザ音楽の録音に滞在していたり，米人の若夫婦が泊まっていて賑やかであった。

主人がミールのコックをしていたとかで，食事はすこぶる美味で推賞に値する。もっとも電灯がつかぬのでランプの下で食べたせいかもしれない。

ラワル・ピンディ

フンザからラワル・ピンディまでインダス河沿いのカラコルム・ハイウェイを690キロ，17時間で走破した。インダスの大峡谷は力感溢れ圧倒的な迫力であった。ラワル・ピンディのフラッシマンズ・ホテルに着いたのは翌朝の午前1時半であった。

このホテルはチョゴリザのとき，桑さんと泰安さんの泊まったところだが，人間同様年月もふり，だいぶガタピシしていた。

カラチからタイ航空で帰ったが，ハイ・ジャックと手投げ弾爆発を間一髪さけたことになる。

今年も残り少ないが何となくツイている年のような気がする。

（1986年11月）

唐古拉山脈（タングラ）・各拉丹冬（グラタンドン）雪山初登頂

（1985年7～9月）

小 林 正 寛

格爾木から青蔵公路をとばし，路をそれてからはぬかるみとの格闘を強いられて，初めて各拉丹冬雪山をまのあたりにできたのは1985年8月4日のことであった。

正直に告白してしまうと，このときには大した感慨はなかった。写真集『長江』でなめるように見ていた姿は，実物になっても情報量を上回ることがなかったためである。せいぜい「はるばるきたぜ」といったところか。双眼鏡をのぞきこむ隊員もいたが、「うーむ」というだけだった。うーむ，という音声を，「考えているフリをしているが，実は考えていないときの音」としてもっぱら用いている私は，「同意を得た」と思ったが，実は感動していたそうである。もともと私は鈍いので仕方なかろう。

とにかくこの時点では，われわれの手に負える山かどうかは各人の気分でしかはかれなかった。勝ち気な者は，「登れるサ，登れなくてどうするんだ」とかいいたそうであったし，そうでない者は「大丈夫かなあ」といいたげだっただけである。さすがに「登れっこない」と思うような者はいなかったようだ。

私は，というと「ひとつ山越しゃホンダラッタ……」というメロディーが頭をよぎり，少し情けない気がした。

8月6日，揚子江の源流のひとつ，尕爾曲（ガルチュー）河畔の標高5,280m地点にBCを設営した。まず，川をはさんで各拉丹冬雪山の東側に位置する山に試登し，山全体を偵察。表面がザラメで下が氷，といういやらしい雪面を約6,000mあたりの地点まで登った。その他，川沿いに氷河をつめるなどの偵察を行う。氷河の舌端まで自動車が入れることがわかり，そのサイドモレーンをつめたところにC1を設営すること，さらにそこから氷河を横断してC2を設営して写真の右側の稜線にとりつくという方針が決定した。

具体的な登山活動にはいったのは8月11日からである。

それまでに合間をみて氷河舌端までトラックで運んでおいた荷物をC1まで歩荷するのに大勢をまわす一方で，8月13日にはC2設営のため3人がC1を発った。同じ日に，BCからC2に登った者も1人いて，この4人が後に1次アタック隊となる。なお，C1の標高は5,680mで，C2の標高は6,100mであったC2からの偵察で，雪庇が発達しているため，稜線づたいには行かずに山の南側の雪壁をトラバース気味に登ることを決める。途中2か所ほどコブを通過しなくてはならず，コブの側面に見えた岩の通過が特にポイントになると思われた。

各拉丹冬雪山を見あげながら第1キャンプより第2キャンプに荷上げする隊員

上部がガスっていたために14日は沈殿し，翌8月15日から1次アタックを開始した。私もこのころには気分が無意味に高揚していた。多少高度ボケの影響もあったかもしれない。

8月15日，午後10時にC2を出発し，コブの基部からフィックスを開始。つごう280mのフィックスを完了したのが，午後6時過ぎだった。雪は偵察行のときと違って，下の氷はないものの，それまでに降った雨，雪，アラレ，ヒョウといったものが積もってザラメとなっていた。ズルズルと滑りやすいザラメの雪壁登りを強いられたわけだが，先ほどの無意味な気分の高揚にずいぶん助けられたように思う。揚げ句，ポイントになっていた岩を越えることはできたものの，フィックス用のロープがなくなってしまった。おまけにこのころからガスが出，雷をともなったアラレも降り出す。どちらに進むかもよくわからぬままにしばらく待機していたが，ビバークを決意。標高6,510m地点に雪洞を掘り，翌日の晴天を祈

りつつ，午前10時過ぎに就寝した。

しかし，翌8月16日も雪とガスに見舞われ，雪洞から少し登ってみたものの，ほぼホワイトアウト。白いものしか見えない風景に気持ちをいたぶられながら雪洞で待機していたが，正午ごろにC1から，「アタックを断念せよ」との通信がはいる。ひと晩で埋まってしまったフィックスをたどりながら下っていると，C2から登ってきた2名のサポート隊員と出会った。

サポート隊の話では，アタック隊員はみな憔悴しきっており，相当にボケていたそうだ。二日酔いのヤクザに意見したときのような応対をされた，と後日語っている。

C2へ戻ったのは午後5時半のことである。

8月17，18日の両日はC2にて休息。その間にBCやC1と交信して方針をかためた。結局2次アタックは，1次アタック隊の4名に加えて，サポートに加わった2名の計6名で行われることになった。

8月19日の晴天のもと，午前7時過ぎにアタック隊はC2を出発した。1次アタックの際に張ったフィックスも，何ピッチはしっかりと埋まっていたために新たに張り直したりしながら高度をあげる。午後1時過ぎには先日のビバーク地点を通過して，コブの上に出た。そこからは傾斜も緩くなり，稜も広い。1次アタックのときにどちらへ進むか全く見当がつかなかったのは無理もなかったといえよう。しかし今回は頂上もきれいに見え，そこまで特に問題になりそうなところもなさそうだ。歩けば着く，と勝手に決めこみたい気になった。板チョコやアメをむさぼる顔もおのずとほころぶ，というものだ。しかし高度障害でいよいよ……と思われるのもしゃくなので，顔だけは真剣をよそおっていた。

実際，その後は雪庇に注意しながら歩く，という行動を続けた末，午後3時6分に登頂。6,621mの高さから，運動会の前日にゴールの瞬間のポーズを考える小学生よろしく考えた文句を，電波にのせてBC，C1，C2へ送ったのであった。

各拉丹冬雪山の初登頂で，目的のひとつを無事果たしたわれわれは，それから各拉丹冬雪山の西面にまわりこみ，揚子江源流の氷河（その形からわれわれはカニバサミ氷河と称している），および，冬も凍らないため冬季の揚子江の水源とされる奔錯（ペンツオ）を訪れた。

そして，8月4日からお付き合いしていた「路のない」青蔵高原に別れを告げ，9月8日には青蔵公路についたのであった。

その後はラサ，成都，北京にそれぞれ何日か滞在して，9月22日に帰国した。

こうして1年以上も前の記憶をほじくり出してみると，ここに書けないようなめちゃくちゃをずいぶんとしていたことがわかって，気恥ずかしいことしきりである。そもそも隊自体がかなりめちゃくちゃだった。この隊は主に九州のメンバーで構成される青蔵高原登山研究会と，京都大学探検部の合同によるものである。合同した理由のひとつに，登山経験のある若手が足りない，というものがあった。こういった登山の戦力としての情けなさはもちろん，高所順応途中での登攀リーダーの負傷（幸い大事にはいたらず，後に頂上を踏んだ），九州と京都のザイル・システムの違いなど，隊の統一というものを阻害する要因にはやたらと富んでいた。また，6,000m以上の高度体験者も少なく，前頭葉の欠如したような行動をとるものも少なくなかった。

しかし，身体だけはともかく元気だった。隊員には1週間で3度も夢精したものもいたくらいである。また，水晶を求めて机ほどの大きさの石を掘り出したものもいた。得られた水晶は小指の先ほどもないものだったが，喜々として次の石を掘り始める姿は不気味だった。

こういった，登山に直接関係ないところでのエピソードが多いのは，他の遠征隊と同じだろう。それらをいちいち書いていく紙幅はない。が，この遠征が各人の学問的趣味と同時に，スケベ心をも満たしてくれたのは，確かなようだ。大の大人が20名寄り集まって，標高4,000mは下らないというとんでもない場所で，遊びまくって帰ってきた。今回の遠征はそう位置づけることができるだろう。

（1986.11.30）

≪唐古拉山脈学術登山隊≫
京大探検部からの参加隊員
松原正毅（43，副隊長），川下肇（32，登攀リーダー），坂本勉（28），田淵卓弥（27），小林正寛（23），広瀬顕（22）

報告書『遥かなる揚子江源流』（日本放送出版協会刊）は5月に出版された。

クーラ・カンリ初登頂

（1986年3～5月）

平井一正

1986年春，神戸大学西蔵学術登山隊はクーラ・カンリ（7,554m）の初登頂と，ラサ・成都間の初学術調査に成功した。わたしは総隊長としてこの隊を率いた。以下にその概要を記す。（文中敬称略）

1　許可をとるまで

1958年，中尾佐助は単身ブータンに入り，ムナカ・チュウ峠から世界ではじめてクーラ・カンリの写真をとった。彼のブータン探検の目的のひとつは，この神秘の山に近づき，山の登路をさぐることでもあった。それほどこの山はブータンヒマラヤの最高峰として，人びとの関心を集めていた。

中尾のあと，1963年にスイスの地質学者A．ガンサーが，同じくブータン側から，彼女の美しい写真をとり，世界に紹介した。天を制するかのようにそびえ立つこの巨大な独立峰が人の目にふれたのは，わずかこの2回だけである。

幸か不幸かこの山はブータン国境から北へはなれ，チベットに位置していた。長い間，何人もそのふもとまですら近づけず，幻の山として孤高を保っていた。

1980年，わたしははじめて訪中し，中国登山協会の史占春ら幹部の人と知己になった。わたしはナムチャバルワ（7,762m）を第1希望に，クーラ・カンリを第2希望として交渉を続けていた。その交渉の過程でカンペンチン（7,281m）がころがりこんできたが，いろいろないきさつでAACKがこの山に行き，そして登った。はりきっていた神戸大の若者も，らちのあかない交渉にだんだん嫌気がさしてきた。ナムチャバルワは中国が独自で登る，クーラ・カンリは問題外，交渉の過程で新しい候補としたギャラペリ（7,150m）は日本ヒマラヤ協会と大分山岳連盟との合同なら許可するといってくれたが，それは，こちらがのめない。わたしは泥沼の中でもがいている自分を想像し，焦った。

1984年9月，ともかく何か具体的な返事をひき出そうという期待をもって，第4回目の訪中。ギャラペリ以外にどこに登りたいか，と史占春。第1希望はクーラ・カンリ，第2は念青唐古拉山（ニエンチエンタングラ）（7,162m），とわたし。クーラ・カンリはだめ，しかし念青唐古拉山なら許可をおろそう。わたしは了承した。ともかく処女峰だ。しかし，その夜の宴会で，となりに座った史占春はわたしに耳うちした。昼間にクーラ・カンリはだめだといったが，もう一度関係方面に当たってみよう。申請はクーラ・カンリを第1位として出しなさい。マオタイの杯を重ねながらひょっとしたらという一縷の希望をつないだ。

12月25日，真夜中，京都日中友好協会の吉田與和の電話でたたき起こされる。

「クーラ・カンリの許可がおりたぞ。すばらしいクリスマスプレゼントだ」

世界中の関係者が熱望していたクーラ・カンリの許可がおりた。夢かと思っていたクーラ・カンリが浮上してきた。いったいこの2か月，何が起こったのか。最後まであきらめなかった粘りと誠意が，神に通じたとしか思えないぐらいの幸運であった。世界中から殺到していた申請を史占春はどうさばいたのか，老朋友の友誼を重んじてくれた彼に感謝の言葉を知らない。

2　準備と組織づくり

年があけて1985年2月，わたしは議定書に調印するため北京へ行った。そのとき，わたしは前年9月訪中のときに打診したラサ→成都（または昆明）の横断山脈ごえの学術調査の許可の可能性についてたしかめた。あらゆる答えが否定的であった。とりつくしまがないといった感じであった。

横断山脈を越えてラサから成都に至る地域は外国人の目にふれたことのない秘境である。学術研究の宝庫といわれながら，まだ外国人による学術調査はいっさいなされていない。世界に残された垂涎の地である。わたしはクーラ・カンリの許可をてこにこの難関を突破しようと決心した。

横断山脈ごえの許可はどうなるかわからないが，クーラ・カンリ周辺の学術調査に関しては問題なかった。

わたしは10年前，カラコルムの処女峰シェルピ・カンリ（7,380m）に神戸大学学術登山隊を率いて，その登頂に成功した。そのとき，学術調査は専門家でなければ，

とつくづく思った。まして今回は学術的に貴重な地域だ。わたしは隊の構成に関していろいろと構想をねった。

神戸大学には，神戸商大の伝統を引きついでいる山岳部およびそのＯＢ組織の山岳会がある。そしてこのクーラ・カンリに情熱をもやし続けてきた若いＯＢ，山岳部の現役がおり，登山隊を組織することは容易であった。しかしＡＡＣＫとちがって，山岳部ＯＢで学者は皆無に近く，学術隊をつくる核になる組織はない。

わたしは学内で野外調査活動を行っている教官を口づてにきき，一本釣りの形で交渉をはじめた。学内もさがせばいろいろな人がいるということがわかった。組織づくりは着々と進んでいった。そして夏までには自然科学，人文・社会科学を含めた広い分野からなる学術隊がほぼ組織できた。

まだ許可はこないが，横断山脈ごえが可能なときを想定して，総予算は１億円近くになった。そんなになるはずはない，とわたしは何度も会計に計算のやりなおしを命じたが，答えは同じであった。１億円，わたしにとって想像を絶した額である。人数を切るか，規模を縮小するか，わたしは悩んだ。しかし，ともかくやってみよう。何とかなるだろう。わたしは昔から常識がないといわれている。もしわたしが常識人であったらこんな決心はできなかったであろう。

３月末，３人の偵察隊を派遣した。金は一銭もない。銀行から無担保で600万円借りた。わたしはこのとき生まれてはじめて手形ということを知った。

５月はじめ，偵察隊が帰ってきた。期待に反してクーラ・カンリの北面もまたそぎおちたような絶壁であり，登路は西尾根しかなかった。この尾根も決して容易でなく，上部7,000mぐらいに黒々とした岩がたちはだかっている。この岩の突破が登頂のカギである。

７月募金を開始する。新野幸次郎学長，宇野宗佑後援会長の強力な後ろ楯に力を得て，わたしは東奔西走にあけくれた。募金はひとつのドラマであった。陰ながらサポートしてくれた多くの友人，知人に感謝したい。わたしはこの長かった暑い夏を生涯忘れないだろう。

８月にはナムナニ元老団の一行を神戸にむかえた。30人近い一行の世話は当惑したが，しかし苦労はするものである。雪康（シエカン），洛桑達瓦（ローサンダワ），劉東生などと話ができ，チベット自治区内の川蔵公路通行許可を約束してもらった。

11月再度訪中。鄭錫瀾と再度の詰め。はじめむつかしそうにいっていた成都・ラサ間は，われわれはすでにチベット領内の通行許可はもらっているといったとたん，態度が一変。ここに待望の横断山脈を横断する学術調査の許可は見通しがついた。（正式には12月に決定した）

11月には朝日新聞社の後援が，１月にはテレビ朝日の取材がきまった。金も集まった。やり残したことは何ひとつない。長かった準備は終わった。

1986年３月９日，盛大な見送りをうけてわたしは日本をあとにした。いつもそうだが，出発のときはいささかの感動を覚える。栄光の帰国を心に念じた。

3　いよいよＢＣ

北京で中国登山協会の歓待を受けたあと，３月12日，成都経由空路ラサに着いた。何年も夢にみたチベットの大地をふむ。

ここで隊の構成を説明しよう。

隊は登山隊と学術隊に大別される。登山隊は岡市登山隊長，緒方登攀隊長など12人，学術隊は内藤学術隊長など８人，報道隊４人（以上日本側），中国側は，中国登山協会于良璞ら登山関係者７人，中国科学院鄭錫瀾ら４人，その他運転手，通訳など合わせて17人，そして総隊長がわたし。日中合計して42人という大部隊である。学術隊は，昆虫，植物生態学，地球科学，地形，文化人類学，社会学，高所生理学などの専門の助教授，助手で，全員登山ははじめてであり，今回はじめて知り合ったものがほとんどである。（文末に隊員リストあり）

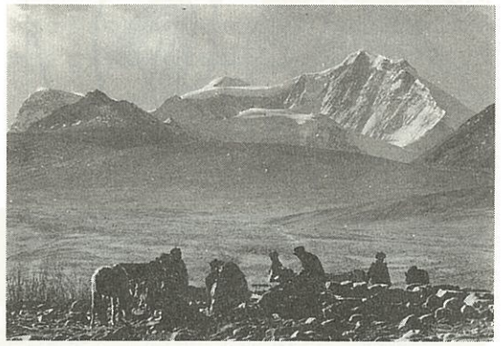
海路上海経由で先発していた登山隊，青海を越えて北京からトラック，ジープなどを運転してきた運転手など含めて，全員がはじめて顔を合わす。広いラサ飯店の食堂もせまく感じるほどの，それはもうたいへんな数であった。よくても悪くても，結果に対してはすべてわたしの責任である。計画の成功と日中友好を祈ってビールで乾杯しながら，わたしはあらためて覚悟し，全員の無事を神に祈った。

ラサの２日目，わたしは１日中ひどい吐き気で悩まされ，二日酔いと同じく，何もする元気もなく，１日を過ごした。しかし心配していた心不全になることもなく(わたしは８年前に狭心症の前科がある)，全行程を通じて高山病がここだけですんだことは幸運であった。この日，トラック１台，ジープ１台，マイクロバス１台で先発隊がＢＣにむけて出発する。

３月15日，トラック２台，ジープ１台，マイクロバス１台の本隊がラサを出発する。曲水大橋を渡っていくらもいかないところで，１台のトラックが路肩をはずして転落寸前の形で止まっていた。これを引きあげるのに時間がとられ，浪卡子（ランカーズ）についたのは午後４時（時間はいずれも北京時間）。洛扎（ロザ）まで行きたかったが，トラックの運転に少しひっかかるものがあり，予定を変更して，ここの解放軍の宿舎に泊まる。高度4,400m。学術隊の先生方の顔には，はじめての高度に対する緊張感が漂っている。

クーラ・カンリはモンダ峠（蒙達拉，5,266ｍ）で完全にわれわれを圧倒した。衛星峰チュービエソン（7,221m）を従え，「天帝の峰」にふさわしい堂々たる姿でそこにあった。すばらしい山であった。

洛扎で体をならし，ＢＣに入ったのは３月17日であった。高度4,400m。広大な扇状地の末端にあり，大小テントとりまぜて31張りのテント村が出現した。気温は低く，風が強い。早く来すぎたかの感がなきにしもあらずである。



ＢＣからみたクーラ・カンリ（7,554m），
むかって右のスカイラインが登路

4　風との闘い

前進ベースキャンプ（ＡＢＣ）までは，６日間，のべ63頭の馬とヤクを使い，荷上げした。ＡＢＣは5,300m。クーラガン氷河の末端の氷河湖の近くにたてられた。ここから仰ぎ見るクーラ・カンリは，首が痛くなるほどの高みにそびえ立っている。

約1kmの凍結した氷河湖を渡り，セラック帯をぬけ，長大な氷河をひたすら登りつめたコルにＣ１（5,700ｍ）を建設する。ＡＢＣからＣ１への輸送は，中国協力隊員５人の力に負うところが大きかった。いずれも武漢地質学院の研究生で，このうちの２人，李致新と王勇峰はナムナニ隊員でもあった。協力員の派遣はだめだといわれていたのを無理やり史占春にお願いし，やっと実現したものである。単調な，つらい荷上げに彼らはよく耐えた。とくに李と王はＣ２までも登った。

ＢＣの一日は，朝，紺青の空に雪煙りをあげているクーラ・カンリを仰ぎ見ることからはじまる。

Ｃ１からの無線で，上部は風が強くて動けない，テントの中で待機している，と知らせてくる。微妙なバランスを要求されるＣ１からＣ２への氷壁は強風は最大の敵だ。風がやっと弱くなる正午近くになってやっとルート工作隊が出発する。そのころＢＣは砂嵐に包まれ，テントの中は砂だらけになり，息もできない。

このような日が毎日続いた。当然のことながら，午後に出発するルート工作隊や荷上げ隊の帰着はおそくなり，行程は遅々としてのびない。内心焦りを感じる。

北京気象庁発表の高層気象図のファックスを毎日受電しているが，大きな気圧の谷がつねにわれわれの頭上にあり，なかなか好天のきざしがみえない。たまりかねて，ＢＣ近くのカオ村の長老をたずね，天気に関する村の伝承をきく。在家ラマのチャーシーは答える。

「ブータン側から頭の赤い小さい鳥（チャマという）の群れが村に来たら，風は弱まり天気はよくなる。そのときを狙って種まきをする」

渡り鳥がヒマラヤ山脈をこえるときは，高層気象が安定しているときというのは，登山家の中ではよく知られているが，この伝承はこれと相通ずるものがある。早速上部テントに，チャマの動向に注意せよと伝える。

気温は低く，天気の見通しは立たないまま村では種まきがはじまった。チャマは来たという。しかし，上部では風は依然として強く，やっとつくったＣ２も４月４日夜の強風でテントフレームが折れ，フレームの破片でテントが破れ，計画が一頓挫した。またＡＢＣでは張り方の悪かったテントが根こそぎめくれとび，中に入っていたものが風で四散する事件も起きた。

幸いにして風は１日中強くなく，午前か午後に弱くなる傾向にある。隊員はその間隙をぬって，必死のルート工作と荷上げに従事した。

Ｃ１からＣ２（6,200ｍ）は傾斜60～70度の氷壁が続く。Ｃ２からＣ３（6,800ｍ）は，短いが急峻な氷壁によって４つのステップに分かれている。ブータン側に尾根が派生し複雑な地形である。

Ｃ３の上部，約7,000mのところに問題の黒岩がある。岩はもろく急峻で，直登はむつかしそうだ。

Ｃ３から黒岩基部までは問題はない。緒方，居谷らは精力的にルートを切りひらいた。黒岩基部からブータン側を250ｍほどトラバースし，そこから頂上稜線につきあげる雪のルンゼを発見した。しかしこのルンゼは40度ほどの急傾斜でテントを張る場所がない。

４月16日，緒方は決心し，斜面の雪をけずって，４人用テントひと張りをはるだけのスペースをつくった。この土木工事に２日費やした。そして休養のため全員いったんＣ１におりた。

5　登　頂

４月16日，わたしは，高所協力員の陳守建と一緒に，砂塵まきあげ，目もあけられないＢＣをあとにＡＢＣに向かった。わずか３時間半で着いた。

ＡＢＣ手前からのクーラ・カンリ

昨日，４月15日，学術隊のうち自然科学班（内藤，沖村，乙藤，武田）とテレビ１人，朝日新聞記者１人，中国科学院４人など合計15人がＢＣを発ち，成都へ向かった。その前日，出発する隊員はこもごも，無線で上部キャンプの連中に別れを告げ，お互いの健闘を祈った。

頂上攻撃態勢は整った。

４月17日，わたしはＡＢＣの岡市登山隊長らとともにＣ１にあがった。体は快調であり，８年前の狭心症がうそのようであった。その日の夜，岡市登山隊長から登頂隊員の発表を行う。第１次隊は居谷，坂本，尾崎，大谷の４人，第２次隊は森長，長谷川の２人。この人選は，その日の午後，幹部で相談のうえきめたものだが，とくに問題はなかった。大谷はテレビ朝日派遣の撮影監督だが，早稲田大ＯＢでＫ２登頂者でもあり，また隊によくなじみ，しかも処女峰登頂のシーンをＴＶでとるのは世界で初めてであるので，彼を加えた。みなも了承した。

４月20日，第１次隊がＣ４に入る。この日はＢＣ入りして初めてというくらいの悪天であった。午後から黒雲が山をかくし，雪まじりの風が強く，夜中になっても雪はやまず降りつづいた。雪崩の危険のあるＣ４の４人のことを思い，わたしは再び帰ってきたＢＣでまんじりともしない夜をすごした。

４月21日，おそるおそるベンチレーターからのぞいた空は青く，また定時交信からは元気な声がとびこんできた。Ｃ４では零下30度だという。出発に手間どり，彼らは10時，テントをあとにした。

頂上稜線につきあげるルンゼは，氷の上に昨日の雪がうっすらとつもり，すべりやすい。12時30分，遂に稜線に出る。北側にはり出した大きな雪庇のあるナイフリッジが続く。

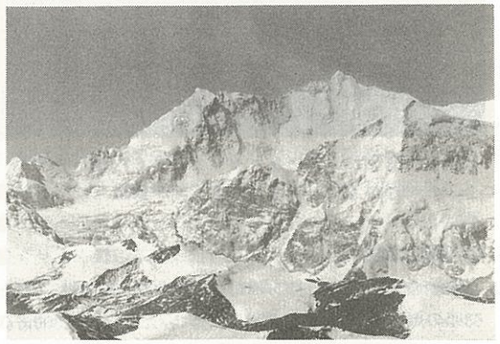
ＢＣからはガスに見えかくれする頂上稜線上の４人が，望遠鏡を通してよく見える。于連絡官，董通訳をはじめ，中国協力隊員などが望遠鏡のまわりに集まる。依田学術隊員はビデオカメラをまわす。刻々と勝利のときが近づく。先ほどまで見えていた頂上がガスの中にかくれた。

やがてトランシーバーから居谷の声がとびこんできた。彼は全隊員によびかけ，そして登頂成功をしらせる。

わたしは思わず于連絡官と抱きあい，よろこびの涙で頬をぬらす。この一瞬のために何と長い年月が流れたことであろうか。いろいろな苦労はすべてこの一瞬のためにあった。すばらしいクライマックスだ。登頂隊員はこもごもマイクで感激と感謝をのべる。みな感激で声をつまらせ，涙を流していた。

頂上は鋭く尖っていてひとりが立つのがやっとであった。ブータンの山，とくに今は第２の未踏峰となったガンケルプンズム（7,541m）がよくみえた。

登頂午後４時15分，そしてＣ４を経由，Ｃ３に帰りついたのは午後８時30分であった。



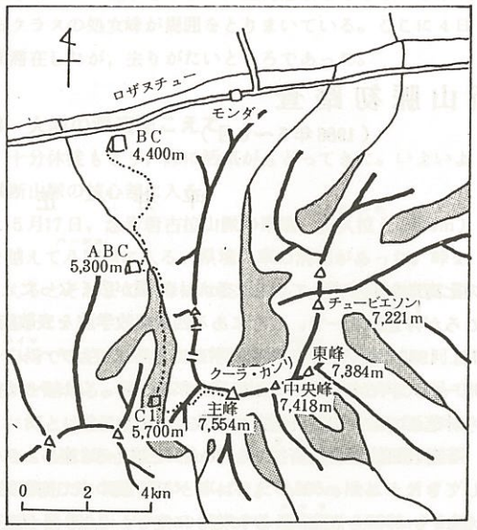
ガンケルプンズムの北面（望遠）

４月22日，絶好の快晴にめぐまれて第２次隊が登頂に成功する。登頂隊員のひとり，長谷川は神戸大から名古屋大の大学院に入り，樋口敬二教授の研究室にいる。この計画の推進役であり，出発前に腎臓結石を病んだり，母を亡くしたり，博士課程進学を棒にふったりして苦労した男だ。登頂隊員を情でえらんではいけないが，彼が登頂できて本当によかった。これは全員の気持ちでもあった。

連日吹きあれていた強風が，アタックの２日間だけうそのように止んだことは，奇跡としかいいようがなかった。わたしは自分のツキを神に感謝した。

全員ＢＣに無事下山したのは４月28日であった。ＢＣ横の小川のほとりには，小さいながら花が咲き，疲れて帰ってきた隊員の心をなごませた。

クーラ・カンリは全員が力を出しきって登った山であった。チームワークは完璧であり，だれひとり欠けても



こうはうまくいかなかったであろう。学術隊員もよく登山隊を補佐した。

５月５日，みぞれまじりの烈風吹きすさぶＢＣをあとに洛扎経由ラサにむかった。ラサで休養ののち，ラサ・成都間2,500kmの踏査をするのであるが，この記事については，章をあらためてのべよう。ひとまず，クーラ・カンリの物語を終わる。

〔神戸大学西蔵学術登山隊，1986年３月９日～６月13日〕

総隊長：　平井一正（54）

登山隊：　岡市敏治（45，登山隊長），緒方俊治*（37，登攀隊長），居谷千春*（35），森長敬（32），坂本淳（29），尾崎久純（27），長谷川浩（27），村山誠之（26），船原尚武（25），柴田隆宏（22），門井淳（22），山田健（31）（＊はシェルピ・カンリ隊員）

学術隊：　内藤親彦（43，農学部助教授，昆虫学，学術隊長），沖村孝（41，工学部助教授，崩壊地形学），依田博（41，教養部助教授，政治学），合田涛（39，教養部助教授，文化人類学），武田義明　（37，教育学部助手，植物生態学），乙藤洋一郎（36，理学部助手，地球科学），北口博教　（41，医学部助手，生理学），藤本一弘（31，医学部助手，耳鼻咽喉学）

報道隊：　大谷映芳（38，テレビ朝日），酒井潮（40，同），桜井勝之（26，同），朝日教之（30，朝日新聞）

編注：　ギャラペリは1986年10月31日日本ヒマラヤ協会隊，念青唐古拉山は1986年５月８日東北大学隊，チュービエソン（カルジャン）は1986年10月14日日本ヒマラヤ協会佐賀西蔵遠征隊によって，それぞれ初登頂された。

なお，クーラ・カンリ登頂報告書は７月中ごろ，神戸新聞出版センターから出版の予定（題名は未定）。

ラサ・成都横断山脈初踏査

（1986年5～6月）

平井一正

1 横断山脈への夢

チベットからビルマの北側を地図で見ると，サルウィン河，メコン河，揚子江などの源流が，何らかの力を横からうけて，1か所に圧縮されたような形で南北に流れているのに気がつくであろう。これは約4,000万年前，インド大陸がユーラシア大陸に衝突したときの地形変動と説明されれば納得がいく。そしてこれらの河をはさんで，東チベットから四川，雲南にかけて南北に走る山脈を総称して横断山脈という。

わたしは若いときからチベットに憧れていたが，この横断山脈一帯の地域にはとくに興味があった。1954年ここに道路が建設され，トラックのキャラバンが走ったという記事をどこかで読んだことがある。トラックはどのようにしてこの河を渡ったのか。このあたりの森林はどのような様相を呈しているのか。ジャングルか。どのような人間がいるのか。日の当たらない森の中にはどのような動物や植物が生育しているのか。想像は想像をよび，夜もねむれない日があった。

その夢が今度実現される。クーラ・カンリの登頂も成功した。学術隊に続いて登山隊がラサ・成都間を踏査することも許可された（実はこの登山隊に対する許可はわれわれがラサにつくまでは不明であった）。

5月10日，登山隊全員と自然科学班を除く学術隊員，于連絡官と董通訳を含め全員で17人がジープ1台，大型バス1台でラサを出発した。

2 ラサから波密へ

ラサ大橋を渡り，ラサ河に沿う道は，道路工事のためしばしば悪路を迂回させられる。車は船のようにゆれ，砂塵で車内は真っ白になる。5月10日昼すぎ，川蔵公路最初の峠芒雄拉（マンジョンウ）（4,800m）を越える。この峠で分かれた河はいずれヤルツァンポー河で一緒になる。黒い包が点在する峠の下りは緑が多くなり，シャクナゲが目にしみる。パンクや故障が重なり，この日は工布江達（コンプチャンダ）で泊まる。雪をかぶった5,000mクラスの山が周りを取りまき，空気も濃い。別天地に来たようだ。

尼羊（ニーヤンフ）河を下るとますます緑が多くなり，ちょうど日本の上高地を車で走っているようだ。河幅が広くなったところが林芝（リンチ）県八一で，ここにある西蔵農牧学院を表敬訪問。1985年夏，ラサに西蔵大学ができるまではチベット唯一の大学であった。ここの宿舎に泊まる。なおラサから林芝までは，現在外国人に開放されている。

5月13日，雪の色斉拉（セチラ）（4,500m）を越える。楽しみにしてきたナムチャバルワもギャラペリも雲の中で何も見えない。峠から3時間，ひた走りに走り，2,000mほど高度をさげたところに「迫竜天険」の難所がある。このあたりが4,000万年前，インド大陸とユーラシア大陸が衝突した接合部分と考えられており，地殻変動が激しく，土砂崩壊が毎年のようにある。昨年も土石流が河をせきとめ，村が土砂で埋められ，トラック30台あまりが河に流された。ここは川蔵公路の“のどくび”といわれているところだ。新しく作り直されたがけっぷちの道は，たえまない落石と土砂崩壊におそわれ，危険きわまりない。現に学術隊が通過した30分後に道が崩れ，トラック2台が河に転落，4日間通行止めになったという。学術隊も登山隊も無事にここを通過できたのは幸運であった。

帰国後，11月に届いた于良璞の手紙によると，われわれが通過した5月の末以後，この道はたびかさなる土砂崩壊のため，通行不可能になり，いまだに閉鎖されているとのことである。本当にわれわれはついていた。

一時はわれわれの目標であったギャラペリは，ここからそう遠くないところにそびえている。そう思って探すが，雲が厚く見えそうにもない。1924年，このあたりを探検したキングドン・ウオードの偉大さがあらためてわかる。

通麦（トンマイ）（2,150m）は川蔵公路の中でもいちばん標高が低い。気候は高温多湿で動植物の宝庫でもある。この日は通麦を通りこして波密まで走った。

学術隊は通麦に1週間滞在したが，その間，1日だけギャラペリが見えたそうである。

波密（ポミ）県扎木（ザムー）は東チベットの中心地で人口6,000人。リンゴの花が満開だ。木造りの大きな家，同じチベットといっても西チベットとは問題にならない自然の豊かさだ。人びとの生活文化は高く，人なつっこい。美人も多く，酒（チンコー酒）もうまい。登高意欲をそそられる6,000mクラスの処女峰が周囲をとりまいている。ここに4日間滞在したが，去りがたいところであった。

3 大河の源流をこえて

十分休養もとり，隊に活気がもどってきた。いよいよ横断山脈の核心部に入る。

5月17日，念青唐古拉山脈の東端，安久拉（アンチユーラ）（4,400m）を越えて八宿（バーシュ）県に入る。県境で車の消毒があった。峠をこえるとそれまでの森林は姿を消し，再び乾燥地帯に変わる。

白馬（バイマ）で1泊ののち，18日早朝，怒江（ルーチャン）（サルウィン河上流）を越える。真っ茶色で，岩をかむ濁流は今まで見てきた河とは全く様相がちがう。ゴルジュのいちばんせまいところに20mほどの橋がかかり，解放軍の厳重な監視が印象的だ。河を渡ると車はまた2,000mほどジグザグの道を登る。ハゲタカの飛来する達馬拉（ダマラ）（4,500m）を越えると，峠の北は絵にかいたような大高原が広がる。

この大高原は邦達（バンダ）高原といい，この北に昌都（チャムド）がある。報道隊のみは，特別の許可を得て昌都まで足をのばした（のちＴＶで放映）。おそらく1982年読売新聞江本嘉伸記者についで日本人として2度目であろう。

昌都へ行く道と分かれ，われわれは川蔵南路をとり左貢（ツオコン）へ向かう。

翌19日，残雪の多い東達拉（トンダラ）（5,000m）を越えると，再び森林帯になる。断崖絶壁をぬってつけられたガードレールもない危険な道をトラバース気味に走り，尾根をひとつまいて瀾滄江（ランザンチャン）（メコン河源流）に出る。この河も怒江と同様，真っ茶色の濁流である。橋のたもとに道路建設の犠牲者の碑があった。やがて車は新緑の柳，桃の花の咲きみだれる集落を通り，アルプ状の高原を登る。道ぞいに立っている電信柱が，遠くから見るとスキーリフトのようだ。4,300mの峠を越えて芒康（マンカン）に出る。ここから南下すると昆明に出られる。

当初申請していたのはこの南下するルートであったが許可されなかった。夢を残して道は東へ。成都からラサへ行く乗り合いバスとすれちがった。9日間かかるという。金沙江（揚子江）との出合いは，高まる期待というような盛りあがりはなく，しごく平凡な広い河原であった。河幅は200mくらいだろうか。

金沙江を境にチベット自治区と別れ，四川省に入る。巴塘（パタン）に泊まる。巴塘は今まで通ってきたどの町よりも大きい。緑も豊富で，町は活気にあふれている。昔から有名な町だ。家の構えも大きく，純朴な村人の温かい人情にふれ，ここでも去りがたい思い出をたくさんつくった。

5月21日，朝暗いうちに出発。海子山拉（ハイツジャンラ）（4,650m）から朝日に輝く6,000mクラスの山が手にとるようにみえる。左手の山は氷河もあり，無名峰ではあるが堂々たるものだ。車は草原を疾走する。軍用トラックがひっきりなしにすれちがう。放牧のヤク，羊，馬にまじり，道をナキウサギのたぐいが横切る。大草原のかなたには無数の雪山がそびえ絵画のようだ。きょうは横断旅行の白眉であった。4,000mを超える峠を8つも越えた。最後の峠から遠くミニヤコンガ（7,556m）が見えた。満開のシャクナゲの美しい谷を下ると，そこが雅江（ヤーチャン）であった。350kmを8時間で走破した。

長江の支流雅礱江（ヤールンチャン）を越え，高時山拉を越えるところで全山倒木，枯れ木の山をみた。地図をみて，うっそうとした森林が続くという感じをもっていたが，期待に反して横断山脈は一般に疎林が多かった。

4 成都へ ― 旅の終わり

新都橋からは舗装道路に変わり，急に文明世界にもどったという感じである。康定（カンデイン）への最後の峠，折多山拉（4,250m）で車をおき，ミニヤコンガが見えるピークまで200mほど歩いて登る。衛星峰を従えたピラミダルな姿に感激して写真を撮る。

康定は東チベットへの玄関口といわれており，古来有名なところだ。昔は打箭炉ともいわれ，その昔，入蔵を志した人の多くが，ここから官憲に追い返されたという。甘孜軍の招待所に泊まる。

道中テントを用意したが，すべてこのような招待所に泊まった。食事も味に文句さえいわなければ十分である。

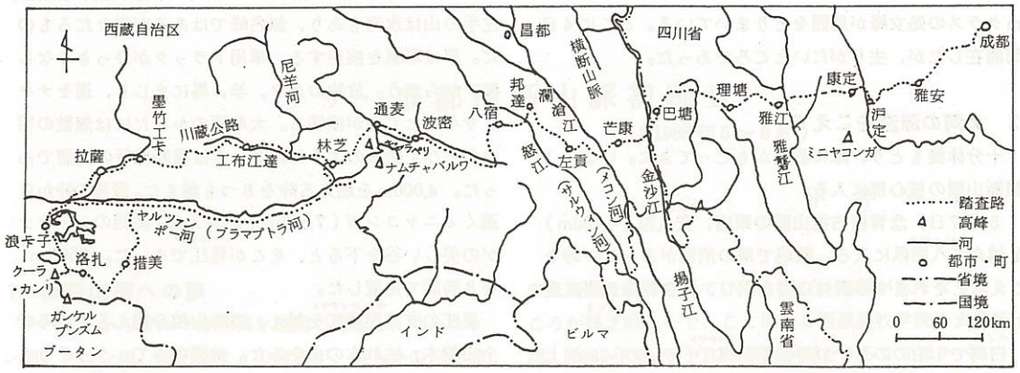
『長征』を読んで感動する場面のひとつに大渡河の決戦がある。泸定（ルーデイン）はその舞台となったところだ。5月24日，ぜひ見たいと思っていた現場に立って，当時40歳だった毛沢東の偉大さをしのんだ。この河岸にはサボテンが生育しており，乾燥地帯の様相を呈しているが，次の日，二郎山を越えて成都盆地に入ったとたん，高温多湿の森林相を呈し，その変化のめまぐるしさに驚く。水牛による田植えと麦の収穫に村人は忙しい。26日，先行していた学術隊と雅安（ヤーアン）で再会した。

東チベットでは問題にならなかった調査も四川省に入ってからはいろいろ問題がでて苦労しているとのこと。登山隊はひと足早く28日に成都入りした。学術隊は1日おくれて成都に着いた。

北京では祝宴が続いた。6月13日に本隊が，17日には学術隊が無事帰国した。

長かった旅は終わった。

わたしはいま力を出しきったあとの爽快感にひたっている。そしていつの日か再び四川，雲南，西蔵に行くことを夢みている。



Glaciological Expedition of Nepal - Langtang Projectに参加して
— 冬のランタン谷での生活 —

（1985年12月～1986年3月）

太 田 岳 史

1 はじめに

1985年12月から1986年3月まで，わたしはネパールに滞在する機会を得た。ＡＡＣＫにはすでに多くのヒマラヤ経験者がおられるが，今回のわたしの経験を書いておくのも何かの意味をもってくると考え，冬のランタン谷でのわれわれの生活を中心に記してみる。

2 5年ぶりのネパール

わたしにとっては1980年以来5年ぶりのネパールに12月19日に着いた。乾季ということもあり，カトマンズは砂ぼこりですぐにも喉がやられそうだ。町の雰囲気は一方通行がいたるところにできている，物価がえらく高くなっているほか，この6月に爆弾騒ぎがあったにもかかわらずあまり変わっていない。

わたしがカトマンズに着いたときには，一緒に越冬する名古屋大の飯田肇君（彼も昔，山登りをしており，今回でヒマラヤは3回目）はすでにランタン谷のキャンチェンにはいっている。とにかく年内にはキャンチェンで彼と合流できるように毎日ボードナートのカトマンズ・クラブハウスと町なかをあわただしく往復し，12月27日シェルパと2人でポーター4人分の荷物をもってランタン谷に向けて出発した。ほこりっぽいカトマンズを離れられてホッとしたというところだ。

3 キャンチェン

わたしが参加した調査隊(Glaciological Expedition of Nepal - Langtang Project，GEN-LP)の1年にわたる基地となったのが，標高3,850mのキャンチェンである。夏隊，秋隊の写真では青々とした緑の中に家畜がのんびりといて，なかなか牧歌的なところのようだ。ロッジが2軒あり，秋隊の途中までは大きい方に居を構えていたが，その後，現地の隊員が少なくなったことから小さい方にベースハウスが移っている。

わたしはキャンチェンに85年12月31日到着し，飯田君と合流できた。途中2,400m付近から雪が現れてきたが，わたしの到着時にキャンチェンでの積雪は約60cmあり，白と黒だけの世界になっている。彼の話では，クリスマスにたいへんな大雪があったそうだ。この雪は南斜面ではかなりはやくなくなるが，平坦地やその他の斜面では結局われわれが下山する2月28日まで消えることはなかった。

冬はランタン村の人が上がってくることもほとんどなく，流域の最奥にポツンといるといった感じがする。

キャンチェンには気象観測露場，ランタンコーラの水文観測地点があり，ここを中心に1年間の水文・気象・氷河観測が行われた。

4 冬の1日

滞在した1，2月の平均気温は－4.1℃，－4.5℃で，わたしが暮らす盛岡より2℃ほど低い程度だ。ただ，標高のせいか体感温度はもうすこし寒く感じる。たいした寒さではないが，ベースハウスの中はすきま風があるし満足な暖房もあるわけではなく，無風のときの日向以外どこにいても暖かくないというのは思ったより辛い。

1日の本格的始まりは朝9時の気象観測からである。ほとんどの観測項目は自記記録がなされているが，機械のチェック，天候，視程，積雪深などの目視のために毎朝の観測は欠かせない。この気象観測は9時のほか12時と17時の3回行われる。この時間の間にランタンコーラの水文観測地点で水位計のチェック，水温測定などを行うことになる。基本的にはこれだけが1日のルーティーンで，雪の状態を見ながら，ほか2つの水文観測地点での観測，ヤラ氷河での観測を行う。

残りの時間は各自の仕事と生活雑事ということだが，生活雑事といっても食事はシェルパがなかなかのものを作ってくれ（といっても，材料の関係でメニューは限られる），多くの時間を必要としない。そこで，ベースハウスにある器材でできる仕事をあらたに考え，雪の断面観測，雪面蒸発量，北面の積雪水量などの測定をはじめることになったが，仕事に追いまくられるといった日はほとんどなくいたってのんびりとした単調な毎日である。

こんな時にわれわれの格好の話し相手となってくれた

のがトレッカーだ。冬には彼ら相手のロッジも休業しており，キャンチェンにやってくるトレッカーはわれわれのところへ訪問してくることが多くなる。彼らとお茶を飲んだり，夜パーティーを持つことはわれわれの生活に大きなアクセントをつけてくれた。また，彼らが置いていってくれる食糧も，われわれの食生活に変化を与えてくれた。

5　雪のこと

ヒマラヤの多くの地域では冬季の降水量は非常に少ないとされている。85年7月から86年6月の1年間にキャンチェンでは約1,200mmの降水があり，85年12月から86年2月にかけては約140mmが記録された。この値はたしかにモンスーン季の1か月の値より小さい。しかし，何回にも分けて140mmの降雪があったのではなく，12月に1回，2月に1回の2回のみの降雪であったので大雪に見舞われた冬という印象を持っている。また，ランタン村の人たちが「こんなに雪が多い冬ははじめてだ」ということからも，異常な冬だったのだろう。

こんな雪の日やその直後の日には，のんびりとした生活が一変してしまう。ベースハウスから100mほどの気象観測露場へゆくにも完全装備で膝までのラッセルとなり，15分ほどかけてまず道づくりから始まる。水文観測地点へは片道1時間の距離になってしまう。そのほか，ベースハウスの周りの雪かき，屋根がギシギシときしんでくるので屋根雪おろしなどとメンバーとシェルパの4人で生活空間の確保に忙しいときを過ごすこととなる。また，降雪中は風も弱くシンシンと降っているのだが，雪がやむと急に谷風がやってくる。すきまだらけのベースハウス内にもシンシンと雪が降り，最大で2cmほど積もる。こうなると室内の除雪も重要となる。

この雪のおかげでいろいろな測定を行えたが，融雪水が地面まで達することは2月末までの間はなく，3月上旬にはじめて地面に達するのではないかと雪温分布や地表付近の土の含水比から考えられた。また，雪面では蒸発量が凝結量を上回っているようだ。そして，チベットの氷河で見られるような氷塔のミニチュア版がキャンチェンの雪面に広がっていた。

6　ヤラ氷河での4日間

冬季の氷河関係の観測のため1月21日から24日の間，ヤラ氷河末端の5,000m地点に滞在した。夏，秋の隊では高所順応ができた後はベースハウスから1日でヤラ氷河末端に到達しているが，冬はラッセルのため途中の4,650mのカルカでの1泊が必要になる。このカルカでは9時ごろまで日があたらず，われわれが宿泊した場所で最も辛い朝になる。

氷河末端では，積雪深は160cmで，最上部汚れ層から上の積雪水量は約150mmであり，キャンチェンの約1.8倍の降雪があったと思われる。

滞在した4日間，昼間はまったくの無風快晴でポカポカ陽気だった。しかし，夜の9時ごろから風が吹き出し，日ごとに強くなってくる。はじめの2晩はたいした風でもなかったが，3晩目の23日夜の風は冬のヒマラヤを味わわせてくれた。

京都を離れてから冬山はおろか夏の山にもほとんど登っていないので，テントのフレームが3次曲線を描きはじめたときはシェルパとともに完全装備を身につけてもしもに備えるとともに，テント周りの点検できびしい夜を久しぶりに体験させられた。しかし，この風も朝9時になるとピタッとやんでしまう。

この夜，飯田君はわたしと入れ代わりのため4,650mのカルカに滞在していたが，そこでも強風のためカルカの屋根がもっていかれたそうだ。風はかなり強かったが，気温はあまり下がらず，－17℃にとどまっていた。

7　ランタン谷でのチベット正月

2月9日がチベット暦の元旦にあたった。2人のシェルパのうち年上の1人は2，3日前からうきうきしているのがわかる。GEN－LPのメンバーでランタンを(第2の)故郷とする貞兼嬢が下宿しているダワ家より招待があったので村へ1泊で下山することにした。

家いえのタルチョーは新しいものに取り換えられ，赤，青，黄色の原色がやけにあざやかに映る。正月料理としてチベッタンブレッドがいろいろな形に焼かれている。味はうまいともまずいともいえない。家の中には床の間にあたるであろうところにチベッタンブレッドに食紅か何かで色をつけたお供えがおかれている。村の人と正月を祝い，そして何かお祓いを受ける。結局この1泊だけで4，5軒の家にお邪魔することになってしまった。シェルパはわれわれとはまた別に夜遅くまで飲んでいたようだ。

ランタン村の正月は派手なところはないが，村人が心から祝い，そして楽しんでいる。あんなに陽気に歌い，踊り，そして飲めるのは非常に羨ましい。毎日の生活の厳しさの裏返しかもしれない。

8　おわりに

わたしが京都を離れてから「ヒマラヤに行くのはチョット難しくなったかな」と考えていたが，思ったよりはやく2回目のネパールに行くことができ，かつ越冬の体験ができたのは非常に幸運であった。GEN－LPの渡

辺興亜氏がランタン谷に送られた手紙の中に飯田君とわたしの越冬隊をさして「学究的には差し置いて，山中での生活ではGEN－LPで最強」といった文面があったと記憶している。最強であったかはともかく，山岳部にいたということが今回の隊に参加できた大きな要因であろう。

われわれが過ごしたランタン谷は，現在，国立公園であり，マキの使用に対する規制が非常にきびしい。われわれよそ者に適用されるのはいたしかたないとしても，古くからそこに住む住民にまでこの規制が適用されるとその生活が維持しがたくなってゆく。「ランタン村で見た人びとの明るさを消してはいけない」と考えたのは，この調査隊にかかわった者が皆感じたことだと思う。

インドヒマラヤCB31峰初登頂

（1982年7～8月）

宗　森　行　生

1　登山隊日誌

（京都～Manali）

1982年7月9日　大阪発

7月10日　早朝，ニューデリー着。日本大使館にあいさつ。インド登山財団（ＩＭＦ）訪問。大使館では探検部ＯＢで朝日新聞特派員の吉村氏を紹介していただいた。大使館の矢島書記官，吉村記者には，インド滞在中たいへんお世話になった。

空港のレストランで朝食を食べた宗森と宮坂が，早くもボーイに金をだまし取られ前途多難を思わせる。

7月11日　ＩＭＦのドミトリーに移る。1泊5ドルで，エアコンもあり広くて快適。各国の登山隊とも仲良くなった。

7月12日　ＩＭＦのスタッフと打ち合わせ。リエゾン・オフィサーのラーマンと会う。マドラス在住で，英字紙インディアン・エクスプレスの記者。ヴェジタリアン。31歳独身。以前に日本隊のリエゾン・オフィサーをしたことがあり，日本語の学習に熱心だ。朗らかで，われわれのパーティーは笑いが絶えない。隊の貧弱な財政事情をよく理解してくれるうえ，仕事熱心で関係機関との交渉はスムーズに進んだ。

7月13～15日　通関，食料・装備購入。中島山岳部長に紹介されたMeteorological Survey（気象庁のような役所）を訪問し，最新の気象情報をきく。

7月16日　夕方，バスでManaliへ出発。

7月17～18日　早朝，Manali着。キッチン・ボーイのティカム・ラムを雇う。キャラバン用にポニー（18ルピー／頭・日），トラクター（400ルピー）を契約。食料購入。Manali登山学校を訪問，キッチンテントなどの装備を借りる。

ティカム・ラムはManali近くのSolong Village在住，23歳。登山の経験はあまりないらしいが，体力，バランスとも抜群。実直な人柄で，わが隊唯一の妻帯者でもある。

キャラバン

（Manali～ＢＣ）

7月19日　地方警察に登山届を出すため，宗森とラーマンはバスでKeylongへ出発。

7月20日　宮坂ら4人は，トラクターに荷物を積んで，Manaliを出発，Chatruで宗森らと合流した。冷たい雨に打たれ，夜，竹田が発熱。

7月21日　ポニー8頭でキャラバン開始。Chhotadaraまで。

7月22日　竹田の体調は依然として悪く，Chhotadaraのレストハウスで沈。

7月23日　竹田，木村，ラーマンはトラックでBatalへ。残りはポニーと一緒に歩く。

7月24日　バス道路を離れ，羊飼いの踏み跡をたどる。ＣＢ13氷河から流れ出る幅約20mの川を，ワイヤロープにぶら下がって渡る。

7月25日　羊の遊牧地を進み，ＣＢ10氷河右岸のモレーン状台地へ。氷河末端が見えたあたりで，馬方がポニーの疲労が激しいといい張りストを起こす。

7月26日　30分ほどモレーン上を歩き，ＢＣを建設。周囲のモレーンより一段低いため目標のＣＢ31は見えないが，すぐ横を雪解け水が流れていて，快適。

登山活動

（ＢＣ～Ｃ２）

7月27日　本格的な登山活動を開始する。宗森，宮坂，木村の3人でルート偵察と荷上げをする。モレーン上端から氷河の取り付きまでは，ガレ場と硬い雪面が交じった急斜面をトラバース。約2時間で氷河に取り付き，ザイルを結ぶ。氷河上は傾斜は緩いが，高度の影響のためか体が重い。昼前に装備をデポして引き返す。

ＢＣで休養していた竹田は，高度順応も兼ねて裏山に登った。そこから眺めると，氷河源頭からＣＢ31の北東尾根へ続いている支尾根が，ルートに使えそうだった。

7月28日　不調の木村を除き5人で荷上げ。氷河取り付きまでのトラバースでラーマンが何度かスリップ。山歩きにはあまり慣れていないようだ。昨日のデポ地からさらに1時間ほど前進。体が軽く感じる。

ラーマンはトラバースで懲りたらしく，ＢＣにとどまるといい出したので，われわれも安心した。

7月29日　朝，宮坂の顔が腫れて丸くなっているのに気づいた。ラシックス（利尿剤）を半錠服用すると，30分ほどで小便が数回出て，みるみる回復した。

木村が復帰し，ラーマンを除く5人で荷上げ。昨日よりさらに1時間ほど前進して，氷河のまん中にＣ１を建設。宗森，竹田はそのままＣ１に入った。

7月30日　今日も快晴。日射は強烈ですぐに汗だくになる。雪も9時過ぎにはくさりだし，よくもぐってしんどい。Ｃ１の宗森，竹田はＣ２へのルートを偵察。日本で計画していたＣＢ10側のコルへ登る雪面は，傾斜が急で雪崩の跡もある。横目で眺めただけで通り過ぎ，氷河を詰める。昼前に源頭に着いた。ここはＣＢ31の北東尾根から下りてくる支尾根と，ＣＢ30へ続く尾根の中間の最低コルで，ＣＢ28方面からきた氷河がＣＢ10氷河へ乗っ越している。ここにＣ２を作ることにする。支尾根の下部は広大なガラ場，上部は岩の間に少し雪が残っており，ルートとして十分使える。宮坂，木村Ｃ１入り。

（Ｃ２～頂上）

7月31日　4人でルート工作。支尾根中間の大きな岩の基部からフィックスを開始。岩はぼろぼろで，瓦を積み重ねたようだ。竹田が慎重に60mフィックス。下部にも60mザイルを1本垂らしておく。

8月1日　さらに60m 2ピッチでジャンクション・ピーク（ＪＰ）に達する。傾斜がきつく，岩ももろくて神経を使う。ＪＰから見た北東尾根は，予想に反してみごとな雪のナイフリッジだった。午後1時ごろから雷が鳴り始め，追い立てられるように下降する。氷河上でついに雷につかまった。突然ピッケルがブーンとうなった。髪が逆立ち，ヤッケがパチパチと音を立てる。全員ザックをほうり出してうずくまる。頭の真上で雷鳴がとどろき，気温が急降下してたたきつけるように雪が降り出した。生きた心地がしないというのは，こういう状態をいうのだろうか。40分ほどでようやく雷鳴が遠のき，ほうほうの態でＣ１へ逃げ込んだ。Ｃ１横の無名峰の懸垂氷河が不気味なので，テントを100mほど移動する。

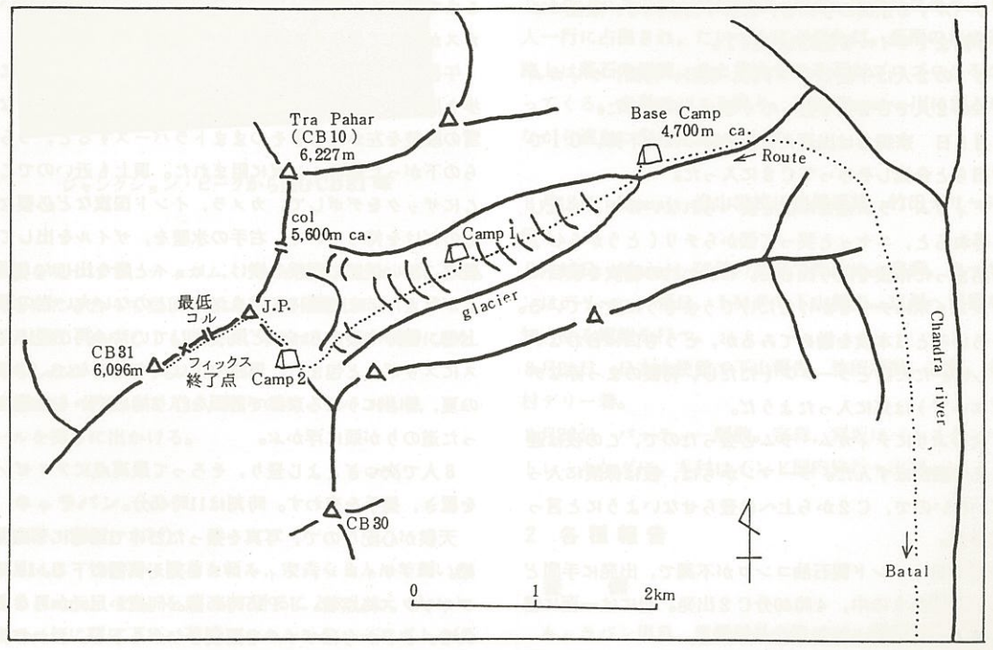
8月2日　休養と雷の様子を見るため沈。午後一時雷，みぞれがあった以外は快晴。

8月3日　宗森，木村はＢＣへ下る。宮坂，竹田はＣ１で沈。

8月4日　Ｃ１の宮坂，竹田はＣ２予定地へ荷上げ後，ＣＢ28側の氷河を下降してＣＢ31の南西尾根を眺めてみた。ルートについて相談するためＢＣへ下りる。ＢＣの2人は沈。

8月5日　宗森，宮坂Ｃ１入り。相談の結果，とにかく一度，北東尾根を試みることにした。

8月6日　宗森，宮坂が氷河源頭のＣ２予定地に着くと，デポしておいた食料はカラスに完全に食い荒らされていた。辺り一面，ポリチューブやアルミ袋の切れ端が散乱



している。被害は乾燥肉29袋，餅3kg，バター½ポンド，ようかん2本，レーズン0.5kgそのほか乾燥野菜，調味料類もすべて袋を破られていた。2人ともカラスの食欲にあぜんとする。乾電池30本も，かなり離れた雪面上にまき散らされていた。この辺りのカラスは羽を広げると1m近くもある大型のMountain Crowで，6,000m近い高所を悠々と飛んでいる。後でティカム・ラムに聞くと，「子羊や人間の赤ん坊をわしづかみにして連れ去り，食ってしまう」というどう猛なものらしい。

気を取り直してC2を建設，ルート工作に向かう。尾根の途中にデポしたカラビナ類も，すべて袋を食い破られ，危うく斜面に引っ掛かっていた。JPから宮坂トップで，片足しか乗らない細い雪稜を慎重に下り始める。雪がくさっているうえ，あちこちに氷が顔を出している。ふたりっきりでは心細いので，この日は50mフィックスして終了。雪稜は予想に反してかなり氷が多く，アイスハーケンを荷上げする必要がある。

夕方，C1に入った竹田らと交信，食料，アイスハーケンの荷上げを頼む。

8月7日　朝，C1と交信したところ，木村の体調が悪く行動できないという。C2の2人は，アイスハーケンはあきらめて工作に出る。

昨日の終了点からしばらくリッジ上を進んだ後，数m下の岩のバンドをめざす。岩は厚い氷に完全に覆われていたが，雪面はいつなだれてもおかしくない状態なので，氷の上をトラバースする。ほとんどピンが取れないので，ジッヘルする宗森の手にも，思わず力が入る。最低コルの手前までザイルを延ばして終了。

C1の2人は午後BCへ下降，明日，竹田，ティカム・ラムの2人でC2まで登ってくることになった。

8月8日　宗森らは出迎えと荷上げのため下降，C1で竹田らと合流しそろってC2に入った。

ティカム・ラムは日本食を食べられないので，心配して尋ねると，ニヤッと笑って懐からチリ（とうがらし）の詰まった布袋を取り出した。われわれの雑炊を横目に，アルファ米にチリをかけただけでうまそうに食べている。いろいろと日本食を勧めてみるが，どうも口に合わないらしい。ただ餅とラーメン（ただし，特製のまっ赤なチリスープ）は気に入ったようだ。

久しぶりにティカム・ラムと会ったので，この夜は遅くまで話がはずんだ。ラーマンからは，彼は保険に入っていないので，C2から上へは登らせないようにと言ってきた。

8月9日　インド製石油コンロが不調で，出発に手間どる。月明かりの中，4時40分C2出発。岩には一面に霜が降り，月の光に青白く輝いている。

昨日までのフィックスをアイスハーケンで補強しながら進む。最低コル前後はまったく岩が出ておらず，完全な雪のナイフリッジ。足元は，両側とも氷河まで数百mすっぱりと切れ落ちている。雪崩が怖いので，忠実にリッジ上を歩く。ところどころ雪の下が空洞になっていて，突然，腰まで落ち込み冷や汗が出る。短い間隔でスノーバーを打ち込んでゆく。コルを通過すると，傾斜も落ちてかなり楽になる。最後に急な岩と氷のコンタクトラインに60mフィックス。終了12時30分。気温は高く，周囲では雪崩が頻発している。足元からもときおり，表層雪崩が落ちる。C2帰着14時45分。ルート工作は本日で終わり，明日はいよいよ頂上をアタックする。

8月10日　ホワイトアウト。4時ごろには雨が降り出し，アタックは中止。天候は1日中不安定だった。

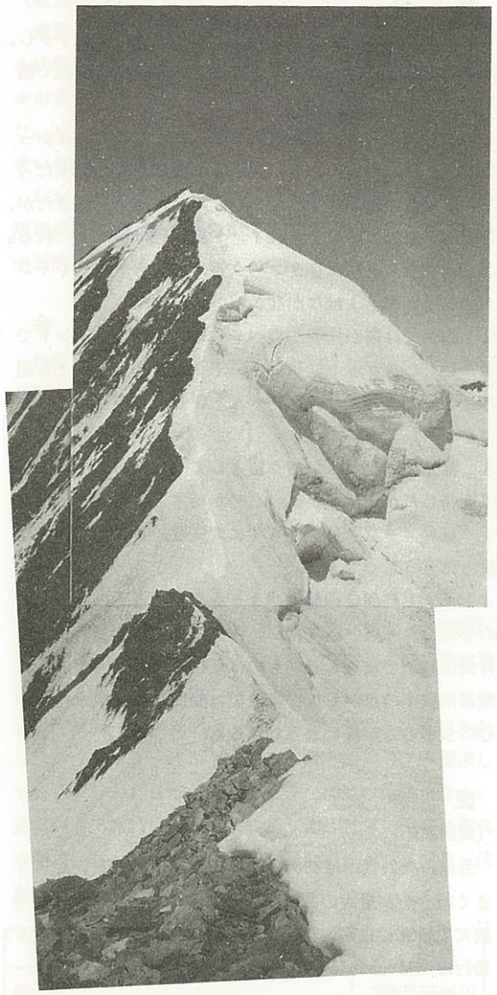
8月11日　4時にテントを出る。ガスで視界は数十m。風はなく，気温は氷点下5度くらい。C2に残るティカム・ラムには，明日になってもわれわれが帰らなかったら，BCのラーマンに連絡すること，1人で上部に登ってきてはいけないことなど手短に注意して，ヘッドランプをつけて出発。JP6時。フィックス終点8時。ここから尾根の側面のもろい岩場を3ピッチで抜けると，下からも見える巨大な雪庇の直下に出る。そのまま2ピッチトラバースし，竹田がザイルを2本つけて偵察に行く。稜線は広く，ザイルをはずす。出発以来7時間ぶりに雪面に腰を下ろしてひと休みする。

核心部を通過したので，3人とも思わず頬が緩む。ここまで来たら，登頂はほぼ確実だ。温かい紅茶がうまい。ガスが切れて薄日がもれてきた。

午後から天気が崩れることが予想されるので，すぐに歩き出す。ラッセルはスネからヒザ。雪は重い。顕著な雪の段差を左から巻きそのままトラバースすると，つららの下がった急なルンゼに阻まれた。頂上も近いのでここにザックをデポして，カメラ，インド国旗など必要なものだけを持っていく。右手の氷壁を，ザイルを出して登る。細い稜線に両手を掛け，ヒョイと顔を出したら頂上が見えた。まだ誰にも踏まれたことのない丸い岩の頂上は，雪の中から3mほど頭を出していた。再び濃いガスにスッポリと包まれ，周囲の山は何も見えない。昨年の夏，暑さにうだる京都で計画を作り始めてからの長かった道のりが頭に浮かぶ。

3人で次つぎとよじ登り，そろって最高点にアイゼンを置き，握手を交わす。時刻は11時45分。

天候が心配なので，写真を撮っただけで12時に下山開始。アプザイレン，フィックスを交え慎重に下る。14時フィックス終点着。JP15時45分。何度か足元からなだれる。JPからはザイルを回収しながら下る。われわれ



ジャンクション・ピークから望むCB31峰

の姿を見つけて，ティカム・ラムが迎えに上がってきた。肩をたたき合って登頂を喜ぶ。C2帰着17時。

8月12日　途中C1も撤収し，各自40kg近い荷物に息を切らしながらBCへ。

8月13日　竹田ら3人は，帰りのキャラバン用に，ミュールを探しに出かける。

キャラバン

（宗森，宮坂，木村）

8月14日　竹田らに隊荷を頼み，宗森ら3人は羊飼いの通るHamtah Passを越えて帰ることにした。Batalまで一気に駆け下る。茶店でロキシーのハーフボトル（5ルピー）を買い込み，酒盛りをしながら道端でバスを待つが，日暮れまで車は1台も通らず，その場で沈。

8月15日　バスでChatruへ。茶店でマトンカレーを腹一杯食べた後，Mahura Top西方の谷をめざす。羊はたいしたクライマーだと思いながら，フンの散らばる急な岩場を三点支持で登る。谷間には羊飼いの野営の煙が立ち昇っていた。両側には数百mの岩壁がそそり立ち，南にはインドラサン，北にはChandra川を挟んでCB山群を望む絶好のキャンプ地だ。

8月16日　14時ごろ，ようやく雨がやみ出発。Hamtah Passに立つと西面のHamtah Nalaは一面の雪渓で岩にもコケがびっしりと付いている。荒涼とした東面とは対照的だ。

8月17日　明るく，緑豊かなHamtah Nalaを駆け下る。岩峰と雪渓の世界から，チョウの舞うお花畑を走り抜け，牛がのんびりと草を食む草原地帯，セミしぐれの樹林帯へ。日の暮れるころ，ようやく，リンゴ畑に囲まれたManaliにたどり着いた。1か月ぶりのManaliは，リンゴの収穫のまっ盛りで，甘酸っぱいにおいにつつまれていた。

キャラバン

（竹田，ラーマン，ティカム・ラム）

8月15日　4頭のミュールに隊荷を積み出発。昼前，ワイヤ渡渉点着。午後は増水でミュールが渡れないので沈。

8月16日　雨のなか，11時にBatal着。すぐにバスに乗り込む。バスの後ろ半分は酔っぱらった陽気なチベット人一行に占拠され，たいへんにぎやかだ。豪雨のため道路上は落石の連続。ひと抱えもある石がゴロゴロころがってくる。全員でバスを降り，石をChandra川に落としながら進む。夕方，Manali着。

8月18日　Manali登山学校に装備返却。竹田デリーに帰る。

8月19日　Manali郊外の温泉で骨休め。宗森，ラーマンはデリーへ。翌日，IMFで下山報告。京都へ登頂を知らせる電報を打つ。

8月21日　日本大使館で下山報告。竹田帰国。宮坂，木村デリー着。

8月22日　パーティー解散。宗森，宮坂はパキスタンへトレッキングに。木村はインド国内旅行へ出発。

2　各種報告

装　備

キャラバン用具，登攀用具を除けば，国内の春山山行

とほぼ同じ。輸送費用を考え，生活用具などはなるべく，インドで調達することにした。

（幕営用具）　Ｃ１，Ｃ２はルームのウインパーを使ったが，天候は思ったより良く，もっと軽量のドーム型でも十分だった。

（生活用具）　インド製圧力釜は非常に有効。テルモス，ポリタンはすべてインドで買ったが，口の締まりが悪く，すぐ漏れる。とくにケロシンの運搬には苦労した。

（登攀用具）　ＪＰ～頂上間の稜線が予想以上に悪く，フィックス・ザイル，ハーケン類はほぼ使い果たした。スノーバーは，もろい岩にたたき込み，ロックハーケンの代用としても大活躍した。

（リエゾン・オフィサー用装備）　登山規則で定められた支給品（羽毛服，登攀用具など）を用意したが，ラーマンは実際には何ひとつ山の装備を持ってきていなかった。真夏のデリーで，毛のズボンやシャツを探すのはたいへんで，また驚くほど高価だった。キッチン・ボーイの装備はManali登山学校で借りたが，古いうえに新品価格相当額の保証金を要求された。

主要装備リスト

品　目	規　格	数量	備　考
テ　ン　ト	6人用ウインパー	2	C1，C2用。C1用は内張りなし
	3人用ドーム	1	L.O.用
	4人用ウインパー	1	キッチンテント。Manali登山学校で借用
ツェルト		2	
養生シート			デポの覆い，フライシートとして有効
ザ　イ　ル	φ9mm40m エバードライ	3	行動用
〃	φ8mm60m 撚り	6	フィックス用。計600m
〃	φ8mm200m 〃	1	
〃	φ9mm40m 〃	1	
捨　て　縄	φ6mm	50m	
シュリンゲ		85	
カラビナ		85	
ハーケン	ロック	45	
〃	スクリュー	15	
〃	パイプスクリュー	5	
ボ　ル　ト		6	
ユ　マ　ー　ル		4	
スノーバー	65cm	24	
トランシーバー	出力500mw	2	

食　料

Ｃ１以上の食料はすべてレーションに分けてパックし，日本から持っていった。キャラバン～ＢＣ用は現地で購入した。主な反省点は

1　キャラバン中の食料計画をまったく立てていなかったので，買い出しのときに混乱したのは少々お粗末だった。現地食の料理はすべてキッチン・ボーイに任せたが，登山活動も後半になると純インド風料理は胃にもたれる。ヴェジタリアン用保存タンパク質のニュートリー（インド式高野豆腐？）はなかなかおいしい。

2　高所では餅が比較的食べやすい。行動食はインドで購入したビスケット，ジャム，ドライフルーツなどを組み合わせて使ったが，たいへんおいしく，食べやすかった。

3　軽量・安価なタンパク質として「豆腐の素」に大いに期待したが，沸点が低いためか待てど暮らせど固まらず“豆腐スープ”しかできずに大失敗。ＢＣで圧力釜を使ったらうまくできた。

4　インド料理は砂糖，バターを多用するということなのでたくさん買い込んだが，大量に余った。われわれの胃袋は高所では脂っこいものは受け付けなかった。また酸素消費率の点からも，高所では脂肪よりも炭水化物中心の食事の方が良いと思われる。

医　療

（高所順応）

全員，海外登山は初めてなので，高所順応をいかにうまく行うかが最大の課題だった。各種報告書，医学書を読んで研究したが，なかでもAmerican Alpine Club発行の“Mountain Sickness － Prevention，Recognition and Treatment”（Peter H. Hackett）という小冊子がよくまとまっているうえ，対応策も実戦的で役に立った。（編注：『高山病 － ふせぎ方，なおし方 － 』ピーター・ハケット著，栗山喬之訳，山洋社，1983年。邦訳がでている）

また５月に京都で開かれた登山医学研究会を聴講したが，有益だった。６月には全員で富士山頂で１泊した。高所障害の薬としては，利尿剤のラシックスを持参した。

キャラバンでは，3,400m の Chatru から4,500mのＢＣまで６日間かけて歩いたのが順応に役立ったようだ。テント地到着後は，毎日１～２時間かけて裏山を登降した。水分を十分取り，酒を控えた。登山中は荒い呼吸をしないように運動の強度に注意した。ＢＣ以上では，初めて経験する高度では，２，３回往復してから泊まるというオーソドックスな方法をとった。

（健康状態）

隊員は全員，一時的には体調を崩して休養を必要とする状態になった。とくに下痢，痔など消化器系のトラブルが多かった。重い高山病症状は，幸い１人も出なかった。リエゾン・オフィサー，キッチン・ボーイはＢＣに着いた時点で頭痛を訴えた。

なお，武田薬品工業株式会社，第一製薬株式会社，新河端病院には，薬品類の提供，医学的アドバイスなどで全面的にお世話になった。

会　計

京都大学学士山岳会遠征基金から40万円の補助をいただいた。また同会からは非常用の予備金として100万円を貸していただいた。

（支出）

1　装備費　国内で使っている個人装備をそのまま使ったため，安上がりだった。主な支出はリエゾン・オフィサー用装備，フィックス用ザイル，スノーバーなど。

2　装備輸送費　行きは約160kgを航空貨物（1,600円／kg），約100kgを手荷物として持っていった。日本に送り返すときは航空貨物と船便を利用した。

3　保険料　登山規則は，事故の際の捜索，収容にかかったヘリコプター代が支払われる保険に入るよう要求している。しかし日本にはそのような種類の保険はなく，通常の海外旅行用保険（危険割り増し付きで非常に割高）を利用した。万一の場合は死亡保険金でヘリコプター代を支払わねばならないだろう。

収　入	
個人負担	158万5836円
AACK遠征基金からの補助	40万0000
寄　付	4万6000
合　計	203万1836円

支　出	
渡航費（４人分）	87万2000円
登山料（5,000ルピー，手数料含む）	13万2100
装備費	8万0285
食料費（国内購入分）	6万0671
装備輸送費	16万8446
保険料（４人分）	20万4880
事務費	5万1704
医薬品代	4000
海外使用金（滞在費，交通費など）	45万7750
合　計	203万1836円

3　登山をふり返って

４年前の夏，ぼくたちは未踏の6,096m の頂上に確かに立っていた。全員登頂は逸したとはいえ，またヒマラヤ登山史上では大した意味はもたないとはいえ，とにかく初登頂に成功し，全員無事に下山できたことは十分な成果だった。

このパーティーの成立を考えるとき，剣岳での遭難は避けて通れない。1980年12月の北方稜線パーティーの遭難は，ルームにとって非常に大きな衝撃だった。長時間にわたる論議，検討をへて，ルームとして自信をもって出したパーティーが，赤谷尾根の下山中という思いもよらぬ状況で遭難し，竹村義文，伊藤健一郎という信頼できる２名を失ったことは，個人的チョンボでは済まされず，ルームの山登りそのものを問い直す必要を感じさせた。

遭難後のルームは混乱した。山を登ることの是非を含め，さまざまな葛藤が生じた。とくに遭難当時４回生だったぼくは，誰よりもその葛藤を感じるべきだった。

そのような混乱の中で，遭難の後処理も一段落した1981年夏，ＯＢの太田岳史を中心にこのパーティーは発足した。月並みな言い方だが，ぼくたちは「登りながら考える」方法を選んだ。

登頂までの１年間，ぼくたちはプライベートな時間の大半をこの登山のために費やした。剣の遭難からこのパーティーが断絶しないよう精一杯努力したつもりだが，現実の多忙さを前に，それは不十分なものにならざるを得なかった。

４年をへた今，この記録を書くにあたって改めて当時を思い起こせば，この登山がぼく個人にとって何であったのか，ルームにとってどういう意味をもっていたのか，いまだに整理しきれていないことを感じ，内心忸怩たる思いを禁じ得ない。

ぼくたちはこの登山を，ルームの国内山行の延長と位置づけ，できる限りシンプルな形をめざした。しかし実際には，国内，国外の多くの方がたのご助力，ご助言がなければ，成功はおぼつかなかった。改めてお礼を申し上げます。

京大山岳部インドヒマラヤ登山隊 1982年
宗森　行生（24歳）　文学部Ⅵ回生
宮坂　　実（23歳）　農学部Ⅳ回生
木村　哲郎（29歳）　医学部Ⅲ回生
竹田　晋也（21歳）　農学部Ⅲ回生
N. S. Raman　リエゾン・オフィサー
Tikam Ram　キッチン・ボーイ

〈編集後記〉

• 1986年の総会で，『時報10号』を今年度中に出す予定ですと宣言してから，1年たってようやくできあがりました。近藤会長をはじめ，お忙しいなか，原稿をお寄せくださいました方がた，ならびに座談会に出席していただきました方がたにお礼申し上げます。

• 当初，本号は「ナムナニ特集」，続いて次号を「マサコン特集」と計画していましたが，ナムナニの隊員（私も含めて）の原稿が集まらないうちに，海外登山の原稿が続々と寄せられ，『50年史』の座談会（これでも半分の長さに編集していただきました）の原稿も加わり，ページ数が埋まってしまいましたので，ナムナニは次に回して，見切り発車しました。次号こそ，「ナムナニ特集」にしたいと思います。（既に，日中友好納木那尼峰合同登山隊編『ナムナニ』毎日新聞社，堀了平著『偉大なる獅子マサ・コン峰登頂』講談社が出版されています）

• 次の11号の原稿を募集しています。記録の新旧を問わず，また，ご意見などもお寄せください。

• 本号の編集に次の方がたのご協力を得ました。重ねてお礼申し上げます。土倉九三氏ご夫妻。斎藤清明氏。井上治郎氏。人見五郎氏。吹田啓一郎氏。中山茂樹氏。中村由美氏。

1987年5月8日　　編集・校閲　伊藤宏範

1987年5月17日

発行所　京都市左京区吉田本町京都大学内
社団法人　京都大学学士山岳会
TEL　(075)771−2500

代表者　AACK会長　近藤良夫

印刷所　(株) 土倉事務所
京都市北区小山西花池町1の8
TEL (075) 451−4844